

7/12 (日)

シンポジウム「ESD×CSRを理解する7つの質問」

日時：2009年7月12日(日) 13:30～17:30

場所：立教大学池袋キャンパス 14号館 D201 教室

講師：阿部治・岡本享二・新谷大輔・中西紹一・中野民夫・福田秀人

司会：川嶋直

司会 ただ今より立教大学 ESD 研究センターが主催いたしますシンポジウム「ESD×CSRを理解する7つの質問」を、開会いたします。

私は、今日の進行役を務めます立教大学 ESD 研究センター、CSR チーム代表の川嶋と申します。宜しくお願いいたします。

それでは最初に、センター長の阿部治より、ご挨拶を申し上げます。

開会挨拶～SDからESDへ、そして大学の役割～

阿部 こんにちは。今日は、お休みの日で、選挙の投票日であるにもかかわらず、お忙しい中お集まり下さりましてありがとうございます。



私ども ESD 研究センターは、今年で設立3年目になります。ESD の概要は、後ほど私よりお話いたしますが、簡単に申しますと、持続可能な社会を築いていくためには、“教育”が非常に大事だということで、学校教育だけではなく、地域や社会における学外教育を含めたすべての教育に、“持続可能な社会”の意識付けを進めていこうという活動です。

そもそも ESD は、2005 年から「国連 ESD の 10 年」として運動が始まっておりますが、この「国連 ESD の 10 年」

運動の提案者は日本です。日本政府が NPO と一緒に提案し、私も NPO の一員として加わりました。

そして、2009 年 3 月末に「国連 ESD の 10 年」の中間会合が、ドイツのボンであり、最終会合の開催地が日本に決まりました。最終会合の開催地に関しては、私も日本での開催にむけていろいろと活動してきたのですが、かつて SD (Sustainable Development) が提案されたブルントラント委員会 (1984～1987) も、1980 年のナイロビ会合で日本政府が提案したことによって開かれたという歴史があります。ですから、今、世界の潮流になっている“持続可能な社会”、あるいは“Sustainability”、あるいは“Sustainable Development” という概念の一連の世界的なムーブメントの出発点は、日本から発信していると言っても過言ではありません。

しかしながら、世界の“持続不可能性”というのは、ますます進行している。どうしたら、この持続不可能な社会を変えることができるのかといった時に、遠回りではありますけれども、“教育”がいちばん大事ではないかと思うのです。そのために、“ESD”を私どもは提案しました。

まず、SD があって、さらに、それを具体化していくための ESD を提案した、こういう流れがあって、では、どんなふうに ESD を進めていくか。一方で、ESD 自体が、一般的にはまだまだ耳新しい概念だということもあり、なかなか広がっていない。そういう中で、この ESD をどう進めていくかということを概略として考えていこうということで、日本の大学のなかで一番最初に立教大学が ESD を研究対象にした ESD 研究センターをつくりました。今では、私どもの大学だけではなく、岩手大学や上智大学、徳島大学や岡山大学など多くの大学が、ESD の取り組みを始めています。

その背景には、今、持続可能性を脅かす温暖化などのさまざまな課題がありますが、そういった課題は既存の縦割りの学問の在り方ではもう対応できないという考えが普遍化してきた現状があります。そのような中で、新しい学問の“持続可能性学”みたいなものを作っていこうという動きがあり、また、今まで象牙の塔であった大学は社会に対して実践

的な寄与をしていなかったという反省もあり、大学が社会に対してどのように貢献をしていくのか、いわゆる“大学の社会的責任”、つまり“USR (University of Social Responsibility)”が、今、強く問われています。その中で、大学としても、ESDの取り組みを始めており、そういうふうな一環の流れの中で、私もESDに取り組んでいます。

立教大学は、このESD研究センターに留まらずにいろいろな活動をしています。立教大学のホームページを見ていただければ、今日も、さまざまなシンポジウム等が行なわれていることがわかりますが、そういうところも、ぜひ覗いてみてほしいと思います。

特に、立教大学は、今年から“フラッグシップ研究”というものを、大学をあげて始動させました。AICC (アイック) という研究機関を設立し、「アジアにおける知的協働と社会デザイン研究」というタイトルのもと、バングラデシュ、フィリピン、タイ、韓国の四カ国を主にして、NGOや他大学などと連携しながら研究を進めることになっているのですが、その中で、日本を含むアジアの“民衆知 (local knowledge, indigenous knowledge)”を重要視しようと考えています。日本でいえば、例えば、地域の山菜などの自然資源をどう持続的に活用してきたか、そういった知恵は、これまで各地域で受け継がれてきたのですが、残念なことに現在は失われつつあります。しかしながら、その知恵は言うまでもなく、地域の持続可能性にとって重要なわけで、それらを“民衆知”として見直し、もう一度、広げていこうじゃないか、例えばではありますが、“民衆知の復活”のような活動を通して、アジアでの持続可能な社会を築いてゆく“社会デザイナー”を養成していく取り組みを、大学も始めています。

2010年4月から博士課程の学生たちがAICCに就学するのですが、例えば、バングラデシュのグラミン銀行やダッカ大学、あるいはブラックというアジアでいちばん大きなNGO、タイのPDAという著名なNGOなど、さまざまな他国の機関とネットワークを構築しながら、博士課程、ひいては研究者を、心おきなく育てていくことを念頭においています。

さて、これから4時間ほど、宜しくお願いします。CSRにおけるESDの方式は多様であると思いますが、その中でも私たちのチームは、非常にユニークな視点からアプローチができると自負しています。

ぜひ最後までお聞き願いたいと思います。よろしくお願います。

イントロダクション

～講師紹介およびESD×CSR“馴染み度”調査～

司会 ありがとうございました。

シンポジウムの開催に際して、このようなチラシを作りました (p.38 参照)。

実は、「ESR×CSRを理解する7つの質問」というタイトルを考えた時、質問をする側として、

- ・ESDとは何か？
- ・CSRとESDの関係性は？
- ・ESDの“D”にはどのような意味があるのか？

という、3つの質問だけしか考えていなかったのです。しかしながら、チームメンバーで集まりながら「7つの質問」を練り出しまして、それらを、本日お配りしたプログラム表 (pp.39-40 参照) に載せています。今日は、その7つの質問に解答するかたちで、進行をしたいと思っています。



さて、ESD研究センターのCSRチームは、2008年10月の金曜日の夜に5回連続で各2時間半くらいのセミナーを連続で行いました。その記録は、2008年度版の『CSRセミナー録』に詳細が載せられております。ちなみに、そのセミナーに参加しましたという方は今日どのくらいいらっしゃいますか。(参加者挙手) ありがとうございます。15人くらいいらっしゃいますね。

今年はその連続セミナーの続きのシンポジウムでして、実は今年度の10月にも、この続きのセミナーを2回開催することが予定されております。プログラム表に記しているのですが、10月4日と10月18日の日曜日に、2回のセミナーを開きます。それぞれに4時間のセミナーを、少し人数を少ぼって開催しようと思っています。

今回は“シンポジウム”で、次回を“セミナー”と申しているのは、10月の時は、参加した皆さんと一緒に作業をしたいと思っているからです。一緒に考え出したり、作り出したりする作業をしたいと思っていますので、今日ご参加されま

した皆さま方に、できるだけ多くご参加いただければ幸いです。ぜひ次回セミナーのこともお考えになりながら、今日の時間を過ごしていただければと思います。宜しくお願いします。

今日のシンポジウムは4時間と長くなっておりませんが、非常に幅広いテーマの話をするので、概論的なイントロダクションのお話になるかと思えます。ですから、特に、昨年の連続セミナーを受けられた方の中には、「それはもう聞いたよ」というお話があるかもしれませんが、人間は忘れる生き物でございますので、二度聞くともっとわかるということがございますので、大事なことは何度でも聞こうということで、お付き合いをいただければと思います。

それでは、今日お話をさせていただく ESD 研究センターの研究員を、ご紹介させていただこうと思います。

それでは、お名前と一言をお願いします。



阿部 阿部治です。先ほどご挨拶しました。環境教育に30年ほど携わっております。

川嶋 今日の司会をしております川嶋直です。立教の大学院で教え始めて4年くらいになります。それまで、そして今でも森の中の実践を中心に活動しています。

岡本 こんにちは。岡本亨二です。スポーツが好きで、今日の朝、月島から駒沢公園まで自転車で3時間半くらいかけて往復しました。ばかなことしたな、と、今、反省しています。宜しくお願いします。

新谷 新谷大輔です。おなじみの顔が何人かおられるのですが、立教の大学院21世紀社会デザイン研究科で授業を持っています。今日は、授業とは、ちょっと違った切口でお話しようと思います。宜しくお願いします。

中西 中西紹一と申します。異文化コミュニケーション研究

科で、環境コミュニケーションを教えさせていただいておりますが、本業は広告のプランナーをさせていただいております。基本的には教育の部分に関心があるものですから、今日は、その話をさせていただこうと思っています。宜しくお願いします。

中野 中野民夫と申します。ふだんは博報堂という広告会社で、わりと社会的なテーマを中心に仕事をしております。立教大学の大学院21世紀社会デザイン研究科では、ライフサイクルという授業を担当しているのですが、昨年から屋久島で、「森に学ぶライフサイクル」と称して特別講義をしています。明治大学などでも環境関連のことを教えています。また、NGOの活動にもいろいろと関わっております。

福田 福田秀人です。2009年3月まで立教の大学院21世紀社会デザイン研究科で教授をしておりました。現在は、コンサルティングをメインにして仕事をしています。

私がかつての範囲で、最もしっかりCSRに取り組んでいる、と感じる会社がグンゼ(株)です。他にも、素晴らしい活動をしているな、と思う企業はあるのですが、日本のメーカーは、だいたいしっかりしていると思います。

さて、皆さまのお手元に、グンゼ(株)の『CSR報告書2009』(<http://www.gunze.co.jp/csr/csrreport/2009.html>)がございますが、この最後のページを開いていただきますと、第三者意見のページがあり、そこに私が第三者意見を書いています。これまでの第三者意見と違うと思います。時間のあるときに、読んでおいてもらえればと思います。

川嶋 ありがとうございます。

それでは、研究員のメンバーで、“ESD×CSR”における立ち位置を決めて皆さまに示してみましよう。一番左の阿部さんのところがESD、一番右の福田さんのところがCSR、というように、私を除いた6人がどういう順番に並び変わるかということをご視覚化してみましよう。

(講師、並びかわる)阿部さん、中西さん、中野さん、岡本さん、新谷さん、福田さん、の順番ですね。皆さま、だいたいイメージが分かりますでしょうか。今日は、こういうメンバーで皆さまにお話をします。

少しだけ、皆さまのことも伺いたしたいと思います。今日は100人ちょっとの方がいらしていると思うのですが、まず所属についてお聞かせください。学生か、会社員か、NPOの方か、それから教育する側の方か、その他の方というように聞きたいです。社会人だけれど学生でもある、というように所属が重複している方は、2回以上の挙手でも結構です。

さて、学生の方は…、48人くらいですね。日本野鳥の会の方々は、すごい人です、本当に。かれらは、鳥がたくさん飛んでいるのを一遍に5、10、15、20と数えることができるのです。1、2、3、4、5、6、7、8、9、10なんていう数え方はしません。今回は、日本野鳥の会の方々の数え方を真似してみました。

さて、会社員の方は…、60人くらいですね。学生より会社員の方が10人くらい多めですね。

それでは、NPOの方は…、18人くらいですね。会社員が一番多くて、学生がいて、NPO関連が少数派というところでしょうか。

次に、教育する立場の方は…、15人くらいいらっしゃるかな。ありがとうございました。

最後に、その他の方…、ありがとうございました。興味がありますけれど、この場では聞きません。

また、立教大学ESD研究センターは、先ほどの阿部さんの挨拶の中にもありましたように、設立から3年ほど経つのですが、ESD研究センターが主催したシンポジウムや講演会、セミナーなど何らかの企画に参加したことがあるという方は、どのくらいいらっしゃいますでしょうか…、10名くらいですね。ありがとうございました。今日が初めてという方が多いですね。

それでは、私たちが一番聞きたいことを質問します。「ESD」と「CSR」という2つのアルファベット3文字の言葉がありますが、それぞれの言葉に対する皆さまの「馴染み度」をこれから聞きたいと思います。「馴染み度」というのは、「関心があるかないか」というのも一つだし、「関わりがあるか」どうかというのも一つです。「〇〇会社CSR〇〇室、室長」みたいな方は、当然関わりがあるわけですね。人によっては、「関わりがあるけれど、関心はない」という方もいらっしゃるかもしれませんが、そのあたりは適当に大人の判断をしてください。「毎日CSRに関わっています」みたいな方から、「初めて聞きました」みたいな方まで、いろいろと幅があると思うので、その幅をグー、チョキ、パーで表現していただきたいと思います。

パーが最も関わりがある方。グーが全然ない、ほぼない、つい最近から、今回初めて、という方。その間の方はチョキを挙げてください。選択肢は3つしかないので、分かりにくい手は避けてください。パーか、チョキか、グーで行きたいと思います。

まず、最初の質問は「ESDへの馴染み度」についてです。関わりがあるという方がパー。全然ない方がグー。真ん中くらいかなという方がチョキ。(一同挙手)

中野さん、見回してみて、どんな感じでしょう？

中野 そうですね。「ESDへの馴染み度」は、チョキが少し多めで、2対3対2(パー・チョキ・グー)というような感



じでしょうか。

川嶋 今度は、「CSRへの馴染み度」調査です。関わりのあるパーから、関わりのないグーについてお聞きします。中野さん、今回はいかがでしょうか？

中野 CSRは、ESDと比べると、グーの比率が低いですね。5対2対2(パー・チョキ・グー)いったところでしょうか。

川嶋 ありがとうございます。「CSRへの馴染み度」は、パーの方が半分近くいらっしゃるかなと思います。お仕事で関わっている方が結構いらっしゃるのかなと思います。

非常に荒っぽいアンケート調査でしたけれども、今日はそんな方々が参加なさっているということで、さっそく「ESDとは何ですか？」という質問その1について、阿部さんから20分くらいでお話をさせていただこうと思います。宜しくお願いします。

講義① ESDとは何ですか？

～生まれた経緯やこれからのことも含めて～

阿部 私の話ではパワーポイントを使いますが、配付資料には入れていません。ただ、「週刊エコノミスト」(2009年3月19日号)に「CSRを考える」という文章を掲載しております。これが、私のESDとCSRの関わりについて書いたものなので、後ほど読んでみてください。

7つの質問の最初ですが、ESDとは何か？ということ自体を知りたい、あるいは日本ではどんな取り組みがあるのかということに関心がある、そういう基礎情報を知りたいという方がだいぶいらっしゃるようです。かいつまんで、ESDの定義と今後の課題についてお話ししたいと思います。



1) ESDの現在 (pp.41-42 スライド2-4)

最初に、現在の社会は、世界は、どうなっているのかという話を簡単にお話しますが、いろいろな問題があります。つい最近、イタリアのラクイラでサミットがありました。そこでも温暖化、あるいは食糧問題や安全保障問題などの話題がありました。本当に、いろんなことが、課題として表面化してきている。また、平和問題も大きな課題です。こういう国際的な課題が今、さまざまにあります。

同時に、国内においても、さまざまな課題があります。特に、スライド3に挙げているような、高い自殺率によって頻りに都内の電車が止まってしまうという現状、あるいは日本の食料自給率の問題などもあります。また、「孤立化・関係性の希薄化」という問題もあります。日本を含む先進経済国連合体である OECD (Organisation for Economic Cooperation and Development) は、いくつかの社会指標を発表していますが、その中の1つの指標として、「孤立化・関係性の希薄化」を提示しています。

この指標の世界一は日本です。トップというのは、“希薄な関係性”といいますが、他者と関わらないで生きている人たちの度合いが、日本が一番大きいということです。これも非常に大きな問題です。そして、このままでは、私も皆さんも、そして、この社会も持続しない。しかし、なんとか持続可能な社会を作っていきたい。作らないと、未来がないのです。このような流れが、“持続可能な社会”、“持続可能な開発”、あるいは“持続可能性”、これらの言葉が成立した背景にあるわけです。

(pp.43-44 スライド5-8)

“持続可能な開発”という概念は古くからありますが、これが、今の社会の中で認知されるようになったのは、1987年のブルントラント委員会の報告によります。ブルントラント委員では、“持続可能な開発”を、「将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズをも満足させるような開発」と定義しました。しかし、この定義は、非常にアバウトで解釈の仕方が多様になります。それが、大きな課題でもあ

ります。しかし、この“持続可能な開発”という言葉が出たことによって、先進国も途上国も、さらには企業も政府機関も NGO も教育機関も、持続可能性を意識するようになったのです。そういう意味合いで非常に画期的なことなのです。

こうした“持続可能な開発”の概念の成立過程として、『世界保全戦略』(1980)、『われら共有の未来』(1987)、『かけがえのない地球を大切に』(1990)など、世界的な流れを変えた研究が生まれました(スライド6)。

そして、“持続可能な開発”、あるいは“持続可能な社会”と言った時に、“トリプルボトムライン”の三要素である〈環境〉と〈経済〉と〈社会〉がよく取り上げられます。これは、環境と経済と社会のバランスを同じようにとっていかうという考え方ですが、同じようなレベルでバランスをとってゆくのが適切かと申しますと、そうではないだろうという気がしています。

一番大事なのは〈環境〉なのです。健全な生態系があつてこそ、私たちの暮らしが成り立つ、そして、その暮らしというのは、経済につながってくる。つまり、環境が健全であるというのが前提の上に、経済も社会も成り立つということです。

さらに、〈経済〉も、社会が安定して、はじめて経済が成り立つのです。

ですから、この三つというのは、同じ序列ではなくて、〈環境〉、そして〈社会〉があつて、その上に〈経済〉が成り立つのだと思います。このことは、非常に重要なことではないか。さらに、これらがまた相互に関係し合っているわけです。相互に依存しあっている。つまり環境が破壊されれば、当然経済も社会も成り立たないと。社会が成り立たなければ、経済も環境も成り立たない、こういう関係にあるわけです。

さらに大事なことは、この〈環境〉、〈経済〉、〈社会〉という三つ、つまり持続可能な社会をつくっていくために立ち上げる〈政治〉の問題も、非常に大事だと思います。あと民主主義の問題も重要で、市民が社会に参画することが大事であり、一人一人の市民が社会に関与していくことの必要性を再考すべきだと思います。まさに“市民教育”の問題にリンクし、これが非常に重要だということです。

そういう意味で、今、挙げた〈環境〉〈経済〉〈社会〉、そして〈政治〉という四つの視点が持続可能な開発、持続可能な社会を考えていく際に、非常に重要であり、そして、それらのベースはまさに〈教育〉であるということが言えます。

そして、先ほどもご挨拶で申し上げたように、この“持続可能な開発”を定義したブルントラント委員会は、日本の提案によって開かれました。さらには、ESDを提案したのも日本であり、日本のESDへの取り組みが、世界的に非常に注目されていると言えます。

2) ESDと日本 (pp.45-48 スライド9-16)

しかしですね、残念ながら日本では持続可能な社会のビジョンが確立しておりません。持続可能な社会のビジョンを私たちが提示して、それに対してまっしぐらに進んでいくというバックキャスト、これが非常に重要になってきます。

そして、この持続可能な社会を作っていくための方策として、スライド10にあるように「技術開発」、「法制度の整備」、そして「意識改革」の三つを挙げることができます。

これら三つに共通に関わるのが教育なのです。そして、今までは、環境教育がその中心になると言われていました。確かに、環境教育は、先ほどあげた四つの視点の中では、まさに生態系の保全、つまり自然環境の持続性という意味では、非常に大事です。

しかし、その環境に影響を与えていく社会とか、経済、あるいは政治といった時には、環境教育だけでは十分にカバーできないのです。平和教育、あるいは人権教育、国際理解教育、あるいはジェンダーといったさまざまな教育内容を考えないといけない。私はそれらをまとめてスライド11に挙げたように、「つながり（関係性）学習」というかたちで紹介しています。

今の自分と他との関係性が、このままではもうたいたかない、その時に、どんな関係だったら自分も相手もハッピーなのか、そして未来の人たちもハッピーなのか、この関係性を考えることが必要です。そして、今のままでは持続しない関係を、どのようにすれば持続する関係に変えることができるのだろう、ということ想像する、イメージネートする。さらには想像、イメージネートした関係性をクリエイティブしていくという二つのソウゾウ（想像、創造）です。これが教育のなかでは非常に重要になる。

そして、今、私が申した2つの“ソウゾウカ”を育てていくような、さまざまな活動というのは、これまで日本の中でも、いろいろなかたちで行われてきました。

例えば、スライド12のように〈自然〉から〈社会〉、あるいは〈地域〉から〈地球規模〉という2つの軸で作られた指標に落としますと、大きく自然系（＝地域における自然に関わる活動）、生活系（＝地域における人間社会に関わる活動）、地球系（＝地球規模の自然と社会に関わる活動）という3つの活動が今まで行われてきました。

しかし、これらの活動は、互いに関わるものがなかった。つまり、環境に関心のある人は環境が嫌い、あるいは生活に関心のある人は生活のことが嫌いという状況でした。

それが1990年代以降、スライド13の図のようなかたちで、自然系から入ろうが、生活系から入ろうが、地球系から入ろうが、それぞれの根っこは持続可能な社会の実現につながっているのだというように、お互いに関わるようになってきた

のです。

そこで、これらが重なる部分を〈総合系〉と名付けています。例えば、小中高の教育機関では、「総合学習」があり、そこで、環境や人権や平和、あるいは国際関係、あるいは福祉、健康、など総合的なテーマを扱っています。そういうように、総合策としての取り組みが始まっています。

今申ししたのは、日本の国内の方ですが、国際的にも同様の動きがありまして、1970年代以降、とくに地球環境問題が顕在化した1980年代以降、環境教育や開発教育、人権教育など個々の切口からのみ見るのではなくて、総合して俯瞰するという取り組みが広がってきました。すなわち、自然環境だけに関心を持っていた狭義の環境教育から、持続可能性全体に関心を持つ広義の環境教育が1980年代から始まってきているということです。

これは持続可能な開発のための教育、つまりESDの、まさにルーツです。言葉としては、「環境・人口・環境教育」、「持続可能な社会のための教育」、「持続可能性のための教育」、「持続可能な未来のための教育」など、さまざまな言葉が始原にあるわけですが、2002年に南アフリカ共和国で開かれたヨハネスブルグのサミットで、私ども日本が“持続可能な開発のための教育”、つまり“Education for Sustainable Development”という言葉提案したことによって、サステナビリティを指向するさまざまな用語が、“ESD”に収斂してきたということです。



3) ESDとは何か (pp.49-50 スライド17-19)

“ESDとは何か？”ということなのですが、これは国連の「国際実施計画」（2005年）では「持続可能な開発の原則、価値観、実践を教育と学習のあらゆる側面に組み込む」ことだ（スライド17）とあります。つまり、“持続可能な開発”を、学校教育や学校外教育のベースに入れこんでいくのだということです。

さらに、“持続可能な開発”の底辺には、一番の重要事として、字が読める、読み書きができるつまり識字という問題

があります。これは、国連も“Education for All”というかたちで、すべての人たちに識字を、という運動をしておりますが、まさにそれがベースなのです。その実現と同時に、“持続可能な開発”という新たな概念、この二つを統合していく。それがESDなのだと言っています。

日本では、政府が「国内実施計画」（2006年）を定めていますが、そこには、スライド17にあげたように「私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がESD」だと述べられています。政府は、現在この国内実施計画の見直しをしようとしているところです。

私自身は、これらをふまえて「人々を“持続可能な社会”の構築に主体的に参画することを促すためのエンパワーメント」がESDだと位置づけています。つまり、先ほどあげた四つの要素うちの〈政治〉の部分ですね。社会を変えていく、主人公になっていく、そのための意義づけがESDだと考えています。

ESDのエッセンスは数多くあります。私は現在、国内でESDを進めていくための組織の連合体であるESD-Jにも関わっていますが、スライド18は、そこでまとめて提案した「ESDのエッセンス」です。さまざまな課題教育があり、その重なる部分を、大きく〈価値観〉〈能力〉〈学びの方法〉の三つに分け、エッセンスとして挙げています。例えば〈価値観〉では、「人間の尊厳はかけがえがない」であるとか、〈能力〉では「他者と協力して物事を進める力」であるとかです。

そして、持続可能な開発のための教育としてすべきこととして、2002年のヨハネスブルグサミットにおいて日本のNGOと政府が共同で「ESDの10年」を提案し、同年国連総会で決議されました（スライド19）。この「ESDの10年」の最終年である2014年には、最終会合が日本で行われます。これは非常に重要なことです。

現在、国内ではさまざまなESDの事例があります。例えば、「ESDの10年」の開始以降、新たな活動として始まっているのが、国連大学を主体としたRCE（Regional Centres of Expertise）で、つまりESDの先進モデル地域のことです。2009年時点で世界のおよそ66地域が認定を受けており、日本には仙台広域圏、中部地方、横浜、兵庫・神戸、岡山、北九州の6地域があります。

環境省は、全国14か所にESDモデル地域を作っています。また、文部科学省では、大学や短期大学、専門学校等において、ESDを進めていくためのグッドプラクティス（GP）を導入していますし、あるいは、小・中・高校に、ユネスコスクールというESDを推進するための学校を選定しています。

2008年、文部科学省が「教育振興基本計画」を策定しました。これから日本の教育をどのように進めていくかについての政府計画です。そのなかにこのESDの理念が盛り込まれました。

また、2008年から2009年にかけて、幼稚園から高等学校までの教育課程の基準となる「学習指導要領」が作られました。これはおよそ10年に一度見直されるのですが、今回初めて、「持続可能な社会」という言葉が入りました。これも国連「ESDの10年」の成果です。

4) ESDの国内展開（pp.50-52 スライド20-24）

こういった新たな活動と同時に、従来からの活動もあります。スライド20には「持続可能な地域づくりにつながる環境教育」としておきましたが、ESDは、まず環境教育からはじまり、地域におけるさまざまな学び、つまり社会教育や学校教育を通じて、持続可能な地域社会を作っていくという活動になってきています。

例えば著明な例として水俣があります（スライド21）。水俣はご存じのように水俣病によって地域が崩壊しました。水俣病については、国会において「水俣病被害者の救済及び水俣病問題の解決に関する特別措置法案」が成立（2009年7月8日）しましたが、水俣病が発生して50年を経た今もまだ禍根が残っています。

公害によって崩壊した水俣を再生していくということ、90年代以降、水俣地域再生のための「環境・健康・福祉のまちづくり」、いわゆる“もやい直し”を、水俣の行政、あるいは市民と一緒に始めてきました。

このプロセスのなかで、水俣病によって地域に対するアイデンティティを失くしていた、自分たちが水俣出身だとは言にくい、そういった状況に置かれた市民が再度、水俣で生まれたことを誇りに思えるような、その誇りを取り戻すための取り組みをしました。これはすさまじい活動だったので

す。このような、自分の住む地域を見つめ直す取り組みを「地元学」と呼ぶそうです。自分たちが住んでいる地域はどんな地域なのだろうかと考え直したり、またはその地域に感謝する。水俣は、そういう活動を始めていきました。

地元学は、1990年代に仙台にお住まいの方によって提唱され、水俣で具体化されました。そして、今でも全国にこの地元学が普及しています。地元学によって、地域を見直し活性化していく、という活動がさまざまな地域で始まっています。

同時に、自分たちの地域に誇りをもつさまざまな人たちが、環境マイスターとして地元の案内人になっていく。水俣ではこういった環境マイスターの人たちが、水俣を観光の町として再生していくという、そういう活動をしています。

また、環境への取り組みにおいても、水俣版の環境 ISO とも言える学校版、保育園・幼稚園版、ホテル版などの規格が発行されています。

こういった、学校での環境教育や人権教育、さらには地域における地元学、これらを通じて水俣が環境的にも再生し、そして社会的にも文化や社会的公正問題でも立ち直っていく、経済の活性化ができてきたわけです。そしてこの間にまた、“環境首都水俣”が世界的に著明になってきたのです。この水俣の事例は、教育や学習をベースにした ESD としてまさに特筆に値するものです。

他にもさまざまな事例があります。こういった事例については、ESD-J の『わかる！ ESD テキストブック 2 実践編』（2009 年、ESD-J）に載せてあります。今言った事例がここまかに書いてありますので、お買い求めいただいて、おさらいをしていただければと思っています。

そして、日本の ESD の特徴は、スライド 23 に挙げておきました。DESD の“D”は、“Decade”の略で、「持続可能な開発のための教育の 10 年」のことですが、これ以前に、すでに ESD に位置づけられる活動が展開されています。そして、この国連の 10 年を契機として、ESD の名のもとに持続可能性にかかわる多様なセクターが統合した連携がなされました。この事例として ESD-J の設立や、あるいは政府円卓会議があるわけです。

それから、この DESD を契機として、高等教育機関の改革も始まっています。これは非常に大事ですね。しかし、実践面に比べて研究面がまだ非常に遅れているという状況で、このあたりが今の日本の ESD の課題です。

「ESD の 10 年」の最終会合が、2014 年に日本であります。これを、政府だけではなく、企業も NGO も市民も一緒になって、まさにオールジャパンとして日本で開催する、それを目指していきましょう。

そして、そのための準備会合を 2009 年の 10 月 1～2 日に、国連大学で行います。こちらにもぜひ、おいでいただければと思います。

以上、早口ではございましたが、ESD とは何かという概説的なお話をしました。ありがとうございました。

司会 はい、20 分という短い時間で、もう少し聞きたいなあという感じでした。今、阿部さんも宣伝してくれましたが、『わかる！ ESD テキストブック 2 実践編 ～希望への学びあい』という ESD のテキストブックが入口のそばにありますから、ぜひご覧ください。

続きまして 2 番目の質問は「CSR とは何ですか？」という質問です。これは一人で話すというのではなく、数人で異なった視点から話してもらおうかなと考えていまして、岡本さん、福田さん、新谷さん、中野さんをお願いします。岡

本、福田、新谷というのは、相当ユニークな視点からの話で、頭のなかがクエスチョンマークになったところを中野さんが上手にまとめるという段取りになっています。最初に、岡本さん、なんと 1 人 12 分。12 分が 3 人。非常に凝縮した話になるかと思います。よろしくお願いします。



講義② CSR とは何ですか？～3 講師からの解答～

岡本 12 分と聞いてはちょっと怒っていて、大学では半年をかけて 20 数時間で教えているものを 12 分でしゃべれるかと。この本だけ紹介して帰ることにします。ぜひ、『CSR 入門』（日本経済新聞出版社、2004 年）を読んでください。読まれた人もいらっやと思います。ということで終わります。



司会 もうお帰りですか。岡本さんもそう言わずに、もうちょっとだけ続けていただけたらと思います。

1) CSR に生態系の視点を (pp.53-59 スライド 1-14)

岡本 実はこれはヤラセでございまして、『CSR 入門』でわからない方は、ぜひ去年出しました『進化する CSR—「企業責任」論を超えた〈変革〉への視点』（2008 年、JIPM ソリューション）をお読みください。

…と、この後、私は壇をおりまして、また引き止められるという段取りになっていたのですが、「もう引き止めないぞ」と言われたので、ここに残って12分間で概略をお話したいと思います。

まず最初に、2008年にイギリスのCSR環境調査に行きました。訪問したのは、アカウンタビリティ社、ボーダフォン・グループ本社、サステナビリティ社などの企業とNGO、NPO、それから研究機関です。非常に勉強になったと同時に、CSRに14~5年に携わってきましたが、自分のやっていることがかなり正しかったなという確信を得ましたので、そのことについてお話したいと思います。

一つはCSRという言葉ですけれども、日本では“Corporate Social Responsibility”という言葉で使われておりますが、欧米では徐々に、“Corporate Responsibility”、つまりCRと言われるようになっていきます。日本だけが、ISOなどでSR (Social Responsibility) と言っているのですが、実際にはイギリスとかアメリカはCRになっています。

例えば、私が以前勤めていましたIBMのレポートも“CRレポート”、“Corporate Responsibility レポート”と言っていますし、『CSR調査レポート』(立教大学ESD研究センター、2009年 <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/products/hokoksyo.html>) にありますイギリスのボーダフォン・グループ本社であるとか、そういった会社もすべてCRという言葉を使っていました。

では、なぜ“Social”という言葉がなくなったかということ、詳細は後ほど解説しますが、”Social”ということ、日本もそうですが欧米でも人間と人間との関わりにはしか目が向いていないのですね。実際のCSRでいうところの“Social”は、自然環境とかあるいは動植物、そういうものをひっくるめた“Social”なんです。それで逆に“Social”と入れてしまうと人間同士の関わりしか見えてこないというので、“Social”を削って、“Corporate Responsibility”という表現になっているようです。

スライド3の一番下に書いてありますように、“Corporate”とか“Corporation”というのは、日本では企業とか、巨大企業とか、そういうふうにはしか見ていませんが、実際には法人、自治体、団体、組合、いわゆる大学もひっくるめてすべてのものが入っているわけです。そういう意味で“Corporate Responsibility”です。

さらに進んだ企業、あるいは法人、自治体、団体、組合を入れた“Corporation”では、“Sustainable Development”という言葉が使われだしております。ですから、徐々にSDということでESDとも近づいているなど。

実際、私がCSRに14~5年関わっているあいだに、いろいろなものが徐々に統合化して、教育なり、あるいは企業での展開をしていかなければいけないというところで、ESDと

CSRがかなりかぶさってきているというふうに思います。

それから去年、イギリスで調べたなかで二つ三つ興味深かったことがあるのですが、「CSRの担い手は国民全員だ」という発想にしてしまうと、結局「皆でやりましょう」と言って誰の責任でもなくなってしまう。だから、組合であるとか、団体であるとか、大企業であるとか、そういうところが負うべきだ、という発想を持っている方がいらっちゃって、それはなるほどな、と納得した次第です。

それから、CSRをかじられた方は、ジョン・エルキントンさんが言う、〈環境〉、〈経済〉、〈社会〉という三つの「トリプルボトムライン」という言葉を思い出される方が大勢いらっしゃると思いますが、実際にジョン・エルキントンさんの会社に行って、その右腕のジュディさんという快活な女性にお会いし、こちらが「トリプルボトムライン」と言うと、カラカラカラと笑って、「ジョン・エルキントンはもうそんなこと言っていない」と。「CSRの取り扱う範囲というのはものすごく増えている」と。その三つだけでは対応できなくなっているということをお話して、これは私が2004年に“ペンタゴンネット”という、5つのマルで表したことをサポートしてくれているかなと思います。

スライド5がその図で、ジョン・エルキントンさんが1980年代の初めに言いだした、〈環境〉〈経済〉〈社会〉、このとらえ方は非常にわかりやすいのですが、私もIBMなどでCSRをしているうちに〈環境〉〈経済〉〈社会〉の他に〈人間〉が必要だなと考えました。そこでまず〈人間〉を入れて、でもそれから、どうもおかしいと、生物多様性とか生態系とか、そういう自然の動植物も入れる必要があるなど。そういった経緯で、“ペンタゴンネット”として、5つのマルで表したわけです。こういった考えが欧米でも言われたということ、少し自信を深めました。

それから、シューマツハカレッジという、ロンドンから西方に約300キロのところにある大学に二週間ほど通いまして、「Development - What Next?」というテーマの講演を聞きました。

そのなかのお話で、開発とは、「開発に名を借りた破壊」であると。私は月島に住んでいて、29階の部屋なのですが、8年前に移ったときには、海も見えるし、隅田川も見えて非常に視界良好だったのですが、その後どんどん高層ビルが建って、徐々に東京湾大華火祭も見えにくくなったし、海の見える率も、川の見える率もどんどん減っています。

その高層ビルが20年、30年、50年経ったときにどうなるのだろうと思うと、意外と、開発という名を借りて、結局は破壊をしていると考えられます。本来の自然のままにしておく方が、はるかに持続性があるわけです。それについては、東南アジアの新興都市、またはフランスであるとかロン

ドンに行ったときの都市の開発を見れば一目瞭然で、ロンドンで泊まったホテルは1000年前の教会でした。それからシューマツハカレッジは700年前の牛小屋でした。そういうふうに建物を本当に長い年代に渡り使うのです。ロンドン市内には、高層ビルはまったくありませんでした。実際には一棟あるらしいのですが、東京のようにあそこにもここにもということではなくて、だいたい五階建のビルで統一されているという印象でした。このように、日本では“開発の名を借りた破壊”が進められています。

それからスライド6の図も、非常に大事になってくるわけですが、従来、CSRあるいは企業のことを考える場合には、どうしても個人からの出発になるわけです。

具体的な例をいいますと、4~5年前、ある商社が、ディーゼル車の排ガス浄化装置を作るということで、会社や企業からお金をもらって、何人かの開発研究員が浄化装置の開発を進めたのですが、その装置がなかなかできないというので、都に捏造したデータを提出して、石原都知事にひどく怒られた上に、1億単位の賠償金が発生したという事件があったと思います。

そのときの研究員の考えというのは、部門のためになんとか製品を出さなければいけないとか、あるいは会社のために製品を出さなければいけないとかいうもので、社会全体のためとか、ましてや生態系のために、という考えはないのです。

かつては私も企業人だったのですが、今挙げたような従来の考えというのは、個人から部門企業と、せいぜい企業までしか見えにくくなってしまふ。

これをまったく逆の視点で、生態系からみると、生態系に良いことは社会に良いことだ、社会に良いことは企業に良い、企業に良いことは部門によくて、部門に良いことは個人に良い。この発想で、さまざまなことを生態系という視点から逆に考えていくと、CSRだとかコンプライアンスで新聞記事に出てくるような問題もかなり解決できてくると思います。

私のCSR論は、全体的に俯瞰すると、グローバル化ということに対しても疑問を持つということ。『生態経済学』という学問があるようすけれども、経済学一辺倒ではなくて、生態系と経済学を一緒に考えて、生態系と経済の収支のバランスをうまくとる必要があるということです。このところは少し難しいので、また機会があればお話ししたいと思います。

具体的には、CSRを考える際には、“バイオミミクリー”、つまり生態系から模倣するような発想が重要になります。私がよく例に使う話としては、一流ホテルとか公民館などに行き行って手を洗うときに、ポンとポンプを押すと石鹸液がタラッと出ますね。あれで洗うと石鹸がつきすぎてしまうの

で、水をたくさん使って洗い流して、濡れたハンカチをそのまま鞆に入れるのがいやだから、そこにペーパータオルがあればペーパータオルを使う。ところが、蟹の泡からヒントを得て、石鹸液ではなく泡にした場合は、ポンプを押して1グラム出るとして、石鹸の量が40分の1で済むそうです。そうすると、水もそれほど使わなくなって、ペーパータオルも使わないで済む。おそらくポンプの浄化の費用もそれほどかからない。

それではなぜ、石鹸液の出るポンプを売るのがかという、それは石鹸会社が、ポンプを売ったのではお金にならないからです。ですからホテルでも公民館でも、ポンプをサービスしますから、うちの石鹸を入れて下さいと言って、40倍の石鹸を消費させているわけです。そういう企業が「東南アジアで植林をしています」とPRしますが、これはおかしい。ですから根元から変えるということが大事だと思います。

つい最近、私はある環境のセミナーで小さいネットをもらって、これは石鹸を入れて使うのですよと言われて、実際にそのネットに石鹸を入れて使ってみたら、ものすごく泡が出て、顔を洗うのでも手を洗うのでも、ひと擦りかふた擦りしたものを手につけると泡になってついて、石鹸は長持ちするし、手になじむということがわかりました。そういうふうに泡にする。これは蟹から発想を得ています。

もう一つ、長くなるといけませんが、おもしろい例として、ある^{がいし}碍子会社の例があります。碍子というのは高電線などで見られる白い陶器で、電柱との間を絶縁するための器具です。日本製が非常に良いというので、欧米に輸出しているわけですがけれども、5~6年前、「岡本さん、大変です」と。「アメリカにこれを輸出したら、こっぴみじんに割れることが多いのです」と。

なぜ、アメリカでこっぴみじんに、陶器の碍子が割れると思いますか？乾燥でもなんでもないので。アメリカは銃が自由なので、ハンターが鳥を撃ちに行き、どうしても鳥が撃てないときに「俺の腕は大丈夫か？」ということで、あの白い碍子をめがけて撃つわけですね。あるいは電線に止まっている鳥を撃つときに、碍子を壊してしまう。「じゃあ、空のブルーの色にしたらどうか」という提案をしたら、割れる率がものすごく減ったそうです。

ところが、2~3年前にまた来て、「岡本さん、大変です。東南アジアのあるガラス会社が、ガラスで碍子を作ります」と。ガラスは透明だから、山の緑にも、空のブルーにも、なんでも対応するというわけです。「でも、碍子は陶器じゃないといけけないのではないですか？」と聞いたら、ガラスの方が作りやすい上に、耐熱性なども全く問題ないそうです。

これは余談でしたけれど、そういうふうに、さまざまなカラーを合わせるという発想は、魚からきているのです。青い魚は鳥から狙われないように、空の青さに合わせて青くなっ

ているのです。それから、腹部が白いのは、波の白さに隠れるようになっていきます。マグロだとか、中間の水深を泳いでいる魚に食べられないように、ですね。こういったバイオミクラーのように、自然からデザインやプロセスを学ぶことが大事だと思います。

その他に、CSR においてこういった視点が大事なのかということで、三角形の CSR 俯瞰図を載せてあります（スライド 8）。一番下の土台のところはいろいろと言われている、企業が最低限守らなければいけないこと。真ん中に挙げた視点を実践すると、法律だとかそういう規制がなく、企業にとってもプラスになる。上の三つ、「貧困の撲滅」「先進国の消費のあり方」「生態系・生物多様性の保護」は、企業は忘れがちだけれども、将来のために是非守っていただきたいこと。そのように三段階に分けています。

時間が押しておりますので、あとはこのあと私の番がまわってきたときにお話したいと思います。どうもありがとうございました。

司会 それでは続きまして、同じ質問で「CSR とは何ですか?」、お二人目は福田さんをお願いしたいと思います。

2) CSR の核としての CSR (pp.60-63 スライド 1-7)

福田 福田です。宜しくお願いします。ずいぶんと議論を混乱させるのではないかと思います、基本的に私は、今、岡本さんが話されたのとはかなり反対の立場です。そしてこれにつきましても、皆さまのお手元にあります 2008 年度版の『CSR セミナー録』（ESD 研究センター、2009 年 <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/products/hokoksyo.html>）をご覧ください。それでいて、岡本さんとは仲がよく、尊敬しあっているという関係ですけれど。

ポイントだけお話しします。

まず CSR 論についてですが、コンセプトとして、Social Responsibility (=SR) などに広がりを持っていると言えます。しかしあれは、議論を幻惑させて、小さいことすらちゃんと解決せずに広がりをつけていってしまっ、話を進めていくという、いわばできの悪い会社のトップと同じ発想だと思っています。

いちばん大事なことは、例えば子どものマナーをどうしつけますかとか、社員が交通違反をしたけれどもどうしますかとか。また、お客さんに嘘を言わないようにするにはどうしますかとか。こういった社員教育が基礎なのです。

SR が良い方向に広がってゆくなら問題ないのですが、実際の企業の社会的責任というのはかなり限定されています。企業といってもメーカーや商社、あるいは大企業、中小企業、零細企業とさまざまです。そうすると、企業の社会的責



任と一口に言っても、メーカーは何をするか、小さい店の責任として何をするのか、さらに言えばこの豊島区の池袋商店街の責任として何をするのかを考える必要があるのに、一括りにしてしまうことで、かえって大きな問題が問われているように思います。

これは、まるであいまいな観念論でしかなくて、お互い飯のタネをつくるだけで、なんら具体策をもたらないというのが私の考えです。私は経済学の出身ですが、CSR 論において議論がおかしくなるのはそういったところだと思います。

それから、例えば勝手に大きなものを期待しすぎてしまう。“経済学”というのは、そもそも基本的には、雇用と物価についてケインズが著した『雇用・利子および貨幣の一般理論』に代表されるような、物価の安定と失業をできるだけ少なくするというのが最大のテーマだったはずですが。そして、そういうなかで、あれが良いこれが良い、良くない、ああだこうだとやっていた。

ところが、それがまたどんどん訳が分からなくなっていく。そもそも、もっとも原始的なことすらいまだ解決されていない。こういった点をもっと着目すべきだと思います。そして、それに着目するときに、強調したいのは皆が意識的になりさえすれば、多くの社会問題はそれでほとんど解決するのです。問題はトレードオフ、つまり対立するものだ。それが学問の基本的態度だと思うのです。

スライド 6 にいろいろなトレードオフを挙げています。左上が大口株主に「GOOD」もしくは「BAD」、環境に「GOOD」もしくは「BAD」を示す図です。もし大口株主にも環境にも「GOOD」、「GOOD」だったら、この場合は対立がなく、勝手に解決します。

そして、それから消費者と環境の関係についても同じことが言えます。その他、雇用との関係もそこに挙げてあります。

そして、それらすべてに配慮して、お互いにすべてを良い関係に保ちなさい、というのは、下に 2 行で書いてありますね。「株主をステークホルダーに含めた CSR 推進論は、ア

ングロサクソン親派の株屋と、コバンザメ商法の評価ビジネス屋がプロデュース」する。ちょっとこの部分は表現の柄が悪いのですが、最大の問題は、まずこのなかから株主を絶対にはずすべきだということです。

少しでも問題を解決していくには、余計なものはずしていかなければならないのです。企業というのは、誰の物かという、本質的に株主の持ち物なのです。

逆にいえば、そもそもの問題として、株主が、「ちゃんと環境に配慮するように。そうでないとクビだよ」と言えば済む話なのです。だいたいこの場合は、株主といっても小口株主にはほとんど発言権はありません。発言権があるのはファンドであるとか、そういう大口株主に限定されます。例えば大口株主さんが、社長をつかまえて、「おい君、もう絶対に環境に悪いことするなよ、法律は皆守れよ」とか、例えば車だとしたら、「おい、もう高いガソリンをガバガバ使う高級車を売るなよ」と言ったら、それには絶対従わなければいけないわけです。

本質的に、そういったことの一番の決定権者は誰かということです。環境を念頭においた場合のみでなく、対従業員問題にも大切です。業績が悪いがどうしましょうかと尋ねても、従業員は解雇してはいけないと株主が言ったらそれは絶対なのです。

ところが、現実には違う。これは、実は国によってまた違う。私は、アメリカやイギリスなどのアングロサクソン系の国にだけは、CSRなんて言われたくない、という発想をもっているのです。

その理由について、2008年度版の『CSRセミナー録』の28ページ、右側の真ん中の段落に書いてあります。

この調査は1993年のもので、ちょうどCSRが盛んになる7~8年前のことですが、基本基調は変わらないはずです。

まず、「企業は株主のために存在する」と明確に答えた経営者の数、大企業の数ですが、2~3割の経営者以外は、企業株主の利益の最大化をめざすと答えています。こういったことは、アメリカの経営戦略論には常に書かれていることです。これが経営戦略だと。

日本の経営戦略論では、さすがにそこまでは書いてありません。

そして、「企業は株主のために存在する」と答えた人の比率をもう少し詳しく見てみると、アメリカの経営者76%で、イギリスの経営者71%に対して、日本で「企業は株主のために存在する」と明言した経営者は、たったの3%。現在はそこまで少なくないかもしれませんが。それでは日本はダメだよ、ということで騒がれたわけですね。しかし、どちらが正しいのでしょうか。

例えば、7~8割が「企業は株主のために存在する」と答えたアメリカやイギリスは、アングロサクソン国家です。こ

れがフランス、ドイツになると違います。フランスでは「企業は株主のために存在する」と答えたのはわずか、と言っても日本より多いですが、22%。ドイツで17%。大陸国と、イギリスおよびアメリカの実質アングロサクソン系の支配している国とでは全然違うということです。これは横浜国立大学の吉森賢さんが研究されました。

そしてもう一つ、重要なトレードオフ問題があります。例えば大口株主と雇用の問題。一口に株主と言ってもあいまいになってしまいます。実際は大口株主が動かしているのですから、大口株主と雇用と表現しますが、これはかなり厳しい問題です。

この問題に対して、アメリカの雑誌「Fortune」がある質問をしました。それは、「企業の業績が悪化した場合、会社の業績が悪化します。利益が出ないので株主への配当を減らすか。従業員を解雇して配当を維持するか、どちらを選びますか？」という質問です。

このケースでは、会社が倒産するわけではありません。そのなかで、一定の株主配当の原資を得るために、従業員を解雇するか。もしくは従業員をちゃんとおいて、株主配当を減らす、またはやめるか。実際どの範囲にまで質問をしたかどうかは別にしまして、その回答です。

「従業員を解雇しても株主への配当を維持する」と答えた経営者の比率は、アメリカ89%、イギリスも89%、要するに約9割です。フランス60%。ドイツ59%。そして日本は3%。日本でこう明言した場合は、相当な非難を受けると思います。そういう意味では、この3%の経営者は根性があるなど、ある意味ではすごいなと思いました。これが今からちょうど10数年ほど前のことです。

それからどんどんと、株主至上主義または株主を評価しないという流れがありました。その当時、確かアメリカでも、「経営者は株主をないがしろにせよ」という議論があったはずですが、ただ、そこにはCSRそれ自体も含まれていました。1970年代、1980年代にもCSR論はありましたが、このときには株主はどこにも入っていません。寄付金と株主の問題についても、寄付金というのは株主利益に反するものではないかという議論はありました。このようなことが、大きな流れとしてありました。

そこで、この大きなテーマである「CSRとは何ですか？」についてですが、基本的にはトレードオフ問題があがる限り、啓蒙活動で対立することはありません。しかしながら、企業経営に関する最終判断権を誰が持っているのだという問題になりますと、企業というのは意外と弱い立場でして、やはり株主を最優先させてしまうということが現実ですが、経営者は、自らのCSRについての信念を貫き通さなくてはならない。そしてそれは、実際には、大変に難しいことだと私は思うのです。

かくして、「誠実な経営者には、胃に穴が空き、不眠症になる決断が必要」(スライド6)になってくるということです。

本来、企業の業績は競争下で得なければいけないものだという絶対的な原則があるにも関わらず、日々、業績がかかっている将来さえもかかっていたら、どうしても見えないところで業績を上げたくてしまうという人間は少なからずいます。これを抑止することは難しいことではありますが、それを教育することはもちろん重要です。だから、しっかりした会社はしっかり教育しています。

だから、交通違反でも厳罰に処すという会社もあります。小さいことにきわめて厳しい会社は、大きいところにも厳しいという傾向があります。法律で定められていること以外に、法律で決められていないこともあります。皆さまのお手元にグンゼの「CSR 報告書 2009」を配りました。グンゼが良いと言った最大のポイントは、小さいことに対してものすごく厳しいということです。そして、CSR 報告書には書いていませんが、私がおもってもおもしろいと思い、気に入っている会社は「いいちこ」という焼酎で有名な、大分県の三和酒類株式会社です。

三和酒類株式会社の社訓の3か条のうちの1つは何かといいますと「品質」。そして2番目が、「交通違反をするな」です。やはりこういうところからスタートして、しっかりしたかたちでやっていきます。この点に着眼して今回のCSR 報告書の第三者意見を、グンゼのCSR 報告書の最後34ページにも書いております。このようなことが、私の実践的な考えです。

司会 それでは3人目、「CSRとは何ですか？」の質問に対して、新谷さんに話をしていただきたいと思います。

3) CSRにおけるヒューマンリソース

(pp.64-75 スライド1-24)

新谷 皆さま、こんにちは。12分という短い時間のなかで、CSRについて全部話せといわれても不可能に近いですので、今日は少しいつもと違った視点でCSRについてお話ししたいと思います。

CSRとESDというテーマが今日のメインテーマですが、今日は、「CSR推進においてもっとも難しいことは何か？」という例をお話しようと思っています。

それを考えるときのポイントはたくさんあるのですが、スライド3に3つのポイントを挙げてみました。CSR推進のために体制を作りましょう、トップマネジメントが大事ですよ、これはよく言われることです。また、CSRが社内に浸透しなければいけませんよ、などいろいろとあります。

このなかで最も難しいのは社内浸透です。実際にCSRを



担当している人に言わせると、例えば自分たちの会社内にCSRの方針をつくっても、社内のいろいろな部署にそれをどうやって浸透させるかはとても難しい、というような話をよく耳にします。

しかしまた、トップマネジメント、トップの理解、これも重要なことです。トップが理解していないとなかなか組織としては推進できないので、やはりトップからトップダウン、トップマネジメント、これが非常に重要です。

ただしトップだけが理解していても、CSRの推進自体が難しくなるだろうし、はたまた企業によくある例ですが、CSRの関連部署だけが理解している企業があります。「CSRの部署のあなたたちでやっと思ってくださいね」、それで終了するわけです。結局、末端の社員は、「CSRって何よ」、「なぜうちはCSRなんて部署をつくったの」、「どうしてうちは社会貢献活動やってるの」、と誰も理解しないまま会社が進んでいくというような話はよく聞かれます。

現在の不況下で、実際にCSRの部署がどんどんなくなっていきます。このことから、そもそもなぜCSRが企業にとって重要であり、必要なものなのかという本質的な理解が進んでいないということが、原因の一つとしてあると思っています。

ですから、あくまでもCSRの理想形として言うと、社員全員が「CSRとは本質的に何か」がわかっていて、「うちの会社はなぜCSRをやっているのか」をわかっているというのが理想の姿だと思います。当然ですが組織のマネジメントが必要ないと言っているわけではありません。組織のマネジメントは当然、必要です。もちろん必要ですが、それプラスアルファとして社員に対する意識浸透、この部分に企業としては取り組むべきではないかと思っています。

しかし、実体を考えてみると、CSRはほとんどPRに近いということが、最近の日本では議論されています。これは実は日本だけではなく、欧米企業でも、CSR ≒ PRというのはよく言われる話です。私が欧州の企業に、「なんのためにCSRをやっているのですか？」と聞くと、「いや、PRで

しょ」という方も実際おられます。ですから、決して日本だからということではありませんが、こういった面があるのではないかと思っています。

例えば、スライド7にさまざまなCSRレポートを挙げました。最近ではだいぶいい方向に変わってきましたが、CSRレポートの中身を読んでも、ただの企業紹介であったりするわけです。企業が環境ビジネスをこのようにやっていますとか、要するにバラ色の話をいっぱい書き並べただけ、というようなタイプのCSR報告が非常に多くて、就職活動中の大学生に配る会社案内となら変わらないものがよくあります。

CSRレポートの本来の役割を考えた場合、これはPRのためではなくて、いわゆるレポートिंग、企業が説明責任を果たすための情報を正しく伝えていくという部分があるわけです。CSRにおける企業の説明責任が、自分たちの会社を紹介するための手段になってしまっている場合があるのですが、基本的にはそういうものではないわけです。もちろんパブリックであり、いろんな人のためにという側面はあります。しかしながら現状では、CSRレポートにはPRの要素の方が強いものが多いと思います。

CSRとPRという話も少ししてみたいと思うのですが、後で、なぜこれがPRの話になるかという謎解きが出てきます。スライド8に挙げたのは、1990年代に「ニューズウィーク」に掲載されたGMの広告です。白熊やその他の動物がいて、場所は北極ですね。北極になぜか車があります。これは、非常におかしいですよ。この広告の趣旨は何かというと、車が北極の熊たちと共存していると言いたい、という広告です。これは、ものすごい批判を受けた有名な事例です。

こちら(スライド9-10)は“Greenwash”の紹介です。Ferrea Sustainable Communicationsというコンサルティング会社では、「10 Signs of Greenwash」という、Greenwashに相当する例を10個挙げています。これはホームページ上にも載っています。例えば、1には「やわらかい印象の言葉」とありますが、“エコフレンドリー”というような言葉を用いても、宣伝文句でしかなく、そこにはなんら実態が伴っていないというようなことです。

2には、「『グリーン商品 対 悪い印象の企業』の図」とあります。これは、対抗の図を提示することで自社製品の販売を促進する、例えばコマーシャル、広告などさまざまな方法があります。この「10 Signs of Greenwash」は、ある方のブログで日本語訳されていて、そのまま使わせていただいたので、下に小さくホームページのアドレスを書きました(<http://blog.goo.ne.jp/worldsendssupernova/m/200811>)。全部で10項目のGreenwashの事例が書いてあります。

この他にいくつか動画をお見せしたいと思います。一つ目

は日本のホンダのCMで、これはアメリカで流れたCMです。もう一つお見せします。これはマレーシアのパームオイルのCMです。

マレーシアのパームオイルのCMの最後に、「Malaysia Palm Oil Sustainability」と書いてありましたね。これはCSRの議論をご存じの方はよく知っていると思いますが、パームオイルは必ずしもサステナビリティではありません。これは昔から言われています。

つまり、パームオイルについては、森林を破壊して、代わりにパームオイルの原料となるヤシの木を植えるという話がありました。ですから、パームオイルは必ずしもグリーンではないというのは、よく言われる話ですし、先ほどのホンダのCMについても、車が自然のなか、緑のなかを走っていました。はたして車のすべてがグリーンなのかということなのです。このようなGreen Washの例は、実は非常に多いと言えます。

2008年、電気事業連合会が、「原子力発電はクリーンな電気のつくり方」という広告を出しました。これに対してある方が申し立てをし、日本広告審査機構(JARO)が「原子力発電にクリーンという表現を使うことはなじまない」という裁定を下し、再考を促しました。

今、企業も含めて原子力発電が見直されてきているのは事実です。CSRにおいても、かつては企業が原子力発電に着手している場合は、どちらかといえばSIR(=Socially Responsible Investment)のマイナス評価でした。

最近はこの状況が変わって、原子力発電は非常に重要なオルタナティブ・エナジーとしてあると言われるようになりましたが、クリーンではないだろうという議論は依然としてあります。たしかに、事故が起きた際の放射能汚染もありますし、廃棄物の問題もあります。廃棄物の保管は、何百年もの時間を必要とするのです。こういった管理の問題を含め、さまざまな問題があります。ですから、原子力をクリーンと言ってしまうと、そこには既に一種の問題が起こる可能性があります。

また、CSRとPRの関係でいうと、次のような事例もあります。“Cause (Related) Marketing”、または単に“Cause Marketing”、あるいは最近では“Consumer Philanthropy”という言葉も同時にありますが、ほぼ同じことを言っていて、“Consumer Philanthropy”の方がどちらかと言えば分かりやすい表現になっています。つまり、消費者を巻き込んだ社会貢献です。例えばVolvicの“1L for 10Lプログラム”では、売り上げの一部が、アフリカの飲料水確保のために使われたり、ロックバンドU2のBonoさんが発起人の一人になっている、“Product Red”という一連の赤い商品シリーズでは、収益の一部がアフリカのエイズプログラム支援に充てられています。

こういったような商品、マーケティングの戦略と社会貢献活動をミックスした商品は多くあります。しかし、社会貢献活動だと思いきや、実はただのマーケティングで、要は商品を売ることが目的になっているだけの場合もあります。

ここでもいろいろな問題がありまして、これは本当に嘘えなのですけども、“ピンクリボン”といって乳がんの早期受診啓発のための運動があります。海外でよく指摘されているのですが、発がん性のある化学物質が含まれている化粧品を販売している会社が運動に参加している、という事例があります。乳がんの撲滅とか啓発に積極的に関わっているけれども、その商品には発がん性化学物質が含まれている、というような指摘です。

スライド 15 はパロディなので本物ではありませんが、タバコを吸いながらピンクリボンを結ぶというパロディが作られたりもしています。

要するに、CSR と PR の関係ということをお話したかったのですが、これは ISO の社会的責任規格 (ISO26000) シリーズをつくっているところの議長である、Jonathon Hanks さんが、「CSR-HR (Human Resource: 人的資源) = PR」、つまり CSR というところから人的資源を引いてしまうと、ただの PR になってしまうということをおっしゃっています。これに私はかなりピンときて、この言葉を拝借させていただきました。つまり、CSR = PR になってしまっているということは、結局「HR」の部分がないのではないかと思うのです。この話の冒頭で、CSR の難しさということで、社内の意識浸透について申しあげました。意識浸透という部分は、「HR」と大きく連動しているところがありますので、人づくりであり、人をどのように育てていくのかということをお話させていただきました。

この HR の部分については、後ほどパネルディスカッションのなかで機会があれば申し上げますが、今回の ESD のセミナーの冒頭で、阿部さんもおっしゃられていましたが、人と人とのつながり、人と社会のつながりを考えていく上で、HR という部分を、CSR のなかでどういうふうにつまえていくのかということをお話させていただきます。

CSR を本質的に理解した社員をどう育成するかということには、まず最初にサステナビリティの話をお話していただくことも入ってくるでしょうし、CSR 全体の話に及ぶと、非常に幅が広いので、言う人によって捉え方もかなり異なります。ですから私が今日申し上げたかったのは、人づくりの部分で、人の目線というものをしっかりと CSR のなかに入れていくことが重要だということです。企業にとって PR は当然必要ですので、PR がダメだ、PR が

悪だと言っているわけではないのですが、それでもただの PR ではなく、その中でやはり何が必要なかを考えるべきだと思います。HR を意識した CSR 的な要素、ここを意識していくことも重要なのではないかと考えています。

そういったことを考えれば、例えば CSR の研修などを考えるときに、E-ラーニングで環境を学ぶことほど最悪なことではない。たとえ何年までに CO2 を何パーセント削減しなければならない、その何パーセントという数値を知識として知っていたからといって、環境が良くなるわけではない。やはり一人ひとりの行動にかかってくるだろうし、サステナビリティに対する理解、こういったものが重要なわけです。ESD で重要視される、例えば自然体験にしても、CSR でも重要なポイントとしてはあがってくるのではないかと考えております。

スライド 19 は、経済同友会が 2008 年に出したレポートですが、そのなかの「価値創造型 CSR を実現するために」という、行動指針を取り上げた項目の (3) に「社会性を備えた人材を育成する」という文言が入っています。やはり、こういった意識がこれからは重要なポイントになってくるのではないかと考えております。

司会 ありがとうございます。3人いろいろな角度が違うお話で、どう理解したら良いのだろうか、悩ましいところです。難しいところではありますが、中野さんに、まとめの方向に導いていただければと思います。

4) 人づくりの重要性

中野 3つをまとめるということはなかなか大変なので、ポイントだと思われる部分を確認するというかたちでいきなすと思います。

岡本さんは、このような図 (岡本スライド 9: p.55) を書かれました。これは僕も非常に大事だと思っています。ある意味では当たり前のことですが、普段、いかに我々が忘れてるか。私たちの企業は健全な社会があってはじめて動かすことができるし、平和や民主主義があってはじめて自由なモノの売買とか、購買力があるわけです。だから社会のためにきちんと企業収入としてやらなければいけないことが出てくるわけです。でもその外側にやはり生態系があるということ。それはわかっているのになかなか普段意識できない。普段は、個人は部門のなかのミッションを達成するために一生懸命にやっていて、考えられるのはせいぜい企業の範囲まで。この頃ようやく、社会のためということが出てきたわけですが、なかなか、一番外の生態系のことまで考えることができない。それに対して、岡本さんの発想は逆で、生態系の視点から見ていくわけです。これはすごくシンプルだけれども、ものすごく大事な問題提起だと、いつも思ってい

ます。

その中で、このような観点から見ますと、今日はさらっと流しておられましたけれど、CSRの俯瞰図（岡本スライド5：p.55）があって、一番下が、企業が守らなければいけないこと、つまり“must”に当たる部分で、中段が、“あったら良いね”みたいな部分です。そして上段には、岡本さんの場合は、「貧困の撲滅」とか、「先進国の消費のあり方」、そして「生態系・生物多様性の保護」など、非常に高いレベルのことを要求しておりますね。

ヨーロッパなどではよく、この下段の“must”の部分は、「法律を守るのは当たり前でしょ」、というように、CSR以前の扱いをされることが多いのですが、福田さんが非常に大事にいらっしゃるのは、「CSR以前」と言っても、現実に法律がきちんと守られていない、ということがベースになっていて、その問題をないがしろにして、岡本さんの俯瞰図で示すところの上の方ばかりに話広げていくのはどうなのか、もっとより小さい具体的なところから詰めていかないとダメだ、ということを非常にはっきりおっしゃられました。

今日もそのトレードオフの問題を強く言われて、何かをとると何が立たない、だから美しい話だけで話は進まないとおっしゃいました。とくに大口株主の扱いについて強調されていて、大口株主が企業に与える影響が大きいけれども、そもそも大口株主がステークホルダーに入るのはおかしいと。企業が大口株主のものだとしたら、一番責任があるのは大口株主でしょう。だから、これをステークホルダーに入れて、その人たちのために行動するというのは変じゃないか、逆に責任をとる立場にあるのが大口株主だろうということで、さまざまなトレードオフのなかでも大口株主については、はずすべきではないかと。そして、むしろ環境と雇用、そして消費者、その関係性のなかで何が立って何が立たないのかを考えるべきであって、これも非常に悩ましい問題で、単に、こうすべきだと指示したり、啓蒙したりという方法では解決しない難しい問題であるということをおっしゃっているのではないかと思います。

最後に、新谷さんは別にPRを否定しているわけじゃない。企業にとってPRは必要だと結んでいます。私も広報会社のコーポレートコミュニケーション局に所属しておりましたが、もともとはPR局という名称でした。今日のお話で一つ付け加えたいのは、PRというのはもともと“パブリック・リレーションズ”ということで、さまざまなステークホルダーと友好的な関係を築いていくための双方向の運動だったのです。ただ、これがいつのまにか日本では宣伝の概念として使われ、むしろプロパガンダになったことで言葉がかなり落ちてしまった。海外でも状況は同じなのですが、企業のイメージアップにCSRを役立てようということで、どうしても混用されます。我々も日頃感じるのですが、企業のなかで

予算をとって何かを続けていくためには、企業のためにならなければ社内で説得することはできません。どうしても、そのことがイメージ力をあげてブランドを強くするのだという要素がないと、なかなか受け入れられない。ともすればそちらばかりを追いかけてしまうわけです。今日も、花から自動車、北極で車が走れるといういくつかのきわどいCMの例が出ていました。そういう視点で見れば確かにこれは問題だなあと感じます。お話にも出てきた“Greenwash”という言葉は、もともと“Whitewash”という、ポロポロの壁などを上塗りして隠すためのペンキや漆喰からきています。ここから、塗ってしまうと隠せるということから転じて、“ごまかし”の意味ももっていて、その“White”を“Green”に置き換えて、“Greenwash”という、なんでもエコでごまかしてしまうという問題についても言及されました。

最後は、CSRにおけるHR（ヒューマンリソース）の重要性について話をされました。HRが抜けると、CSRはただのPRになってしまうと。つまり、人づくりの目線がESDとCSRには本当に欠かせないということをお話してくださいました。

この3つをどうまとめるかということとはなかなか難しいので、まずは確認ということで休みに入り、後半に入れたらどうかと思いますが、いかがでしょうか。

司会 どうもありがとうございます。まとめというか復習という感じでした。それでは10分ほど休みをとって3時20分から後半に入りたいと思います。

=休憩=

司会 前半は大きくCSRについてお三方からざくざくと、違った角度から話をさせていただきましたけれど、後半は少し分解します。

「CSRの“R”って何ですか？」というお話をさせていただきます。今度は短いですね、10分ずつ。

では、福田先生、お願いします。

講義③ CSRのR（責任）ってどう捉えれば良いのでしょうか？

(pp.60-63 スライド1-7)

福田 再度、福田です。

よく責任ということが言われますが、企業に対しては責任論が多くて、逆に企業の権利の話はあまり聞きません。権利と責任は常に一体だと思うのですが。

先日、あるところで、子どもの権利についてのセミナーに参加しました。そのセミナーで講演があって、最後に「何か

質問は？」、と言うので、ついついこういうキャラなので、一つだけ質問をしました。一瞬、座がしらけましたが、「子どもの責任って何でしょうか？」と聞いてみました。親の責任、子どもの責任ということもよく言われますが、その中身について、やはりあまり耳にしたことはありません。

そして、企業の責任についていうと、まず企業が他の組織と違うところ、例えば行政や軍隊、警察といった組織と違うところ、それは、資本主義社会のなかで自由競争をすること、より良い商品をより安く販売することです。独占禁止法の第一条の規定で「公正で自由な競争」が約束されていて、その競争を妨げたり、不公平な取引をすることは違法行為になります。企業ということをつける以上は、どんな組織であれ、個人であれ、これに従う責任があるわけです。これは法律に基づくわけですが、その他に企業にとって特殊なものはあるかと考えてみますと、例えば労働基準法や、環境保護法などがありますが、これは、企業だけではなくてすべての組織体について言えることだと思われまふ。企業だけではないので、先ほど岡本さんがおっしゃったように、SR (Social Responsibility) でいろいろな状況に当てはまると思うのです。

それからもう一つ、責任というと、「CSR 推進者にとっての責任は何か？」ということがあると思います。それは何かというと、まず、会社に対する責任、それから社員に対する責任。わが社の社会的責任とは何かを明示するのが責任だと思うのです。これはきわめて難しいですけれども、すべてを網羅していなくても、「せめてこれだけは明示しよう」でも良いわけです。そして目標となると、スライド2に書いてありますが、「我々は、今、どこにいるか」。横文字で書くところとちょっとかっこ良いのですが「When We Are Now?」。それから、「我々は、かくありたい (We Want To Be)」。これらのことは定量的に示すことは非常に難しいですが、定性的にでも理解しておくことは重要です。「我々」とは誰かということ、ちゃんと「あなたたち」だと答えられるような。誰が味方で誰が敵か、意外と敵というのは株主である場合が多いので、株主とはけんかはやめないとかいろいろな事情はあるわけですが。それから、自分たちの立場についてあいまいな部分は、すべてははっきりさせなければいけないでしょう。あまりはっきりさせすぎてしまうと不都合だということ、無理にはっきりさせなくても良いですが、そうすることで成果が出る。それを言うことを避けて、こういうことをしましたということばかり言ってもダメです。将来を予測する際に、目標を設定してそこから現在を振り返ることを「バックキャスト」いいいますが、一方で「フォーキャスト」といって、予想を立ててその通りに動くというやり方もあります。これはやり方は異なっても、目的を達成するという点では同じです。

責任というのは常に背景に権利があるわけです。例えば、これだけの利益が得られる、自由にモノをつくって良い、売って良い、そのかわりこれを守りなさい、というような。そこに法を守るとか、環境を汚染しないということが出てくるわけです。

スライド4に挙げた評価要素は便利なので使っていますが、ここでは常に評価要素を三段階で順番に考えています。まず「適合性」で、これは立てた戦略が正しいかどうかということです。その次に「実行可能性」。正しいけれど、実行できるかどうかということです。それから最後に「受容可能性」。実行できたとしても社会的に受け入れられるのか、公的に受け入れられるのか、このように3段階で考えています。この評価要素は、平和的な活動も含めて、さまざまな現実の作業すべてで使うことができると思います。この3つを踏まえないと、無責任なものになると思うのです。CSRの政策でもキャンペーンでも、実行できないことを、するべきだと言って、実行できないことに文句を言うことはいつでもできます。ただ、やはりそれは問題ではないかと思ひます。

そして、ここで、2008年度版の『CSR セミナー録』をお持ちの方は、27ページにあるカコミ書きの「労働基準法1条」の下をご覧ください。私はもともと労働経済学出身ですので、労働CSR論に対する疑問について触れたいと思ひます。もともと労働CSR論が出てきた背景として、欧米の多国籍企業が、海外で取引する企業を通じて、意図的に低賃金労働や児童労働を推し進めたことから出てきた論議だと認識しております。また、そういった問題のある海外の企業を、どこまでチェックできるかという問題があります。直接取引のある仕入先が100社あれば、その先は1000社を超えます。スーパーなら数万社になるでしょう。そのトレーサビリティ、つまり商品が、どこでどういうふうになられたのかを、どこまで把握できるのかという問題です。また、低賃金労働や、児童労働についても、そのトレーサビリティをどう確保するのか。捜査権を持っていない企業がどのぐらいチェックできるのかという疑問です。こういったことは、国家間での取り決めとしてあるべきではないかとも思ひます。児童労働に関する問題は、日本のように国家がきちんと児童労働を禁止し、罰則規定を設けていくことが重要です。それから当然ながら、生活できない子どもたちや家族に対してセーフティネットを供給すること。こういった環境をしっかりとそろえなければならぬということ。企業が児童労働の現状を追おうとしても、そのシステムは複雑で追いつけないということもあります。例えばこのマイクにしてもどこかで子どもを使っているかもしれない。その場合、どこまでが児童労働にあたるのか、その製品の流通を認めて良いのかという問題も起きてきます。企業の内情をチェックするというのはたいへんな権限があることです。しかも、仕入先の方がはるかに購

入先よりも立場が強いという例はいくらでもあります。しかし、こういったことを無視しては、いつまでたってもそういう批評はできるけれども、問題は解決できないということは無責任なものだと思っています。国家にはそういうことは強力に要求していくべきなのです。国に対して、いろいろな問題を見つけて報告する、これは必要だと思います。一つの例だけを挙げましたが、CSR論者自身も、自らの責任としてこの点は意識していくべきだと思います。できないものはできないと判断し、決断できること。これが私の責任というものに対する考え方です。

司会 “R”だけでも何人かの人に話を聞かなければいけないところですが、今日は福田さん、お一人で。つぎは「CSRの“S”をどうとらえれば良いのか？」という話を岡本さんをお願いします。

講義④ CSRのS(社会的)ってどう捉えれば良いのでしょうか？

岡本 それでは、最初「CSRとは何ですか？」でお話したことの続きを1~2分お話しした後、本論に入りたいと思います。

三者三様、十人十色になると思うのですが、私はCSRの考えを、このように「A→B→C→D→E」で分けています(スライド10:p.57)。これは経団連や、私の所属している環境経営学会で使うと、非常に評判が良いです。なぜかという、本来CSRは「E」の生態系よりでなければいけないのに、多くの企業が「A」や「B」の経済よりにいるということがわかるからだと思います。5つに分けるのが正しいかどうか、例えばグーチョキパーと同じように3つくらいでも良いかもしれませんが、「A~E」の区分けも明確にあるわけではありませんが、「A」は経済的基盤中心で、貨幣価値ですべてを判断するという状態です。しかしこのような発想は、いわば“経済一神教”的で、石頭です。こう言うと、「先生とはやりにくいな、なにが石頭だ」といつも思われてしまうのですが、それでも経済の発想でやると、このように「A」になることに違いはありません。

私が捉えているCSRとは、生態系もひっくるめた経済学にしたいというものです。従来の経済学や会計基準には、ある種の誤りがあると思われる。つまりその歴史を考えてみると、会計は1600年ぐらいからで、たかだか400年。いわゆる経済学も200年。ファイナンスのさまざまなテクノロジーも、戦後の20~30年で生まれました。そういうふうに人工的につくったものすべてを計算しようとしているのが現在の状況です。その一方、生物には38億年の歴史があるわけです。地球46億年のなかの38億年。いろいろな淘汰

を経て、最適なかたちになっているわけです。そういう発想で、経済やファイナンシャルシステムを考えていこうというのが、私の狙いです。

CSRを「A→B→C→D→E」に分けた場合に、「E」の生態系よりの状態とは、「CSRとは何ですか？」の際にお話したように、「生態経済学」が考慮された、新しい思想だということができます。ところが、実はこれは新しい思想ではなくて、1000年、2000年、少なくとも江戸時代あたりまでは、人間が普通に持っていた自然の法則に則って生活しているスタイルそのものなのです。ここの「A」に挙げてある「従来の思考」は、時間で言えば戦後60年。つまり、こちらの発想の方こそが、まさに新しく、私から見れば間違った方向に動きだしているわけです。それを従来のかたちに戻さなければいけないと、このように考えています。例えば、企業経営においても、ファーマンテーションセオリー(発酵理論)というのがあって、ちょうど酵母菌が自然に増えていくような発想で企業を経営すれば、何もコンプライアンスやリスクマネジメントなど、何重にも経営管理をする必要はないと考えるようになるわけで、その研究もしていかなければならないと思います。

しかし、これは本論ではないので、“S”をどうとらえるかという話に戻ります。スライド13(p.59)は、2009年の6月にアメリカにCSR調査へ行ったときのまとめですが、全部で8項目あります。言いたいことは3点です。

1つめは、CSRを煎じつめれば、結局は個人に帰着するということです。つまり、企業や行政に何かをしてもらうことを待っていても、何も始まりません。結局は個人に戻ってきます。手前みそになります。私は20年くらい前から車に乗るのをやめました。代わりに自転車に乗ることにして、例えば月島から府中の競馬場へ自転車で行くし、普段の生活もだいたい自転車で行動しています。一石二鳥で、82キロぐらいあった体重が70キロになり、ちょうど良いかな、と思っていますが、このように、CSRを考えていくと、最終的には個人に戻ってくるのです。

2つめは、自然をお手本に学ばなければいけないということです。究極的には、今ある状態を自然に戻していくこと。先ほどの「CSRとは何ですか？」の話のなかで、バイオミクリーの話をしました。例えば新幹線でも、走行中の空気抵抗を緩和するために、カワセミのくちばしのかたちを参考にしたり、あるいは低騒音で走るために、ふくろうの羽のかたちを参考に、自然界の形態を大いに利用しているわけです。このように動植物の形態から模倣する例は、製造業で多く見受けられます。昆虫や植物の持っている形態や機能を、社会システムのなかにも利用する必要があると思います。

2008年に、中野さんに誘われて屋久島に行き、そこで杉

を見て驚いたことがあります。私が持つ杉のイメージは、まっすぐにピーンと立って根がストーンと生えているというものでしたが、屋久島の杉は、土が少ないので、根という根が絡み合って、岩を抱くようにして立っていました。あるいは板根といって、根が板状に突き出て、少しの土壌しかなくても倒れないようになっているわけです。根が方々の木と絡み合っているのを見て、これを高層ビルで利用すれば、何百メートルという杭を打たなくても、隣同士の高層ビルは地下で横につないでおけば、かなりの地震にも対応できるのではないかと考えました。先日、このことを建築士の友人に言うと、すごく良い発想だと言われました。ただ、これはまた経済的なことになりますが、いろいろな計器関係の問題があって、法律上難しいのではないかとということでした。つまり、法律やファイナンステクノロジーなど、後からできたものが、従来ある自然から学んできたことを壊してしまうという一例だと思います。そういう意味で、自然に戻る必要があるというのが2つめです。

それから3つめは、新谷さんのお話のなかにもありますが、マネジメントシステムの確立です。これは、私なりの言い方をすると「“部分最適”、“個別最適”から“全体最適”へ」ということです。例えば、コンビニが10社近くあると思いますが、セブンイレブンならセブンイレブン、ローソンはローソンで配達するのではなくて、すべてのコンビニの配達を一台の車で相乗りしたら、使うガソリンの量も少なく、効率的になるのではないかと。このように、社会システムを“個別最適”から“全体最適”に変えていく、そういったCSRをする必要があると思います。

個々のキーワードについてですが、アメリカの企業やNPO、教育機関など多様な訪問先でCSR調査を行いました。私は福田さんと同感で、アメリカのCSRのあり方に疑問を持っていたのですが、当然のことながら、環境への取り組みやCSRが進んでいるところなので感心したということと、先ほど申し上げた、CSRが個人に帰着するということが実践されていて、アメリカ流のマネジメントシステムがかなり確立されていると思いました。

CSRとか環境という言葉以上に、「Social Justice」という言葉を使っていて、これは“社会正義”と訳せばイメージが湧きやすいと思います。CSRや環境というと、どうしても一つひとつの項目があって、あれもこれもチェックして、それぞれを行っていくというようなイメージがありますが、そうではなくて全部統合化して全体で解決していくという方法です。フランスやイタリアでは、芸術と体育と哲学(道徳)の三教科しか授業科目のない学校があるそうです。それで中学、高校に進学して、自分の興味や関心が定まると、どんどんと専門に進んでいく。CSRや環境についても、あれやこれやの項目といったチェックポイントでやるのでは

なくて、全体的にやっていくという発想が大事だと思います。そしてその為には、個人へと戻っていく必要がある。その際の視線として、生態系の側から見ていくという発想が大事なのではないかと思います。

次の「Share the Road」についてですが、サンフランシスコに行って驚いたのは、20年前に行ったときに比べて自転車に乗る人の数が大変多かったことです。私は、てっきり車を持っている人が余暇に自転車にも乗っているのだと思って聞いてみたら、最近の若い人は車を持たないで自転車に乗っている人もいるという答えが返ってきました。自転車に乗っている人は老若男女です。彼らが乗っているのはいわゆるママチャリではなく、ロードレーサーのように本格的な自転車で、ヘルメットもかぶり、服装も本格的です。その自転車が走る道路には、「Share the Road」という標識があり、自動車が自転車にも道を譲ることを促して、こういう点でも社会全体がうまく溶け合っていると感じました。

それから、マネジメントシステムということでは、アメリカでは、「この湖は泳げます」という案内があります。日本ではどうでしょう。泳げたとしても、湖だとかダムでは責任問題が発生すると思うと、遊泳禁止が絶対出ますよね。ところがアメリカの湖には「この湖は泳げます」とあるのです。水は冷たいはずですが、実際に車で来ていた、お父さんとお母さん、子供二人の4人家族が水着に着替えて泳いでいました。ここで大事なことは、日本では責任から逃れるために、責任を取らされることをあまりにも恐れるために、法律や条例で何でも規制してしまう傾向がありますが、企業にしてもそれは同じです。私がよく疑問に思うのは、自転車を押して歩かなければいけない道が増えていることです。このようにして規制や法律を作り過ぎてはいけないと思います。

それから、「(公共の場は)全面禁煙」についてですが、アメリカではほとんどそのようになっているらしいのですが、これを日本に置き換えて考えてみると、まず国が全面禁煙という法律の一番上のところをやらないものだから、店で禁煙になっていないところがあると嫌煙派と喫煙派のあいだでケンカになります。一方、店主が禁煙しようと決めた所はちゃんと秩序が守られる。しかし店主としては、隣近所が喫煙を認めていたら、うちに客が入らなくなって困ると、迷うわけです。その時に、例えば神奈川県のように、県主導で禁煙にすればそれはうまく徹底される。一番悪いのは国の姿勢がはっきりしないことです。一か所でマネジメントシステムをきちんと整えさえすれば、下まで苦労しなくてもいいのに、あらゆる下の段階でいろいろな苦労をしているというのが現状です。

CSRというのはそういうところをきちんと直していくということも、重要だと思います。

以下は、また機会があれば、その時に話すことができると
思いますので、そうしたいと思います。

司会 ありがとうございました。次は「ESDの“E”とは何
ですか?」、その特徴は何ですかという話を私(川嶋)と中
西さんと二人で話します。

講義⑤ ESDのE(教育)の特徴とはどんなものでしょ うか?

1) 参加体験型の学び (pp.76-81 スライド1-12)

川嶋 ESDは、“Education for Sustainable Develop-
ment”、要するに“E”は、educationのことです。このESD
の教育の特徴に、“参加体験型の学びの輪”などがあります。
今日は残念ながら参加体験型ではないので、皆さん恐らくつ
まらないな、と思っているのではないかと思うのですが、大
学はそういうところですからあきらめてください。



今日は3つのお話をしようと思います(スライド2)。1つ
めは、「教育とは・・・伝えることとは・・・」という、僕
がいつも話していることです。それから2つめは、参加体験
型の学びの構造について。そして3つめが、「知る」から
「行動する」への道筋というお話をしようと思います。

これはいつも僕がお話していることなのですが、およそ
2500年前の老子の言葉で、「聞いた事は忘れる」というもの
があります(スライド3)。聞いたことは忘れるもの、見た
ことがあるとちょっと思い出す、でも体験したことって理解
するよね、という意味のことわざです。川嶋さん、このこと
わざには続きがありますよ、と教えてもらって、それは何か
というと、「To find is to use」。つまり、「見つけたことは
実践できる」ということで、なるほどと思わされました。こ
れはあくまで学ぶ側から言っているのであって、伝える側に
立つと逆になってしまいます。どういうことかということ、今
一生懸命に話しているのですけれども、言ったことは忘れら

れてしまう。それは残念、という感じです。だから、見せた
ことはある程度思い出してもらえ、体験してもらったこと
は少し分かってもらえるということで、結局は学び手が自分
で発見したものがその人の身に着くということです。

つまり、体験と発見から学んでいくことが非常に重要だ
ということです。言ったかどうかではなく、伝わったかどう
かが大事で、いくら「言いましたから!」と言っていても仕
方がありません。

また、教育(education)の語源とされている“educere”
は、ご存じの方もいらっしゃると思いますがラテン語です
(スライド4)。英語の辞書にも載っていますので引いてみて
ください。辞書を引いてみると、“教え込む”という意味や
、“引き出す”という意味が載っていますが、これらの意味は
逆ですね。教育とは“educere”することだよ、と言う人が
いますが、大事なのはやはり“引き出す”ことでしょう。そ
して、具体的に何を引き出すのかということ、学習者の“能力”
や“個性”、“やる気”や“元気”を引き出す、これが“educere”
なのです。僕は主体的な個人を育てたいのです。先ほど阿
部さんのお話の中にもありましたけれども、ESDだからこ
そ引き出す教育を大事にしていくというのが僕らの立場、ス
タンスです。

2番目の、参加体験型の学びの構造のお話に入りますが、
「学習循環過程」というモデルがあります(スライド5)。モ
デルですので、これはいつでも当てはまる公式というわけ
ではありません。まず今日だったら、こうやって話を聞いたり
考えたりしていますね。今日は参加体験型の学習じゃないの
で当てはめるのは難しいですが、さまざまな実習をしたり、
森の中で体験をしたり、街の中でも体験をします。そうやっ
てそれぞれが同じ体験をし、そこからはまず一人で、その体
験はどういうことだったのだろうかと、ちょっとしたメモを
書いたりします。そのメモを用いて、それぞれの意見をシェ
アします。すると、「どうしてそういうことを思ったのだろ
う」、「これはどういうことなのだろう」というように、いろ
いろ議論が起こります。そこで初めて指導者がやって来
て、「つまりそれってこういうことじゃないの」と、全体で
一般化する。これを図のようにぐるぐる回していくのが、参
加体験型の「学習循環過程」だという定義の仕方がありま
す。

ただ体験学習には、スライド5の図にある横線の上しかや
らない体験学習が多くあります。体験だけして、それでおし
まい。あれはとでももったいないと思います。本当は体験し
たところからいろいろなことが学べるはずなのに、次々に体
験だけをしていく。それは体験学習ではなくて、いわば“体
験だけ学習”というものです。残念でもったいないこと
です。本当は体験の加工化をしないといけないはずなのです。

もう一本縦線が引いてありますが、そこから左側の部分だ

けということもあります。例えば今のこの瞬間、皆さんは何の体験もしていなくて、先生の話の聞いているだけ。これはいわば“言っただけ教育”というものです。これはなかなか難しい問題で、この方法は、たくさんの方を伝えられますから、非常に効率が良いわけです。「学習循環過程」を実践しようとする、効率の面ではとても悪い。しかし、参加体験型の学びの構造とはこういうものだということはよく理解しておいた方がいいと思います。

蛇足ですが、“体験だけ学習”だけでぐるぐる回っていても、一般的にはそれを堂々めぐりといいます。そして、この「学習循環過程」は、「PDCA サイクル」ととても似ていると思うのですが、いかがでしょうか（スライド6）。

次に、スライド7に、「伝わるコミュニケーションのための3つの要素」を挙げておきました。つまり、伝わるコミュニケーションとして、その内容が良いか、方法が良いか、関係性が良いかが重要だということです。この瞬間、皆さんと何の関係性もできていないことが、非常にしんどいなと思っていますが。

次に、AC ジャパン、旧名が公共広告機構の、「身近な環境対策」というテーマの広告からの引用です（スライド8）。「地球温暖化については、毎日、情報があふれています。私たちはそのために何をしなければならないかをよく知っています。でも、実際に行動に移している人はどれくらいいるでしょうか。地球温暖化は深刻です。知っているだけではダメです。ささやかなことでも、何かを始めなければなりません、と訴えかけます。」これは、AC ジャパンが2007年から行っている、「知っているを、しているへ。」というキャンペーンの一つです。これは、結構上手なコピーだと思います。ちなみに、「知っているけど、していない。」というバージョンもあります。

「学び」から「行動」までの構造を図にまとめてみました（スライド9）。一応は、“知らない”から“知る（学び）”へ。“知る（学び）”から“やる（行動）”へという過程を描いてあります。知らない人が知る、知ればやる、というように描いているのですが、実際は線で描いたカーブのようなかたちだと僕は思っています。気持ちは、“知る（学び）”で一応上がるけれども、少しすると落ちてしまう。ここが、“知っているけどやらない”、というホールで、ここには“深く暗い溝”があるわけです。ある年齢以上の方はわかると思います。そこで、どうしてここで下がってしまうのか、どうしたらこの坂を登れるのか、“やる（行動）”に移すことができるのか、というふうに皆が考えるわけです。実はこの図では、皆さんと問題を共有しただけで、その解決策については何も述べておりません。しかし一つ大事なことで、[知ったからといって、やるというものではない]ということも認識しておいた方がいい。皆さん胸に手を当てればよく

分かると思います。

そこで、“知る”から“する”の変化を、まず「学び」から「意識変革」へという第一段階、「意識変革」から「行動」へという第二段階で整理してみたらどうかと考えてみました（スライド10）。

スライド11に、広瀬幸雄先生が、『環境と消費の心理学—共益と私益のジレンマ—』（名古屋大学出版会、1995年）という著書のなかで、「学び」から「意識変革」までに必要な三要素をまとめられた図を載せておきました。環境保全の「意識」が生まれる三つの要素として、〈環境リスク認知（危機感）〉、〈責任帰属認知（責任感）〉、〈対処有効性認知（有効性）〉があるということです。僕はインタープリター、つまり通訳の仕事をしていますが、難しい言葉を簡単にすることもインタープリターの仕事の一つですので、三つの要素をそれぞれ自分なりに翻訳してみますと、〈環境リスク認知（危機感）〉は、「これは深刻だ、かなりヤバイぞ」と思えること。それから、〈責任帰属認知（責任感）〉は、「誰かの責任ではなくて、これは自分の責任だ」と思えること。それから、三つ目の〈対処有効性認知（有効性）〉は、「なんだ！こうすれば良くなるんだ」と思えること。少なくとも、この三つが必要だと思います。

次に、広瀬幸雄先生は同じ本のなかで、「意識変革」から環境保全の「行動」が生まれるまでに必要な三つの要素として、〈実行可能性評価〉、〈便益費用評価〉、〈社会規範評価〉を挙げられています（スライド12）。皆さんだったらこれをどう訳すか、というワークをしてみても面白そうなのですが、今日は時間がなくて僕がしてしまいます。〈実行可能性評価〉は、「自分にも出来そうだ」と思えること。〈便益費用評価〉は、「お金がなくても参加出来そうだ」と思えること。これは大事なことですよね。それから最後の〈社会規範評価〉、これはとても大事ですが、「自分も行動しないと恥ずかしい」と思えること。こういう状況になれば、皆が行動し始めるのだと思います。僕自身は、実際そうだろうと感じています。しかし、このように何でも三つに整理してしまうと、必ず四つ目があると思いますので、皆さんもこの三つだけで問題が解決することではない、ということはわかっていただいて、考え方の整理ということでお役立て下さい。

僕の持ち時間のテーマは、「ESDの学びというのは参加体験型がと大事だと言われている」というものですが、参加体験型の構造を、ちっとも参加体験型ではなくお話したというのが、僕のお話でした。

司会 引き続き中西さんからは、少し違う角度から、「ESDの“E”とは何ですか？」という話をさせていただきます。

2) 教育と学習—対話の重要性 (pp.82-85 スライド1-8)

中西 はじめまして、中西と申します。よろしくお願いいたします。



先ほど川嶋さんの方から、ESDの学びでは、参加体験型という学習がポイントだというお話があったと思います。

今日僕が話をするのは、参加体験が重要だということ、教育科学の人々なども注目し始めているという話を、簡単にさせていただきます。ご存じの方も多くいらっしゃると思いますが、教育学において、1990年代の初頭から出てきた“状況主義”と言われているものの話を中心に、簡単にお話したいと思います。

最初に、ESDの概念の整理をしてみます。「ESDの概念整理図」(スライド2)はよく使われている図で、環境省の白石賢司さんが、2007年の公開セミナーで示された図です。それによると、ESDというのは“持続可能な社会に向けた人づくり”であるということです。そのためには、個々人の意識とライフスタイルの変革が必要であり、もう一つには、職業を通じ社会経済構造の変革に取り組む人材の育成が必要だということです。

キーワードとしては、「人材を育成する」ということ。その際に、育成の仕方をどうするかがポイントだと思います。ここで気づくことは、育成と教育と学習の三点を、どう位置づけたいのだろうかということです。

僕がなぜそこに悩んだのかというと、阿部さんも監訳に関わっておられる、ユネスコの『持続可能な未来のための学習』(立教大学出版会、2005年)では、“学習”という言葉を使っています。これは「なるほど」、と思いました。一方、目標値、つまり目標のおきかたとしては「持続可能な開発のための教育」ということで、“教育”という言葉が使われています。

それでは、“学習”と“教育”とは同じなのかと考えてみると、それについては考え方を少し整理した方がいいと思ひまして、皆さんの参考になればと思ひ、簡単な資料を用意しま

した(スライド3)。ここには、「『人材を育成する』際に見られる2つの側面」としてあります。

1つめとしては、これは狭義の意味として挙げていますが、教育です。これは言い換えると、「意識や知識というものは脱文脈化できる」という主張から形成されている知識伝達の場、と位置づけることもできます。つまり、簡単にいえば何処にいても“1+1=2”だということです。これは、たとえ立教大学にいてもコンビニにいても、“1+1=2”ですね。当然のこととして共有されている、ということです。このような場、知識をきちんと伝えましょう、というのが教育の場です。

では、2つめの学習についても全く同じことがいえるかというと、1990年あたりから、それは少し違うのではないかとはい出す人たちが出てきました。これは“状況主義”と呼ばれている人たち、“状況的学習”ということをも主張した人たちですが、その学習の特徴は何かということ、共同体への参加を通して成される、知識や技能の習得実践であると言っています。

「(広義の)学習・学び」のところに、「共同体への参加」とありますが、この「共同体」とは、“コミュニティ”の訳です。一般的に会社は“コーポレーション”ですが、例えば会社で働くといった場合、会社は“職業の実践の場の共同体”と表現されたり、いわゆるネットでのコミュニケーションについても、彼らは“コミュニティ”と位置付けています。そういった共同体への参加という際に生じる一つの特徴が学習なのだと言っているわけです。だから、学習というのは、「状況に埋め込まれている」という言い方をします。つまり、状況の中に実は学びがあり、参加した中に実は学びがあるということです。

次に、スライド4では難しい言葉で説明していますが、ジーン・レイブという人が「正統的周辺参加論」を提唱しました。ここに挙げた本は翻訳が出ています。ジーン・レイブとエティエンヌ・ウエンガーの共著で、『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』(産業図書、1993年)というタイトルの本です。これは非常におもしろいです。教育と学習というのは少し違って、学習とはコミュニティへの参画や参加、体験を通じて、行為として習得されるということが分析的に書かれています。

その本からの引用を挙げておきました。「個々の学習者は、ひとまとまりの抽象的な知識の断片を獲得し、それを後に別の文脈に移して当てはめる、といったことはしない。むしろ、学習者は正統的周辺参加(LLP)という、ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務を遂行する機能を獲得していくのである・・・つまり、学習はいわば参加という枠組みで生じる過程であり、個人の頭の中ではないのである。」とあります。この中に「正統的

周辺参加 (LLP)」という言葉が出てきました。これは、正当に認められた人間があるコミュニティに参画しているということですが、その一番わかりやすい例、典型的な例は、弟子がある職業グループに入って、そこで親方の技術を習得するというパターンだということで、彼らはそれ以降、徒弟制の研究をするようになります。

アメリカの人たちは、味方と敵をはっきり分けて論文を書く傾向があるので、ここでも強い言葉で書いてありますが、いわゆる学習というものの一つの側面を非常によく表わしていると思うわけです。

このように考えてみると、学習カリキュラムというものは実は質が変わってきます。いわゆる教育といった場合には、どうしても教える側の視点から組み立てることが多いのですが、学習カリキュラムというのは、実は学習者が学ぶ視点から構成されなければいけない。こういった考え方がでてくるのです。これがいわゆる“状況的学習”の、あるコミュニティに参加して、ある技能を修得するときに見られる特徴だということです。

なぜ、このような話を皆さんに考えてみませんかと言ったかということ、“持続可能性”という概念の中には、実は脱文脈化できる領域と、脱文脈化できない領域の両方があるからです (スライド 6)。例えば、先ほどから福田さんが盛んにおっしゃっていましたが、トレードオフみたいな考え方というのは当然あります。そして、ここには脱文脈化ができる部分とできない部分と双方あります。双方の視点をふまえた対話こそが“持続可能な開発”のための第一歩なのだろうと僕は考えているから、こういう話をさせていただいています。

例えば太陽光発電というものを考えてみましょう (スライド 7)。太陽光発電は最近ブームになっていますが、買い取り価格が1キロワットあたり48円、それまでの2倍に増えて、国や自治体からの補助金も出るということで、導入する家庭も増えています。

これは、「再生可能性エネルギーこそが地球を救う」というような場合には、脱文脈化できる、つまり文脈に関係なく、良いという評価がされるわけです。または、太陽電池にはシリコンを使用しているものが多いですが、シリコンは硅石から作っています。硅石はたしか、地球の資源の20何パーセントあって、無尽蔵にある、だからとても良いのだという場合も同様です。

ただ、もう一つ太陽光発電のなかには、実は脱文脈化できないコンテンツもいくつかあります。製造過程におけるエネルギー消費の問題については、しばしば言われていますが、例えばシリコンのリサイクルをどうするかということ、実はシリコンのリサイクル方法は確立されておられません。ですから、15年経って買い換えたときに、現状でいうとあれはゴ

ミになります。実際どうするのかとっているのですが。原因は、シリコンとガラス面との接着の素材がうまく剥離できないという問題があるらしいです。

それから、「珪石の産出先は？」と書いてありますが、もししたら原料は、それが産出される地域の自然生態系をこわしているという現状があるかもしれない。山を切り開いてしまうという話が出てきたりするかもしれない。

こういった考え方は必ず出てくるので、あるべき未来に向かって、ビジョンをつくるためには対話が必要だということです。その際は両方の文脈をしっかりとおさえなければいけません。

参加体験型学習は、ESDのなかで非常に重要視されていますが、それにしても脱文脈化できない、つまり説明できないことというのは、やはり非常に多いわけです。ですから、このような考え方というのは、やはり並立的に議論していかなければならないと思います。

また、逆の問題もあります。例えば、参加体験の学習をしてリサイクルの知恵を学びました。やはり食べ物のゴミは肥料になりますし、それはとても良いことです。しかし、ある学者さんと話をしたときに言っていたのですが、生ごみの堆肥を、田んぼや畑にまいた場合、土壌が栄養過多になって地下水汚染もおこる可能性があるそうです。

ですから、常に両方のキャッチボールのなかで、ビジョンを作っていくことが重要なだろうと思っています。それが、先ほど阿部さんがおっしゃっていた、ビジョンを作らなければということ、バックキャストしていくかなくてはならないということのポイントだと思います。

どうしてこういったことが重要なのかということ、ISO26000が2010年に発行される予定です。ガイダンス文書を見ると、“ステークホルダー・エンゲージメント”という概念が出てきます。つまりステークホルダーと対話し、その関心事項を理解することが非常に重要になっているということです。

今までは、こういった異なる立場の人たちが、CSRということで、企業中心にまわりの人たちと対話するようになったという流れがありました。それが、いわゆるISO26000時代では、ステークホルダーとの対話のなかで、自分たちの企業がどういうポジションで役割を果たしていくのかというのを明確にしなければいけない時代になっていくのです。

その際には、対話の技術が非常に重要になってきます。ですから、先ほどの川嶋さんの話ではありませんが、参加を体験してもらう一つの目を持つということが、これから非常に重要なのだと思っています。

対話には、デザインの仕方があります。翻訳は出ていませんが、“認知的徒弟制”というかたちできちんと紹介されています。要するに、徒弟制のモデルを用いて、いかに認識を

高めていくかというやり方です。

今日は時間がないので、詳しく話すことはできませんが、第2回「つなぐ人フォーラム」(2009年9月6日～8日実施)で、この話の枠組みについてお話いたします。もし、多少のお時間やお金の余裕がある方、聞いてみたいと思う方は、聞きにきてもらいたいと思います。今日は終りにしたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 それでは、ESD、CSR 分解編の最後はですね、「ESDの“D(開発)”の意味を教えてください」。中野さんをお願いします。

講義⑥ ESDのD(開発)の意味を教えてください

(pp.86-106 スライド1-41)

中野 改めまして、中野です。



今、参加型、参加改善型の輪が大事だという話が出ました。私は普段、そちらの方面で活動をしていて、最近、仲間と『ファシリテーション 実践から学ぶスキルとところ』(岩波書店、2009年)という本を出したり、今、対話が大事だという話がありましたけれど、『対話するカーファシリテーター23の問い』(日本経済新聞出版社、2009年)という本を出したところですよ。

ただ、私は現場での経験は多いのですが、理論的な背景をうまく作れない。今の中西さんのお話を聞きながら、適応できたらいいな、と思っておりました。

今日、私は、ESDにおける“D”の話をさせていただきます(スライド2)。“開発”と訳したり、“発展”と訳したりする、とてもやっかいな“Development”という言葉をもっと皆でお話したいと思っています。

この有限な地球のなかでは、いつかは資源が無くなってしまいうわけですが、それに関わらず無限の経済成長を前提として進めてきた開発/発展は、目の前の現実として既に行き詰まっています。

“Sustainable Development”といった場合、“Development”は、持続可能な“開発”としたり、“発展”、あるいは“成長”と訳されたりしますが、これは単なる訳の違い以上の、大きな意味を持つと思われます。開発/発展とはそもそも何なのかということをもう少し根本的に見直して、せっかく大きい時代の変革期を迎えているので、景気はまた上向くとか、いつか戻るといふ安易でその場しのぎの考えに留まるのではなく、変革期を前向きに大きくターンするために、より根本的なところから議論する必要があるという話をしたいと思っています。

“Development”を辞書で引くと、ご存じのとおり“発達、発育、成長(growth)”という意味、それから“発展(progress)”という意味が出てきます(スライド3)。そして、よく我々がまた違った意味で使う、“開発”とか“造成”という意味も出てきます。また、写真では“現像”といったり、音楽では“展開(部)”といったり、いろいろな意味で使われます。

“Sustainable”は、“維持する”、“継続できる”ということです(スライド3)。ですから、辞書からの訳ということだけを考えてみると、“Sustainable Development”を“持続的な開発”と訳すことは確かに正しいことになります。しかし、日本語で“開発”というと、どうしても天然資源を生活に役立つようにすること、というイメージがついてしまうことも事実です。

それから、“持続可能な発展”と訳すことも可能です。しかし、“発展”とは栄えることですから、いまだにそのようなことを言うのは、能天気ではないかという感じがします。

一方、“成長”というのはどちらかということ、生き物などが育って大きくなること、というニュアンスがありますから、ここでは少し意味が違ってきます。

これは、訳の違いだけではなく本質的で非常に大きな問題を孕んでいます。しかし、意外にサラッと流してしまっているのではないかという感じがして、もっとこだわる必要があるのではないかと思います。

今は仮に、最も一般的な訳である、“持続可能な開発”と言うことにしますが、国連の「ESDの10年」が提案された2002年のヨハネスブルグのサミットに行き、この“持続可能な開発”こそが、世界の大問題なのだとは非常に強く感じました。

“持続可能な開発”について、先進国で言っている意味と途上国で言っている意味とは、ニュアンスがずいぶん違うというのが、その理由です(スライド5)。先進国では、産業成長を目指して、これまでさんざん環境が壊れるようなことをしてきた結果として、このままでは“持続可能”ではなくなってしまうという危機感からこの言葉を捉えているので、産業成長を抑制して“持続可能”にしないとダメだとい

う、“持続可能な開発”の前半部分に重きがあります。

一方、途上国では、持続可能な開発／発展がまだまだ必要で、止まらせてはいけないと考えているわけです。先進国がおかしくしてきた世界で一緒に我慢しようというのは嫌だし、おかしいという意見があります。つまり、自分たちにはまだまだ開発／発展が必要だというニュアンスがあって、“持続可能な開発”の後半部分に重きがあるわけです。このように、前に重きがあるのか、後ろに重きがあるのかによって、同じ言葉でも両者の目指すところは、ずいぶん違うという感じを受けました。

この話を深めていくときに、別に新しい話ではありませんが、ダグラス・ラミスさんという、現在、沖縄で暮らしている政治学者の、『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』（平凡社、2000年）という本を取り上げたいと思います。これはタイトルからして、とても刺激的です。それからその後、これももうずいぶん古典になっていますけれども、西川潤先生や野田真理さんが編集された『仏教・開発・NGO—タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』（新評論、2001年）という本を取り上げます。この二冊から少しおさらいをして、“Development”を考える際の、統一の基盤をつくりたいと思っています。

まず、ダグラス・ラミスさんですが、彼はアメリカ出身で、日本語の上手な方です。本の書き出しは次のようなエピソードで始まります（スライド7）。アメリカのワシントンへ行って来たある友人が、そこで周りにまだずいぶん森があるのを見て、「アメリカってまだまだ発展できるね、だって森の近くにまだ森があるから、街の近くにまだ森があるんだから」と言う。

この友人の経済発展のイメージというのは、森があればそれを切り開いて都市にする、そしてそういう森林が残っている限り発展はまだ終わっていないという考え方です。しかしこれは、20世紀の経済発展イデオロギーの大前提で、多くの人がそう思っているのだということです。

イデオロギーというのはひとつの思想傾向で、政治や社会に対する考え方ですから、経済発展が必要であるという点に関しては、自由主義者も、保守主義者も、民族主義者もファシストも、レーニン・スターリン主義者も、20世紀は皆が共有していたものの考え方になってしまっていたのではないのでしょうか。そして、このようなさまざまな立場や人々をこえて共有されていたこのイデオロギーとは、いったい何だったのかということを中心にきちんと問い直さなければ、その先へは行けないのではないかという問題が、ここでは提起されています。

この経済発展イデオロギーが生まれた瞬間というのは、実ははっきりしているのだと思います（スライド8）。それは、アメリカ大統領トルーマンが、2期目となる1949年の就任

演説で、アメリカには新しい政策があると発表したその内容にあります。その内容とは、未開発の国々に対して、技術的、経済的援助を行い、そして投資をして発展させるというものでした。

それ以前には、“未開発（Under Developed）の国々”という言葉は、使われていなかったといえます。このことは、ダグラス・ラミスさんが、いろいろな文献を調べているのですが、“Development”という言葉の意味が、トルーマンの演説で変えられたというのです。

ここで、“発展”ということがはじめて国策になった。しかも発展させられる国はアメリカではない別の国なのです。自国が発展するのではなくて、よその国のことなのです。

“発展する”というのは、もともと語源としては自動詞でした（スライド9）。例えば、「国Aは国策として国Bを発展させる（開発する）、それが国Bの発展である」、というふうに言うわけですが、この言い方はどこか変な感じがします。どうしてかということ、日本語の“発展”や“成長”もそうですが、英語の“発展する（develop）”は、本来、自動詞であり、自分で発展するというもので、他動詞として、“発展させる”という意味は持っていない。だから、この言い方はふさわしくないように聞こえるわけです。国Aが国Bの“発展”を政策としている。しかしその表現は自動詞ということになって、大きな矛盾がここで生じているのではないのでしょうか。

このようなことから、“発展”は作り変えられた言葉であるという言い方ができます（スライド10）。“develop”とは、本来は“envelop”という言葉の対、反対語です。“envelop”というのは、何かを“包む”こと、風呂敷や紙に包んでいくことです。

“develop”はその反対ですから、“ほどく”や“とく”ということなのです。つまり、紙や布に包まれた何かを出す、風呂敷や包みから出てくる、そんなイメージの言葉です。例えば、蕾が花になる。種がだんだん成長して樹木になる。それから子どもが大人になる。それから、主に生き物の、生命あるものの成長のことも指します。ある段階から次の段階へ変わっていく変化で、前の段階のなかに次の段階が組みこまれ内在されていることを意味します。したがって、前段階の可能性が次の段階で実現する。こういうものが“develop”のもともとの意味だということなのです。

日本語の“成長（育って大きくなること）”、だとか、“発展（伸びて広がること）”というのは、この英語の“develop”のもとの意味と近いイメージです（スライド11）。“開発（開き起こすこと）”というのは、もともと他動詞のニュアンスがあります。

いずれにしても、一種の構造に従うように自然と変化していくことを“発展”と呼ぶのであって、完全に人工的な変化

は、“発展”ではありません。例えば、陶器を作るときに粘土でかたちを作ったとして、「土が発展する」とは言いませんし、木を倒して木材にして建物を建てても、「木が発展する」とは言いません。森林を伐採して駐車場にすることを、「森林が発展する」とも言いません。こういったことは、もともと“発展”ではないのです。

“Under Developed”という言葉を使って、世界の金持ちではない国を“発展させる”のが、アメリカの国策であるとトルーマンは言い出したわけですが、このような経済発展が、その後、半世紀にわたって、アメリカや国連の政策として続けられ、日本もある意味ではODAなどでそれを支援してきたわけです（スライド12）。

このような、地球上のすべての文化、社会、経済、人の生き方、自然などのあらゆることを変える、これほど大規模な国策というのは、人類史上に例がないことだったのではないのでしょうか。西洋の経済制度に入っていない国はすべて“未開発”と呼ぶわけです。アマゾンの先住民も、北米インディアンも、昔からの文明を誇ったエジプトも、です。

もともとこのような発想は、欧州のなかにあって、例えば“キリスト教徒”と“異教徒”という言い方や、“文明国”と“野蛮”、“ヨーロッパ”と“ヨーロッパ以外”という言い方などに見受けられます。それがベースにあって、“野蛮（バルバリアン）”という表現が、“未開発”に置き換わったというようなことが、このトルーマンの言葉の背景にはあるのではないかと思います。

こういうなかで、搾取の構造が見えにくくなっていきます（スライド13）。先ほどのトルーマンの演説が行われた1949年は第二次世界大戦直後で、世界のあちこちで独立が進められ、もう植民地をもってはいけないということがかなり常識になっていました。そして、第三世界に対して、アメリカがいちばん力を持ち始めた時期でもあります。また、米ソの冷戦がはじまり、直接米ソで戦う代わりに、第三世界で激しい覇権競争が繰り広げられました。

アメリカは戦場にならなかった分、好景気になるわけですが、その好景気のアメリカが投資する場所を探しているという、そういう時代でした。

そして数年前から、グローバリゼーションということが話題になりますが、植民地主義も帝国主義もグローバリゼーションの一環と言うこともできます。しかし、当時は、今よりも正直な側面がありました。つまり、これは搾取であるということが、ある意味で搾取する方も、また、される方にも意識されていたということです。

しかし、20世紀の後半になって、経済発展イデオロギーが主流になると、搾取されることが結果的に自分の利益につながるというごまかしがかなり成功し、搾取される側にも定着していったわけです。つまり、本来、他動詞であること

が、まるで自動詞であるかのような錯覚を与えることに成功したわけです。

こういうことを“発展”と呼べば、あたかも、それぞれの文化、文明社会のなかに隠されていた可能性が解放される、こういうイメージを与えます（スライド14）。花が咲くような、子どもが成長するような。“搾取”という言葉が持つイメージとはずいぶん違うことを指しています。「世界中のあらゆる文化のなかには、産業革命を起こして産業国になる内在的な可能性がある」という言い方をすることで、たくさんの人が説得されていったわけです。

しかし、外から資本が入り、自然を壊し、伝統的な文化を壊し、搾取する。これは植民地時代と同じじゃないか、ということ。それを“発展”と呼べば、その社会の、自然で当たり前の、決定された過程であると思われてくるけれども、内政干渉ではなく発展、搾取ではなく発展、暴力的な変化でなく発展というように、“発展”と呼ぶだけで、内在的な能力を解放するようなイメージになってしまっています。

私たちが経済発展と呼んでいることは、地球上のすべての人間、自然を産業システムのなかに取り入れることでした（スライド15）。そのなかで、スラムというのは、逆に近代建築だという言い方をダグラスさんはするわけです。経済発展とは、“スラムの世界”を“高層ビルの世界”へと少しずつ変身させる過程だというのは錯覚であって、ごまかしだと言っています。スラムというのは、むしろ経済発展があったからこそ出てきたということはだいぶ明らかになってきています。経済発展は南北問題を解決するのではなく、原因の一つであることがわかってきているわけです。

引用が多くて、長くなってきてしまいましたが、経済発展というのは、一つのイデオロギーであり考え方であったのに、それがあまりに多く普遍的に共有されて、前提となってしまっています。しかもトルーマンの演説から、“develop”ということがかなり捻れて使われるようになりました。本来、何かが花開く、自ら起こるという自動詞だったものが、「よその国を」をとというふうには、他動詞になっているかもしれない。そのことはきちんと疑って、問い直そうじゃないかということ、を、“development”を考えるとときのベースにしたいと思っています。

もう一つ、これとつながる話ですが、「開発（かいほつ）から開発（かいほつ）へ」という話があります（スライド16）。これは先ほど紹介した『仏教・開発・NGO—タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』からの引用です。

その前段階として、“内発的發展論”という言葉があります（スライド17）。これは、途上国の“開発”が結局は西教化だという、先ほど述べたような“develop”に対するアンチテーゼとして登場し、日本では鶴見和子さんが代表的です。鶴見さんは、「先進国の模倣ではない、伝統、社会構造

など、自己の社会に内在するものの上に立ちながら、外来の開発モデルを自己の社会の条件に適合するよう創りかえていく発展のあり方」を「内発的发展論」と呼んでいます。社会にはそれぞれの発展の道筋があって、その主体であり基本となるのは、住民であるということです。

そして、この「開発（かいほつ）」についてですが、ここ十数年、アジア諸国では経済至上主義的な開発路線がずいぶんと進められました（スライド18）。一方でその弊害も出てきており、このような開発路線を批判し、市民社会の民衆による「もう一つの発展」をめざす内発的发展の動きが広がっています。とくにタイでは、仏教の革新が進み、僧侶と、それに連帯する知識人、NGOによる独自の開発運動が進展しています。

西洋近代をモデルとした従来の外発的、他律的な経済中心の開発から、独自の伝統文化や共生の智慧（仏教）に基づく、内発的・自律的な人間中心の開発へのパラダイム転換がおきています。このような新しい開発のパラダイム、これを「開発（かいほつ）」と呼ぼうということを、改めて言っているわけです。

「開発」は、先ほども述べたとおり、「～を開発する」という他動詞で、「上から、外発的・他律的、人為的」というニュアンスがあります（スライド19）。自然を切り開いたり、江戸時代の「新田開発」もそれに当たります。しかし「開発」というのは、さきほどの「develop」と同様ですが、もともと自動詞です。

それ以上に、日本においては元来、「開発」は仏教用語として用いられていました。「カイハツ」ではなく、「カイホツ」と呼んでいて、これは今の「開発」とはニュアンスが異なり、「内側から、内発的、自律的に、自然に」という意味合いが強かったことが指摘されています。

仏教用語だったということについてももう少し詳しく述べると（スライド20）、仏教においては、人間を含む一切衆生、生きとし生ける者は、悟りを開いて仏になる潜在能力である仏性を備えていると考えられています。

仏性とは、この地球社会や宇宙を司る相互依存の法則、これを「縁起の法」といいますが、こういう自然、人、社会の本来のあり方に目覚め、生あるものすべてに慈しみを持ち、あらゆる苦から解き放たれていこうという能力のことであり、本来の人間性・自然性のことです。こういう仏性を仏教の実践を通じて開花させていくことが、仏教でいう「開発（カイホツ）」だったのです。

同じようなことを、タイの学僧であるパユット師が、「パッタナー」と「パワナー」という二つの言葉で対比して説明しています（スライド21）。「カイハツ」にあたる「パッタナー」とは、「タンハ（貪欲）」に基づいて他律的・外発的に物質的富を増やすこと。この物欲に基づく開発こそが、今日

のタイ経済成長の原動力だったわけですが、同時に、格差や貧困、環境破壊や人心や共同体の崩壊など、いろいろな問題も生み出しました。

そして、もう一方の、「カイホツ」にあたる「パワナー」には、瞑想という意味があるそうなのですが、「チャンタ（精進意欲）」に基づいて心の開発を行い、物欲を自制しつつ、掠奪的でない、自律的・内発的な調和のとれた節度ある開発／発展をめざすものということで対応しています。

こういうことをふまえて、西川先生や野田さんたちは、「開発（カイホツ）」という言葉、仏教を超えて、真の発展のあり方に対する示唆を与えるものではないかと考えています。そして、今日的に定義しなおして、「開発（カイホツ）」とは、「我々の社会や個人が、その本来のあり方や生き方に目覚め、自然および他の社会や個人との共生のために、苦からの解放をめざして、智慧と慈悲をもって自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく、物心両面における内発的な実践」としています。

少し長くなりましたが、このように自分だけではなくて、他のことも考えて、物心両面の内発的な実践をするということです。

こういった過去の議論をふまえて、「Sustainable Development」という場合、この「Development」はやっかいな単語なので、昔はよく「Sustainability」だけを使った方が、気が楽だと思っていたのですが、逆にこの「Development」にこだわるということが、今、非常に大事なのではないかと考えています。いったい、持続可能な何をめざしているのかということ。そしてそれには何が必要なのかということについて、今日の議論をふまえて、私なりに五つほど切り口を考えてみました。

まず、「相互依存（縁起）の理解を」（スライド24）。万物が繋がっていると、しかも、移り変わっている（change）ことをきちんと理解しておく必要がある。

それから、「自利と利他をひとつに」（スライド25）。自分のことと他のことは、実際には繋がっているわけで、当然、自分だけということはありません。それは巡って返ってくるわけですから、この両者を一つにすることが大事だろうと思います。

そして「自然から学ぶ」こと（スライド26）。先ほどの岡本さんの話にも出てきましたが、この「自然」という言葉はもともと日本では、「じねん」といい、おのずとそうなる様を表した言葉です。

そして、「参加型で学ぶ」（スライド27）こと。これも今、川嶋さんと中西さんからお話がありました。

最後に一つだけ、「『幸福感受性』を高める」（スライド28）。「幸福感受性」とは、社会学者の見田宗介先生方が使っている言葉です。「豊かさ」や「幸せ」とは何だろうというこ

とは、よく問い直されています。“GNP (Gross National Product)”ではなく、“GNH (Gross National Happiness)”を重視するというブータンの施策、いわゆる“国民総幸福量”に学ぼうという姿勢もそうです。つまり、“足るを知る”ということ。それは外側の問題ではなく、こちら側の問題という視点です。

社会のシステムを考えることも重要ですが、それと同時にこちらが何を幸福と感じるか。天気の良い日に爽やかな風が流れて、ああ幸せだなと思うと、そんなにガリガリしなくても“幸せ度”が深まったりするわけです。そういうことが、日々を忙しくしていると失われがちになってしまうのですが、感受性の解放に取り組むということはとても大事だと見田先生は述べています。

これは、今朝、思い出したのですが、宮澤賢治は“農民芸術”ということを書いており、私たちも“都会人芸術”が必要だと思います。スライド29に賢治の有名な言葉を挙げておきました。もう時間がないので終わりにしますが、このように、宇宙につながる自分を発見しながら、いろいろな感受性を取り戻していく。そういうことが、実は社会のしくみを考えるときに非常に大事であり、ESDを考える際の両輪になるのではないかと述べて終わりにしたいと思います。

講義⑦ パネルディスカッション—ESDとCSRの関係は？

司会 それでは、スケッチブックとマーカーを、持って講師の方は前の方へ来てください。

講師の先生方に質問をします。

これは2008年10月のセミナーでも同じ質問をしましたが、そのときと同じことを書いていただいても結構ですし、今日の話聞いて、これだなと思ったものを書いていただければと思います。

質問は、今日のシンポジウムのタイトルにあります、「ESD×CSRって何ですか？」です。

それでは白紙のページを出していただいて、絵でも文字でも、記号でも図解でも結構ですので、書けた方から実物投影機に映して、ひとり2分程で、「私はこんなふうに思います」という意見を述べて下さい。

会場の皆さんも、ESDとCSRの二つの関係について考えて、どうぞ書いてみてください。例えば、友だちに説明するとしたら、どんなふうに説明しますか。なにかキーワードでも良いです。

「シンポジウム行ってきたんでしょ。ESD×CSRを理解する7つの質問はどういう内容だったの？」と質問された時、また、「ESDとCSRの関係って何なの？」と聞かれたとき



にどう答えますか。それが分からないから来た、という答えもあるかもしれませんが。しかし、今まで話を聞いて、「こんなことかな」みたいなことがあれば書いてみましょう。読んでみてください、とは言いませんから。

新谷さんが一番早いですか。じゃあこれを、映してください。

では、新谷さんお願いします。

新谷 私は先ほど「CSRとは何ですか？」でお話をさせていただいたときに申し上げたことを書きました。その際、特に答えを出すことはなかったのですが、HR（ヒューマンリソース）の話をした際に、とても重要だと述べた、“人づくり”。そこがやはりESDとCSRの接点なのだろうと考えています。



“Sustainable Development”を、CSRの文脈のなかでどのように作っていくか。それこそが、ESD×CSRの本質というか、ミソであると思いますし、ESDの役割もそこにあるのだろうと思っています。ですから、CSRからアプローチするならば、どういうふうに企業人を育てていくかという部分を考えていくことになりますので、それを抜いてしまうと、結局はPRになってしまうということです。

繰り返しになりますが、やはり人づくりということ。それから、人づくりであると同時に、サステナビリティということ。Sustainable Development というところを考えていくのであれば、これは前回のセミナーの時に、感じる力、感受性の問題、これが大事ですよと申し上げましたので、やはりそういう感受性をどのように高めていくかというところを、企業人にも伝えていくことが大事なのだと思います。以上です。

司会 はい、ありがとうございました。

それでは次に書かれたのは、岡本さんです。これは、なんて書きました？

岡本 例え話から入りたいと思うのですが、私の考えは新谷さんの先ほどの話と通じていて、感性が同じかなと思いました。

私は、自転車だけでなく、水泳を8年やっています。年間に250日くらい泳いでいるのですが、今では、25メートルの平泳ぎを、5かきで泳げるようになりました。その間にいろいろな先生について水泳を習いました。習うことは一つひとつ納得するのですが、それを実際の泳ぎで一度にすると、20も30も教わったことが一度にはでなくて、とても、ごちゃごちゃになっていたのですね。

それを、何度も体を使って行動しているうちに、教わったことが3つにまとまったのです。つまり、1. 伸び伸びと大きなフォームで泳ぐと。2. メリハリをつけると。3. “イナーシャ”とあって、ピーンと伸びたところから惰性で行って、クイックで小さくたんで、パーっと伸びていくこと。

この話を、少林寺拳法を30年以上やっている友人に言ったら、自分も一緒だと言うわけです。少林寺拳法では、100も150もいろいろな方法あるのですが、自分も一緒に、3つにまとめるのと同じようなことをしていると。

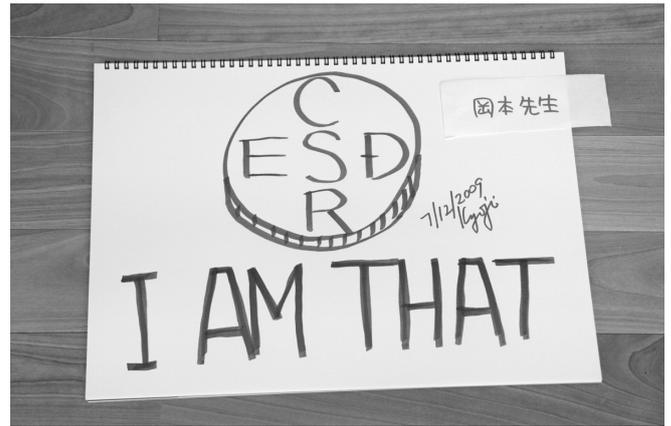
しかしもっとすごいのは、彼のお師匠さんは、3つじゃなくて1つだと、ひょっとしたら0かもしれないと言うのですね。

それで、私はこう思いました。私の泳法が0になったときは、私が魚になったときだと。

どういうことかということ、魚というのは、こういう泳ぎをしようとか、こういうふうにはエラをたてようとかをいっさい意識しないで、何千キロの距離を60キロぐらいの速さで泳げるわけです。

これと同じことがCSRや環境の世界にもいうことができると思います。それぞれが個別に行われているうちはまだ本物ではなくて、自分に身についていった結果、“CSR”や“環境”と言わないで行動に出られるようになること。

それは何かということ、自然に戻るということしかなくて、



「I AM THAT」というのは、インターネットで調べると140件くらい出るので、一度見てほしいし、本もPDFで見られるようになっていています。要するに、相手の立場になるだけじゃなくて、ひょっとしたらあなた自身がその人かもしれないよ、ということです。例えば今、海賊がいろいろ非難を浴びていますが、あなたがもしも海賊の立場だったら、ああいう行動をしているかもしれない、というような。あるいはサンフランシスコで、私が物乞いをしている人に何かをあげると、それは上下の関係であげているようなかたちになりますが、ひょっとしたら、私自身がああいう立場になったかもしれないという考え方のことです。

そういう考え方をすると、CSRや環境の複雑なことを考えるよりも、煎じ詰めていけば、結局自然に戻るようなことを自ら考えていくことになると思うのです。細かく話せば長くなりますし、2分という時間なので、このあたりで切りますが、中野さんが30分くらいかけて話してくれたことに、私はすごく納得をしました。よくわかったし、ああいうふうに理論的にいろいろな人の話を引用して話してくれると、整理がついたと思いました。これがちょうど私の水泳と友人やその師匠の少林寺拳法と同じようなかたちで、私の考えていたことと中野さんの考えとが、頂点では繋がったと、そんなふうに感じました。

司会 ありがとうございました。

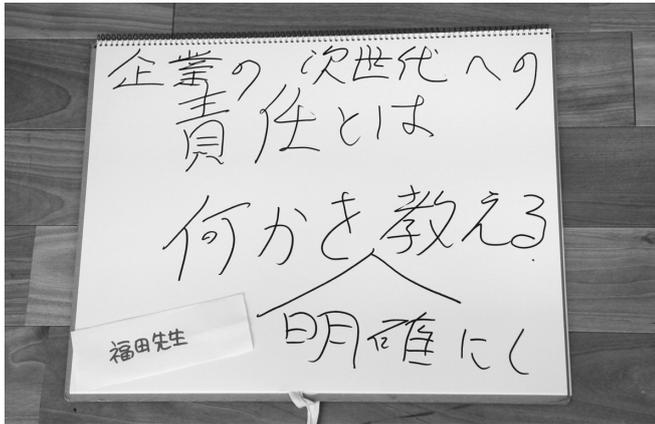
ところで、その“和同開珎”みたいな絵は何ですか？

岡本 これはね、我々のチームで話題になって、皆で考えたものです。ESDとCSRを裏表にして。私はCSRを研究していたのですが、ESDと統合化して一体になっているし、真ん中にある“S”は、“Sustainability”と“Social”を同時にみた方が良いという意味合いで、こうなっています。

司会 はい、ありがとうございました。

次は、福田さん、お願いします。

福田 パパッと急いで書いたのですが、「次世代」。英語でいえば、ネクストジェネレーション。これをキーワードにしたら、すべてのものごとの基準がはっきりするのではないかと思います。持続可能性ということは、原則として次世代が、どのくらい良いか悪いか別にしましても、生きているという前提です。



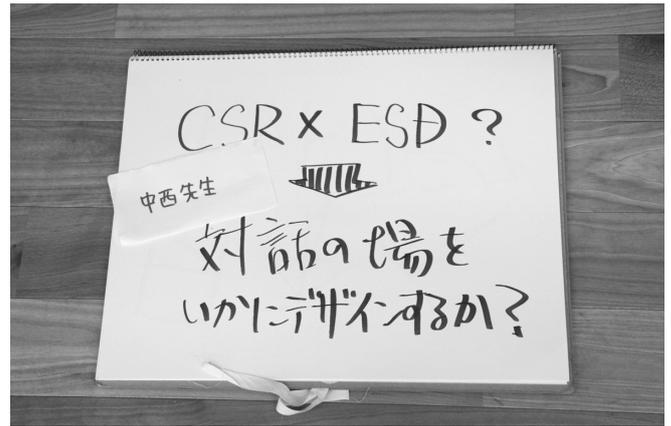
だから、“サステナブルでない”というのは、次の世代がない社会だと思うわけです。次世代というのは、自分たちの息子、もしくは自分たちの会社でもいいですが、次の50年がどういうものになるのか。その時に、責任は何であるかを明確に考え、教える。それは人によって違うのかもしれませんが、そのうちに議論は収斂していくと思います。基本はネクストジェネレーションというのをキーワードにしてすべてを考える、良いか悪いかの判断をする。それが結果的にうまくいかいかないかは別にして、それが基本だと思います。そのためには何が出来るか、今できないことでも、出来るようなものはないかと考えることもあるでしょうし、お互いにその成果を教え合う、こういうかたちが必要だと思っています。以上です。

司会 ありがとうございます。

次は中西さん。お願いします。

中西 「対話の場をいかにデザインするか？」と書きました。

2010年にISO26000が発行される予定となっており、ステークホルダーエンゲージメントの重要性が高まってきたときに、どのような対話を重ねていくのか。また、さまざまなステークホルダーが、協調して社会的責任を果たしていきましょう、持続可能性を高めていきましょうとしたときに、いったい誰がその場を主宰するのか、誰が出てくるのかという問題があります。同時に、現状では言葉や概念が先行しているという側面がありますが、そこでどのような前提を踏まえて共通理解を生み出すのか。こういったことの技術が誰に



も共有されていません。しかしこれからは、そういう世界に入っていくとしているのです。多分、このままで行ったらうまくいかないだろう、と考えられているので“持続可能性”という言葉が着目され始めているわけです。

そういう意味で、僕もそうだし、中野さんも常日頃からしているように、ワークショップを開くなど、やり方はいろいろとあります。つまり、誰かが主体的に場をデザインしていかなくてはならないというときに、誰がやるのかということです。国に任せていいのかとか、行政が絶対にやるべきだとか、考えはさまざまだと思いますが、僕は企業も主体的にやるべきだと思っています。まずそれが、CSRの第一歩だと思っています。

司会 はい、ありがとうございました。次は、中野さん、お願いします。

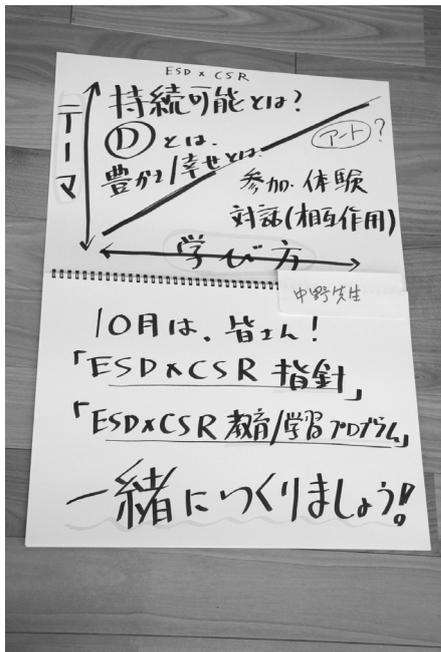
中野 今、ESD×CSRは、たいへん取り組みがいのある、困難な問題だと思います。何事もそうかもしれませんが、テーマと、それへの取り組み方、学び方の両方があるのだらうと思います。個人や企業、そしてそれ以外の組織にとってもこの問題を考えることが必要だと思います。

今日、持続可能や、Development、豊かさとか幸せとか、テーマがいろいろと出ました。私たちは、本当はいったい何を求めているのか、目指しているのかということをも明らかにしながら、それに取り組んでいくときに、誰か先生を呼んで聞きましょうとか、誰か専門家に解説してもらいましょう、どこかの機関に行ってもらいましょうということではなくて、参加し体験し対話を重ねながら、その相互作用のなかでお互いが学びつくりあっていく。そういうことがきっと必要だろうと思います。

そのときに、アートなど感受性が豊かになるようなものにも、もっと触れる必要があると思います。

2009年度の我々センターのシンポジウムは、今回1回目で、10月に2回目と3回目がありますが、そこでは今回の

ようなスタイルはやめて、ここにも書きましたが「一緒に作りましょう！」ということが一番大事にしようと思っています。ESD 研究センターでは、文部科学省に対して、「ESD×CSR 指針」と「ESD×CSR 教育/学習プログラム」を作成して、活動期間（2012年3月末）までに提出する予定です。これは、「長い目で考えました」というような問題ではない気がしています。一緒に作ろうという方々と作るのが良いと思っていますので、秋にはぜひ、一緒に作るような場を設けたいな、それが一番良いアレンジであり、ここから CSR の実質的なものが生まれるのではないかと考えています。



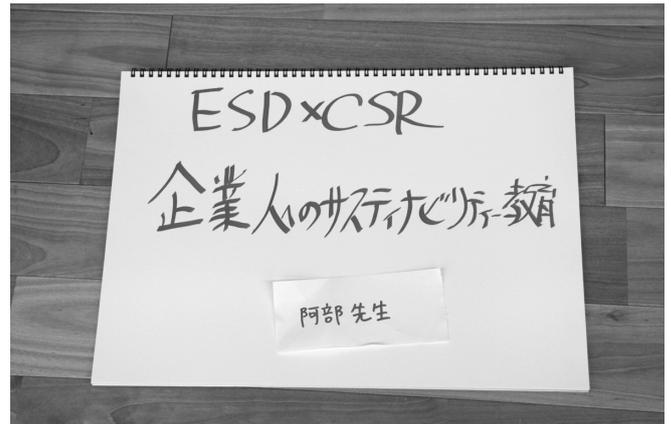
司会 じゃあ、最後、阿部さん。

阿部 今日のシンポジウム全体を通して、ドキドキハラハラしながら聞いていたのですが、野心的であり、それから理想的であり、現実的であり。話す方によって切り口が違ったのですが、それぞれ面白いと思います。

ただ、先ほどお話があったように、プロジェクトとして「ESD×CSR 指針」と「ESD×CSR 教育/学習プログラム」を作成することになっていて、ちょうど今、その中間報告を書いているのですが、最終報告は活動期間内に提出する必要があります。成果を出さなくてははいけない。そしてその成果は、理想的であってもだめなのです。

そういう意味で、最初はまさにこれです。

ESD×CSR は、企業と企業人に対するサステナビリティの意識をどう作っていくか、そしてサステナビリティ教育をどうするかということなので、その原点にもう一度立ち返りながら、今日のように、各研究者のお立場のなかで考えてお



られる、あるいは思っておられるリソースを出して、そして、なおかつ今日お集まりいただいた方々の熱意を合わせて、10月に作っていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

司会 ありがとうございました。

講師の皆さん方のお話していただくかなと思っておりましたが、時間がおしておりますので先に進みます。

阿部さんは、どうしても用事がありそろそろ失礼しなければいけないのですが、最後になにかありますか？

阿部 ESD 研究センターでは CSR チーム以外にもさまざまな催しをしております。ぜひ、そちらの方にもご参加ください。また、私は大学院の異文化コミュニケーション研究科で教鞭をとっております。また、冒頭に申し上げましたように、2010年度には、新しい研究組織 AIIC が始動します。

これについては、ホームページを見ていただきたいのですが、ぜひ立教大学にいらしていただいて、共に CSR、ESD を学んでいただきたいと思っています。

ワークショップ

司会 それでは皆さんには、適当に席を動いていただいて、2~3人で今日の感想みたいなことを少し、10分くらいで話していただきたいと思います。例えば隣の方と、今日全体を振り返るような感じで。誰だかわからない人に話せないよ、と言わないで。

中野さん。どんな話をしたらいいでしょう？

中野 せっかく同じようなことに関心があって来ている人と全然話さないのは、すごく残念だと思うものですから。ですので、お知り合いで来ている場合は離れるようにして、なるべく知らない方と、2人、ないしは3人になって下さい。そうしたら、今日聞いたなかで、「その通り」と思ったことで

もいいですし、「どうかな、それはちょっと違うのではないかな」と反発を感じたものでもいいですし、「これ全然分らなかった」でもいいのですが、いずれにしろ引っかかって印象に残っていること、あるいは、このことをもっとこだわって議論していきたい、そういうふう思ったこと、触発されたりしたこと。そういうことを少しお話していただきたいと思っています。それを踏まえて、質疑応答につなげられればと思っています。

司会 そうですね。その2人、3人で話しあった結果で、このことを聞いてみたい、と思ったことをぜひ質問していただいて、残り時間は少ないですが、それに使いたいと思います。よろしいですか。絶対いやだという人はいますか。…いませんね。それではお願いします。

= 2~3人で討論 =

司会 では、そろそろ、まとめに入りたいと思います。今、グループのなかでお話されて出てきた質問や意見などを、残りの20分ほどの時間で、挙げていきたいと思っています。

(質問者1)

パネラーの方々、川嶋さんを含めて全員に聞きたいのですが、ESDとCSRの両方を含めたイメージで結構ですので、それを一言で言い表すとどうなりますでしょうか。どんなものでも結構ですので、一言で表現してください。お願いします。

司会 ESD×CSRを含んだイメージを一言で表現、ですね。他に、はいどうぞ。どんなことでも質問をしてください。マイクが行きますから、どうぞ。

(質問者2)

質問というか、答えを出すのは難しいと思うのですが、プロフィットを追求しがちなこの現代社会において、CSRをどうプロフィットに結び付けていくのかということについて、まだうまくゴールが見えないなかで、こういった議論が進んでいるという現状があると思います。

僕は広告代理店で働いていますが、いろいろなクライアント様のニーズに応える時に、プロフィットにつながるCSRということが、いつもジレンマとしてあります。例えばお話にも出ていたVolvicのように、水を買うことでアフリカに井戸が掘られ人々が助かるとしたら、その水を購入して、社会貢献に参加できる喜びを味わえると。そういったマーケティングの手法はないのか、とよく聞かれます。何を言いたいかというと、プロフィットにつながるようなCSRについ

て、今後どのようなイメージをもっていったらいいのかということを知りたいと思います。付け加えますと、すばらしい活動だけれども、その団体なりグループが存続するためには、ある程度のEP (Economic Profit) が見込めるレベルまで収益が上がるか、最低でもトントンでないと続かないじゃないか、という疑問がありますので、今の質問をしてみたということです。

司会 はい。それでは次の方、お願いします。

(質問者3)

今の質問にちょっと、似ているのですが、僕は会社を持っています、その会社でCause Related Marketingを推進してひとつの事業をしています。そこで、新谷さんにお伺いしたいのですが、Cause Related Marketingをしていくにあたって、企業、あるいは相手方のNGOに対して、注意すべき点、持続可能性を考えたときに注意すべき点というのは、具体的にどういったものかということをお伺いしたいと思います。

司会 はい。もうひとつ方。

(質問者4)

こういう質問をこういう場ですることがふさわしいかどうか、ちょっとわからないのですが、端的に“持続可能な社会”だとか“持続可能な開発”ということを知ると、我々人間が地球にとって一番邪魔じゃないかな、という考えがよぎるのですが、我々が減るという選択肢は皆さんのなかであると思いますか。それを、本家の方に伺ってみたいということがあります。

というのは、人間が生き残りたいというのは、どこかエコイスティックな気がするのです。

司会 “問う”というのは大事なことですよね。質問をつくるというのはすごく重要なことです。質問を共有するだけでも、ずいぶん見えてくるがあると思います。

(質問者5)

大阪から来たので、質問だけして帰ります。

阿部先生がお話された、企業人のサステナブル教育についての質問です。自分のグループにもいるのですが、頭がカチカチになってしまった社会人に対して、本当にできるのかという疑問を持っています。そのことについて、戦略的な作戦を教えていただければと。

司会 はい。こんな感じでしょうかね。

それでは、残った18分でパツパツとやってみましょう。
最初の質問、「ESD×CSRのイメージを日本語一言で示すと？」に答えられる人いますか。それではまず、福田さん。

福田：「着眼大局、着手小局」。

広くみて、出来るところからやっていく、ということ。

新谷：「義」。

正義の「義」ですね。中学生くらいからの私の座右の銘なのです。別に義理人情の世界に生きているわけではないのですが。「義を見てせざるは勇なきなり」といいますね。

やはり、やらなければいけない時は、とにかくやらなければいけないのではないかと思います。僕はやはり、ESDというのは社会、ある意味では地球社会のために、皆で考えなければいけないことだと思うのです。共通のことだと思うので。こういった義の精神というのは、今こそ大事なのではないかと思います。

中西：僕は「続」。

「つづく」と書いたのですが、続けていかないと意味がないので。続ESDとか、続々ESD、続々々ESDみたいなセミナーを、このまま繰り返していくことに意味があるのかという思いもあるのですが。続けないと意味が紡ぎ出せないということです。そろそろマネジメントや、マネジメントシステムという観点からも、少し根本的に考えていかないといけないというのは、課題も含めてですけれども思います。とにかく、一字で表すとこうなります。

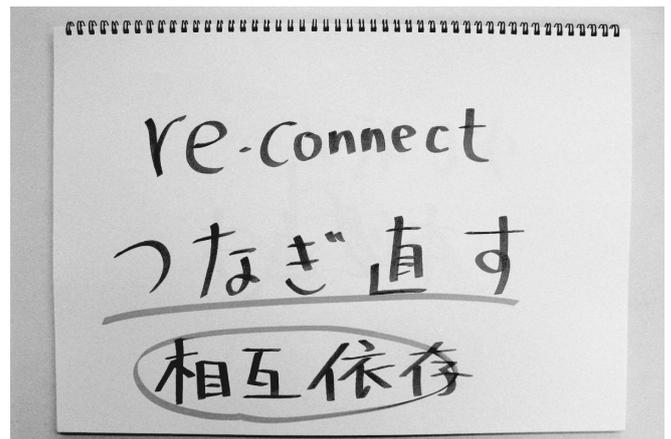
岡本：「享」。

これは、「さずかる」という字で、仏教用語です。熟語はわずか四つしかありません。享樂のキョウであり、享受のキョウであり、享保の改革のキョウであり、私の名前の一部であるのですが、どういうことかということ、いろんな授かったものに忠実に生きると、謙虚に生きるという意味なのですね。「I AM THAT」と似た言葉に、男性としては、112歳で日本一の長寿でいらっしゃる、木村二郎右衛門さんの言葉が面白くて、彼の信条は、「思うこと思うがままにならぬのがかえりて己が身の為にこそ」。つまり、こうやりたいこうやりたいと欲はたくさんあったけど、そういうものが叶わなかったのが自分の一生だったと。だけど省みて、112歳になって振り返ってみたら、それが結果的に今日の自分を良い方向に導いてくれたと。これはまさに、あまり欲を出して、人工的にいろいろなこと

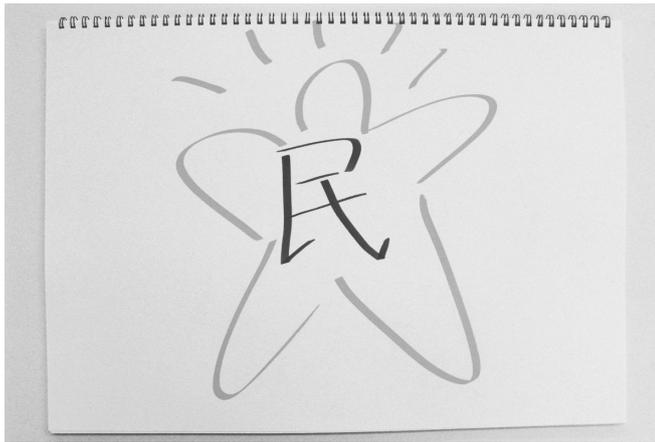
をするのではなくて、自然に帰るということではないかと思います。何が正しいかどうかというときに、自然と比べて、正しいかどうかを判断するというのが大事なのではないかなと私は思います。

司会 ありがとうございます。

中野：思わず、「re-connect」と英語で書いてしまったのですが、“つなぎ直す”ということを大事にしています。それは人と人であったり、人と自然であったり、あるいは人と自分自身、心と体であったり、社会と人であったり。それぞれが相互に依存しあっているなかで、つながっているように見えなくなったり、切れてしまったりしているものを、もう一度つなぎ直すというのが、今とても大事なことだと思っています。漢字は、Sustainable Developmentということを意識して書きました。



しかし、岡本さんがご自身の名前の一字である「享」を出されましたが、やっぱり究極はこれでしょう。私の名前の一字でもある「民」です。現在は“民衆の時代”といわれていますが、民主主義といっても、選挙による間接民主制が、本当の民主主義といつの間にか言われるようになってしまったのですが、もっと一人ひとりが関わっていきけるようなあり方を参加型のなかでやっていかないと、だれも選んでいない総理が任命されて、サミットでいろいろなことが決められている。それは納得できないという気持ちがします。本当の「民」がいろいろなものごとを決めていく、考えていくことになれば、より良い社会が作れるのかな、と思います。



司会 ありがとうございました。

僕は「つなぐ」。中野さんの「re-connect」と、かぶってしまいました。ただしこれは、バラバラをつなぐ練習だ、という意味で書いたものです。練習はとても大事で、何度も何度もした方が良いと思います。

さて、次はどうしましょう。さきほど挙げた質問をもう一度出していただいて。どれをいきましようか。新谷さんに、難しい質問がありましたね。“Cause Related Marketing”。これは言葉の意味がよくわからないのですが、どういうことですか。そのことの解説をふくめてお願いします。

新谷：“Cause Related Marketing”とか“Cause Marketing”という言い方をしますが、例えば先ほどの講義で例に出した“1L for 10L プログラム”は、Volvicの社会貢献活動とビジネスをミックスさせた、一種のマーケティング商法なわけです。したがって、見る人が見ると、企業は積極的に社会貢献活動、良いことをしているのだなど見るし、一方では、あの企業はすごく売り方がうまいなという見方をしたりします。

ただ Cause Related Marketing は、その一方で非常に批判が多くて、批判的な論文が山のようにあります。

これは、なぜかという、例えば Cause Related Marketing として、何でも良いのですが、モノを売る。例えば、冷蔵庫売るときに、その冷蔵庫がいったいどうやって作られたかということは、マーケティングの商法のなかではいっさい言わないのです。

もしかすると、本当は、どこかの段階で児童労働がからんでいるかもしれない。強制労働がからんでいるかもしれない。しかし、マーケティングの中では、こういうことを一言も言いません。

一方で、「アフリカでたくさんの水が出ます」ということは、大いに主張するのです。結局、ある問題解

決のためになっているということを強調するばかりに、本当に重要な部分がまったく出てこないという問題点が多く指摘されています。ですから、僕が Cause Related Marketing で重要視しているのは、NGO や NPO との共同も非常に大事なのだけれども、いつ“Exit”するかということを実は重要視しています。つまり、いつ“やめる”か、ということですね。ずっと続けていると、批判をひたすら受ける可能性がありますし、長期的に続けているうちに、人々に飽きられるということもあります。

結局、長期的にやればやるほど失敗するという実証も、実はすでに出ています。いつ Exit していくかというのが、ビジネスの話だけでいうと出てきているので、この社会貢献の話においても、NPO、NGO に共同だけを求めるのであれば、そのバトンをいつ渡すかというところはポイントだと思います。

中野：今のお話は、どう推進するのかということに対して、むしろ、いつやめるかという話でしたが、それに関連して、プロフィットにつながる CSR、だいたいそれを CSR とすべきかどうかという問題について、福田先生からお願いします。

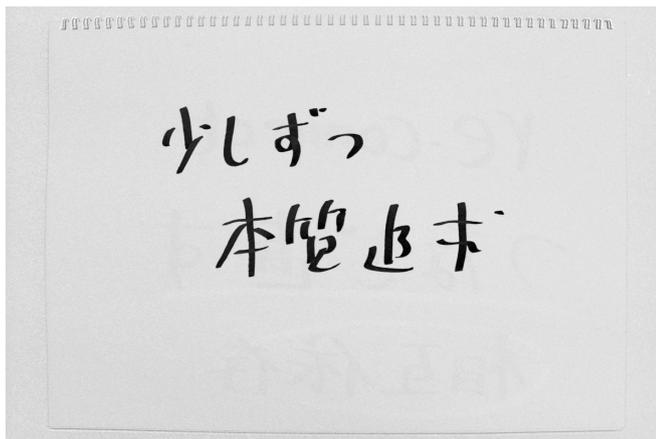
福田：責任というのは、得をしようが損をしようが、そことは関係なしにやらなければいけないことでしょう。損になるからできないという問題ではないですから。仮に、損になって会社がつぶれてしまったら、それはそれで大変ですけれども。

とにかく、「利益につながらないから…」という話はすごく多いです。ここには2つの問題があると思います。1つは、そういう発想自体が利益追求型だということ。もう1つは、そう言っている幹部自身が、ろくに会社の利益に対して、満足なりリーダーシップがとれていないということ。この2点があります。以上です。

司会 他に、どなたでも。この問いについて答えるという方。

中野：僕も広告会社で、CSR とプロフィットについては、少しは良いことを、なんとか内側からかたちにしたいと思っているわけです。やはり、いきなり正論を言ってもはなから実現の土俵に上がらないので。非常にきわどいところではあるのですが、Cause Related Marketing にしても、CSR にしても、まずは「陰徳を積む」だけではなくて、やはり言わなければ伝わり

ませんよ、という観点に立つ必要はあるかと思いません。コミュニケーションを推し進めながら、問題を次第に露見させていく作戦もあります。例えば「こういうことを隠していると逆に将来問題になりますね」、とか言いながら、少しずつ本質を追求していくという方法で。さきの中西さんの「続々ESD、続々ESD」ではないですが、やはり粘り強くやるしかないなと思っています。



ただ怖いのは、本質というのは、わりと忘れてたり、流れたり、ある意味では止まったりするので、本当に自分をきちんと保てたり、自制のきく感受性をもちづけてたりしながら、同時にそういうきわどいところについてはきちんと言及していくとう姿勢でいきたいと思っています。

岡本：今60歳なのですけれども、私が、IBMを2006年にやめて、生物多様性、生態系に特化したコンサルティング会社を設立しました。それで、最初の1~2年目に、いろいろな中小の広告会社に来て、一生懸命学んでいくわけでした。

それでこちらも、Greenwashにならないようにとか、知っていることを全部言うのですが、結局彼らがやっていることは商売なのですね。

それが今のCSRであり、私が思っていたCSRからずいぶんとかげ離れてしまっています。

私が思っていたCSRというのは、PRや宣伝活動ではありません。考えているのは、自然に戻すということです。東北大学の石田秀輝先生も、このような、自然から学ぶバイオミミクリーの発想が大事だということを言われています。

今、バイオミミクリーは製造業ではさかんに行われています。例えば、蟻塚というのは、中の温度が30.9度±1.4度くらいで、灼熱の砂漠地帯と一緒になのです

ね。その構造を利用してエアコンのいらぬ家をつくる。しかし、そこには基本的に窓がないから、甕や倉庫として使用するという発想でつくるなど、さまざまところで使われています。

かたつむりの殻は汚れにくく、水をかけただけで汚れが落ちるのですが、その構造を利用して、洗剤を使わず、磨いたり拭いたりなどの掃除をしなくても、いつもきれいな状態を保てるタイルなどもあります。

私が考えているのは、そういう自然の生態系から社会システムを考えようということです。それによって、いろいろな費用やコストを少なくして対応できる。そこに、プロフィットが生まれるという発想です。

あるいは、今、百貨店が苦戦していますよね。その対策案としてしていることが、どこでもしているような、インターネットでの売買や、通信販売です。それはいつそやめてしまって、モノを売らない百貨店を作ってみたらどうかと思います。

例えば、あなたの家に行って片づけをしますよ、とかね。それで、保険などもまとめて家計管理もお手伝いしますというようにして、いろいろなビジネスに伸ばしていく。つまり、従来とは180度違う発想で、モノを売る、増やさせるのではなく、切り捨てていく発想です。この発想に基づいたCSRは、バイオミミクリーなど、自然から学ぶことで実践が可能なのです。そういうところをもっともっと広めていてもらいたいのに、どうしても経済中心の社会であるために、本来の私の考えているCSRと違うものになると、こういうふうに思っています。

司会 はい、ありがとうございました。

それでは福田さん、短めにお願いします。

福田：日本の会社はろくなことをしていないという、全体のトーンがありますね。それについての考えを、要点だけ言います。

2008年、タイにCSR調査へ行き、複数の企業を見てまいりました。

例えば、そこではグンゼの社員さんが、わざわざ日曜日に、暑いなか学校に修繕に出かけていました。そういったことを目にする、利益どうのこうのという考えは、ふっとんでしまいます。

それからもう一つ驚いたのは、バンコクから南にあるパタヤのレデンプトリスト障害者職業訓練学校ではSEの育成などを行っているのですが、それに対してパナソニックなどの社員さんが、弁当持参で、日曜日などの休日に学校へ行き、教えています。その結果、学

校はタイで有数のシステムエンジニアの育成校になっていると。

こういった事例は日本よりも海外の方が多いのですが、やはり素晴らしいことで、たいへん感激しました。

そういうことを実際に見ているだけに、利益やCSRなどでゴタゴタ言う一部の人は、もう少し考えを改める必要があると思います。とにかく、自分たちで実際にそういうものを見て、それを伝える。日本人は「お上に影響されやすい」じゃないですか。けれども、真のCSRについて、ずっと教えていきたい、伝えていきたいというのが私の基本です。

司会 ありがとうございます。

次の質問「地球にとって人間が一番邪魔な存在ではないか？」について、中西さんお願いします。

中西：この問題については、僕は最初の授業で必ず話すのです。

今、人口が70億近くになっている。正確には追い切れないほどに増えているという話を聞いたのですが、国連によると、2050年までに世界の人口は92億人に達するとしています。そのため、人口増加のスピードを弱めるための取り組みは、重要な課題となるのですが、そのときにポイントの一つとして考えられているのが、いわゆる開発途上国での、女性の社会参画と教育の育成、つまり、女性へのエンパワーメントです。これには、女性が社会参画をして教育レベルが上がると、出産の時期が遅れ、高齢出産になることで少子化になるという見方もあります。まさに現在の日本の少子化が、そう判断されていることがあります。

つまり、こういった議論が起こること自体が、逆に言うと、「地球にとって人間が一番邪魔な存在である」ことの理由だ、と考えている人たちは結構います。

それから、研究者のあいだでもやはり、インドの人口がこれから増えていったら、酸素より人間の出すCO2の方が多くなってしまうと、まじめに考えている人たちが結構いますよね。

ただ、そういう意味でいうと、ESDは、人間の存在というものを見つめなおす学問であると言える。そこをスタートにして、こういう問題は大きく考えていった方がいいと思います。

実際問題として、そもそも人間は絶対に生き残れるのか、と思う面もあります。人間は破滅してしまう可能性も高いですから。今までの生命史のなかでは、繁栄した種が最後まで残るといったことはないのですから。

中野：人間中心かどうか、という問題についていくら考えてみても、結局それを考えるのは人間なのだから、人間中心ではないか。それはそうだと思います。

だけど、人間も自然の一部であり生き物である以上、人間が、意識があり、言語をもって生まれてきたのは意味と役割があると思うのですね。

屋久島で、ある夜中に星が本当にきれいで、寝転がってずっと見ていたときに、「人間がなぜ意識をもった生物としてこの世に生まれてきたか」と考えていました。これにはいろいろな説があるのですが、そのなかの一つに、「宇宙が自分を振り返ってほしかった」、「宇宙が自分を意識して欲しかった」という話があります。そのことを思い出して、「ああ本当、宇宙ってすごいな、きれいだな」と思っていると、宇宙が喜ぶんだね」って言ったら、流れ星がサッと流れました。「ウソー、本当にそうなの」って言ったら、もう一回、逆の方へサッと流れたのです。

僕は確認しましたよ。人間は愛でるために生まれてきたのですよ、お互いを、宇宙を。だから、人間にはやはり役割があると思っているので、自分がいなくなれば、と逃げたいいけないというふうに思っています。

司会 ありがとうございます。

最後の質問の答えまでいかなかったのですが、4つの質問については、それぞれの見解を示していただきました。では、講師のみなさんはどうぞ席の方へ戻ってください。どうもありがとうございました。

(拍手)

それでは、少しご案内とお願いです。

お願いは、お手元にあるアンケートへの記入をぜひよろしくお願いします。

それからご案内は、最初にもお話ししましたように、10月のセミナーへのお申込みをぜひご検討ください。セミナーというか、一緒に作業をしましょうということで皆さんにお声がけしたいと思います。

それからいくつかのご案内が他にあります。2008年に、「スウェーデンのサステナビリティを学ぶ旅」を僕や阿部さんで行ってきたのですが、7月24日の金曜日には、その報告会と次のツアーのご案内があります。翌々日の26日には、日本環境教育会の第20回大会が、東京農工大学で行われますが、そちらで企業に関する環境教育のセミナーがあります。

その他いくつか差し込んである資料がございますので、ぜひ皆さんご覧いただければと思います。

まだアンケートを書いている途中だと思うのですが、アンケートは受付のところにお出し下さい。

本日のシンポジウムはこれで閉じたいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。

(拍手)

シンポジウム

ESD×CSRを 理解する7つの質問

* ESDはEducation for Sustainable Developmentの略称で「持続可能な開発のための教育」の意です。

今年のテーマは“ESD×CSR”

CSR推進にESDはどのように貢献してゆけるのでしょうか？

「ESDとは何か？」「CSRとESDの関連性は？」

「Sustainable Development (持続可能な開発) のDとは？」

など、7つの質問に7人の講師がユニークな切り口で解答しながら、その命題へのアプローチを試みます。

【日時】 2009年7月12日(日) 13時30分～17時30分(開場13:00～)

【場所】 立教大学池袋キャンパス14号館2階D201教室



内容

昨年10月に開催した連続セミナー「CSR! 次のステップへー持続可能な創出の社会のためにー」では、参加型の場を大切にしながら、生物多様性や法律、街づくりなどを通してCSRを学びました。

主催：立教大学ESD研究センター

協力：NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

セミナー講師		阿部 治	川嶋 直	岡本享二
福田秀人	中西紹一	◆立教大学 ESD研究センター センター長 ◆立教大学ESD研究センター 教授 ◆NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J) 代表理事	◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム主幹 ◆立教大学ESD研究センター 教授 ◆(株)キープ協会 常務理事	◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員 ◆立教大学ESD研究センター 教授 ◆(株)三井物産戦略研究所 代表取締役
◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム 研究員 元、21世紀社会デザイン研究科 教授 ◆放送大学大学院 政策経営プログラム 客員教授 ◆福田経営コンサルティング 代表	◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員 ◆(株)プラス・サーキュレーションジャパン 代表取締役	◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員 ◆(株)博報堂コーポレートコミュニケーション局 ◆ワークショップ企画プロデューサー	◆立教大学 ESD研究センター CSRチーム研究員 ◆(株)三井物産戦略研究所 研究員	

また、シンポジウムの後半には、会場のおさまりと議論を深めるためのワークショップも予定しております。CSRの現場で活躍している方々に奮ってご参加いただき、ご一献により豊かな“ESD×CSR”のあり方を探究し展開していきたいと思います。
*本シンポジウムの続編として、10月4日(日)13:30～17:30と10月18日(日)13:30～17:30に、定員30名程度の連続セミナーを開催します。2回の連続セミナーは、人材育成プログラムの開発を目的に開催するもので、人数を制限しさらに深い学びの機会を作ります。なお、セミナー参加者は本シンポジウムにご参加いただいた方々を想定しております。各セミナーへの参加申込については追ってお知らせいたします。

□お申し込み方法(定員：先着250名)

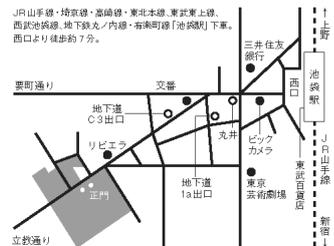
下記のお問い合わせ先、立教大学ESD研究センター(ESDRC)まで、「7月12日CSRセミナー」という件名で「1.氏名、2.ご所属、3.ご連絡先(メールアドレスかお電話番号)4.参加希望の動機」を、メールかFAXでお知らせください。また、HPに設置されたお申し込みフォームからお申し込みいただけます。

□お問合せ先

立教大学ESD研究センター(ESDRC)
ADDRESS：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL & FAX：03-3985-2686 MAIL：esdrc@grp.rikkyo.ne.jp
URL：http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD



立教大学



シンポジウム

ESD×CSR を理解する 7つの質問

日時 2009年7月12日(日) 13時30分～17時30分 (開場 13:00)
場所 立教大学池袋キャンパス 14号館 2階 D201 教室
主催 立教大学 ESD 研究センター CSR チーム
協力 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

【本日のプログラム】

- 13:30 開会の挨拶 (川嶋直)
- 13:35 センター長挨拶 (阿部治)
- 13:40 オリエンテーション (川嶋直)
- 13:55 講義①ESDとは何ですか? - 生まれた経緯やこれからのことも含めて (阿部治)
講義②CSRとは何ですか? - 3講師からの解答 (岡本享二・福田秀人・新谷大輔)
- 14:55 休憩
- 15:10 講義③CSRのR(責任)ってどう捉えれば良いのでしょうか? (福田秀人)
講義④CSRのS(社会的)ってどう捉えれば良いのでしょうか? (岡本享二)
講義⑤ESDのE(教育)の特徴とはどんなものでしょうか? (川嶋直・中西紹一)
講義⑥ESDのD(開発)の意味を教えてください (中野民夫)
- 16:00 講義⑦パネルディスカッション-ESDとCSRの関係は? (パネリスト:講師全員)
- 16:30 ワークショップ (ファシリテーター:中野民夫)
- 16:50 質疑応答
- 17:15 閉会の挨拶 (川嶋直)
- 17:30 シンポジウム終了

【ご参加の皆様へのお願い】

アンケート用紙の記入をお願いします。…今後の企画運営の参考にさせていただきますので、ぜひご協力をお願いします。なお、ご回答いただきました用紙はデータ集計の後、ESD 研究センターで責任を持って破棄させていただきます。

【*重要*10/4（日）・10/18（日）CSR セミナーの開催について】

ESD 研究センター（CSR チーム）では、今回のセミナーを発展させ、「CSR における ESD 指針（案）」「ESD×CSR 人材育成プログラム」を開発するためのセミナー（全2回）を、次の日程で開催する予定です。セミナーの参加者は約30名を定員とし、本シンポジウムにご参加いただきました皆様に優先させていただきたいと思っております。

- ・日時 2009年10月4日・18日(日) 13時30分～17時30分（開場13:00）
- ・場所 立教大学池袋キャンパス14号館2階D201教室
- ・主催 立教大学 ESD 研究センター
- ・協力 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)
- ・講師 立教大学 ESD 研究センター CSR チーム研究員

セミナーに参加をご希望の方は、立教大学 ESD 研究センターまで、「10月 CSR セミナー」という件名で「1. 氏名、2. ご所属、3. ご連絡先（メールアドレスかお電話番号）、4. 参加希望の動機」を、メール（esdrc@grp.rikkyo.ne.jp）あるいはFAX（03-3985-2686）で、お知らせください。また、8月よりHPに設置するお申込フォームからも参加申込みが可能です。尚、お申し込みいただきました方々には仮登録メールを送信させていただき、人数を調整した後（9月中頃）に本登録メールをお送りいたします。

***本日は、ご参集いただき、誠にありがとうございました。**



Education for Sustainable Development Research Center
Rikkyo University

ESDとは何か

阿部 治

1

現代の諸課題

国際的課題

環境・開発、資源・エネルギー、人口・食料、
貧困、人権・ジェンダー、平和、民主主義、他

2

国内的課題

- 少子・高齢化、過疎化、経済格差の拡大、
- 低い食料自給率、高い自殺率、
- 孤立化・関係性の希薄化、自然体験の減少、
他

3

このままでは
「わたし」も「あなた」も、「社会」も
持続不可能

持続可能な社会への転換が不可欠

持続可能な開発
持続可能性

4

持続可能な開発

持続可能な開発とは、将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズをも満足させるような開発。

(WCED “Our Common Future “1987)

5

「持続可能な開発」(SD)概念

『世界保全戦略』(1980)

『われら共有の未来』(1987)

『かけがえのない地球を大切に』(1990)

SDの3類型

①自然条件を重視

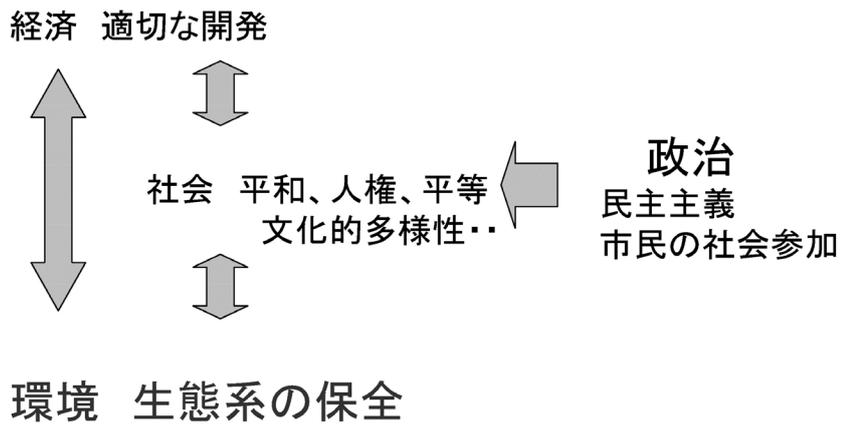
②世代間の公平性

③より高次の観点(社会的正義や生活質)

(森田・川島(1993))

6

持続可能な開発の4つの視点



(阿部、2009)

7

持続可能な開発と日本の責任

「持続可能な開発」を提起したブルントラント委員会は日本提案(1982)

国内外における日本の主導が求められている

8

日本の環境政策の最大の課題

持続可能な社会のビジョンがない
バックキャストिंगが必要

9

持続可能な社会のための方策

技術開発
法制度の整備
意識改革
↑
教育

10

持続可能な社会づくりには
意識改革が最重要＝環境教育 /ESD

「人と人」、「人と社会」、「人と自然」とのつながり(関係性)

「つながり(関係性)学習」

持続不能な「つながり」から持続可能な「つながり」へ

2つのソウゾウリョク(想像力、創造力)の育成

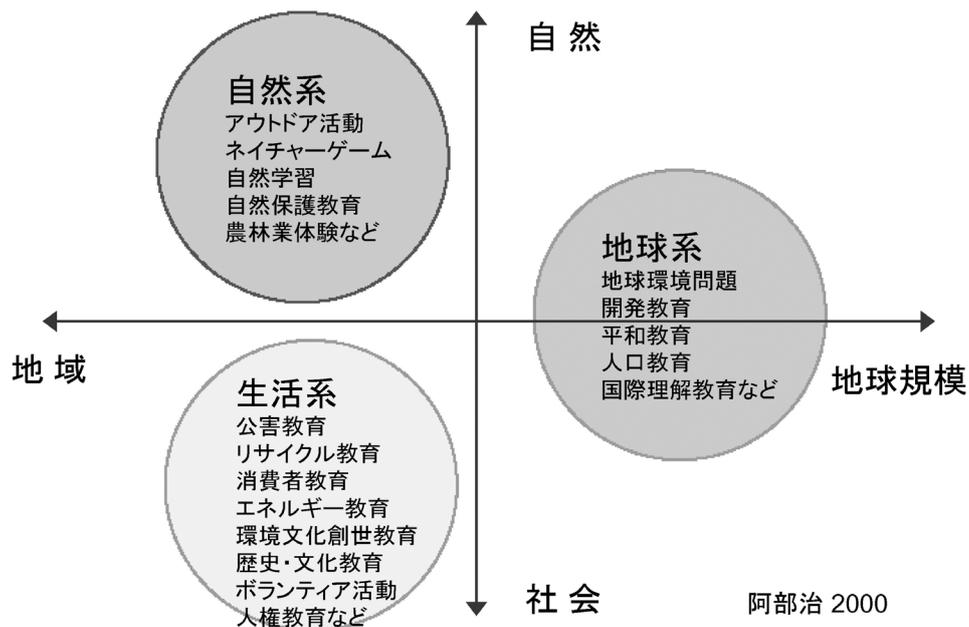
人間力の醸成

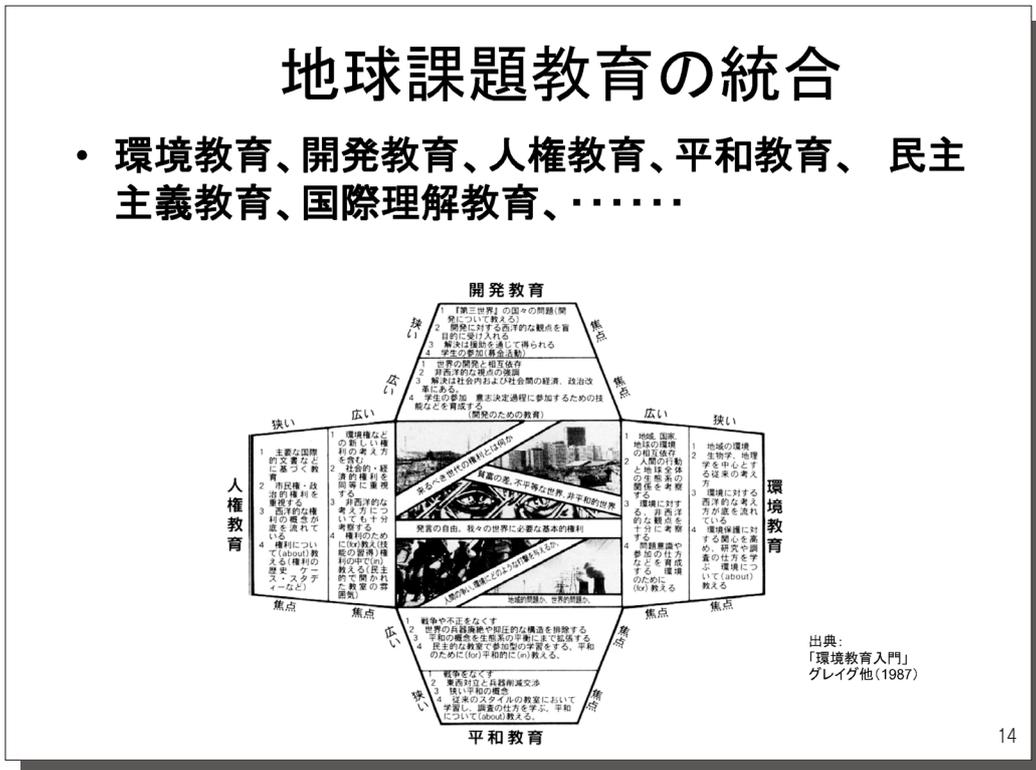
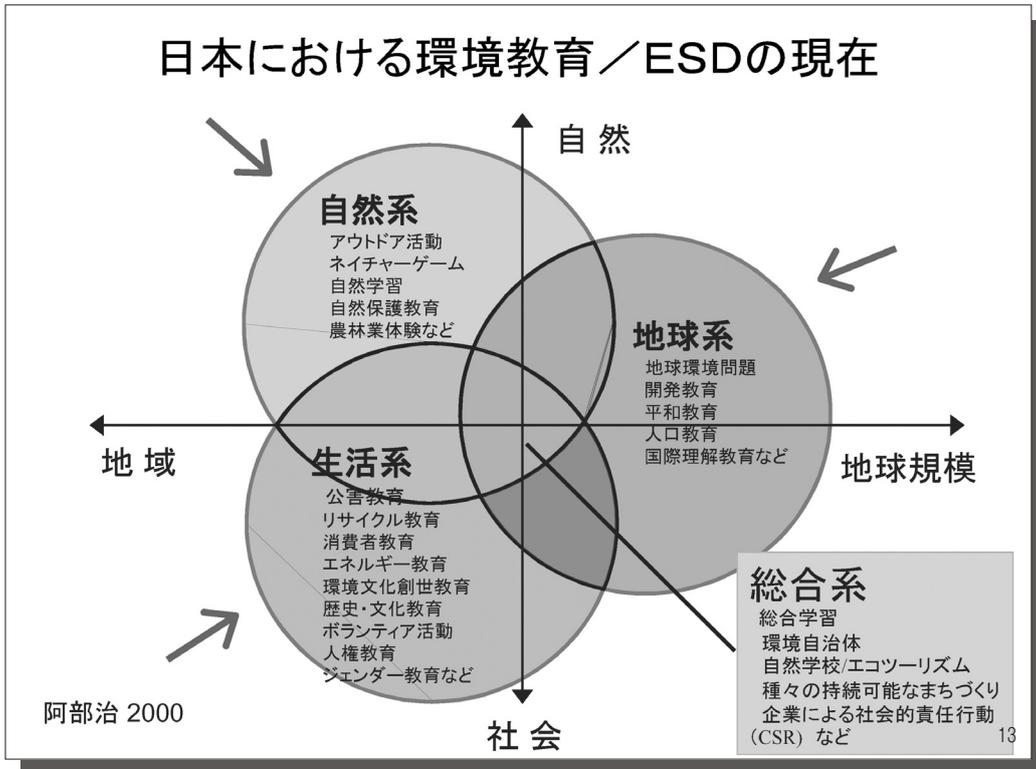
つながり(関係性)の意識化が環境教育/ESD

(阿部、2000)

11

日本における環境教育／ESDの範囲(過去)





狭義の環境教育から
広義の環境教育へ

持続可能な開発(社会)のための教育
の登場

15

持続可能な開発のための教育

- 環境・人口・開発教育
- 持続可能な社会のための教育
- 持続可能性のための教育
- 持続可能な未来のための教育

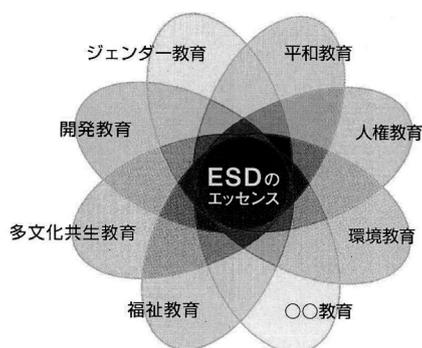
16

ESDとは

- 持続可能な開発の原則、価値観、実践を教育と学習のあらゆる側面に組み込む。
- 「教育」と「持続可能な開発」の二つに由来。
(国際実施計画、2005)
- 私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がESD
(国内実施計画、2006)
- 人々が持続可能な社会の構築に主体的に参画することを促すエンパワーメント (阿部)

17

ESDのエッセンス



(ESD-J,2003)

「価値観」

・人間の尊厳はかけがえがない。・私たちに社会的／経済的に公正な社会をつくる責任がある。・現世代は将来世代に対する責任をもっている。・人は自然の一部である。・文化的な多様性を尊重する。

「能力」

・自分で感じ、考える力。・問題の本質を見抜く力／批判する思考力。・気持や考えを表現する力。・多様な価値観を認め、尊重する力。・他者と協力して物事を進める力。・具体的な解決方法を生み出す力。・自分が望む社会を思い描く力。・地域や国、地球の環境容量を理解する力。・自ら実践する力。

「学びの方法」

・参加体験型の手法が生かされている。・現実的課題に実践的に取り組んでいる。・継続的な学びのプロセスがある。・多様な立場・世代の人々と学べる。・学習者の主体性を尊重する。・人や地域の可能性を最大限に活かしている。・関わる人が互いに学び合える。・ただ一つの正解をあらかじめ用意しない。

18

持続可能な開発のための教育

- 1974年 ユネスコ国際教育会議
- 1980年代 地球環境問題の顕在化⇒地球的課題教育の連携
- 1990年 万人のための教育宣言
- 1992年 地球サミット(アジェンダ21)
- 1994年 ユネスコ国際教育宣言
- 1997年 テサロニキ会議(テサロニキ宣言)
- 1998年 国連CSD6で環境教育討議
- 2000年 国連ミレニアム宣言/国連ミレニアム開発目標/ダカール行動枠組み
- 2002年 ヨハネスサミット「教育の10年」提案
- 2002年 国連総会「教育の10年」決議
- 2003年 環境教育推進法/ESD-J設立
- 2005年 国連「教育の10年」開始(～2014年)
- 2005年 ユネスコ国際実施計画策定/関係省庁連絡会議設置
- 2006年 日本政府「国内実施計画」策定
- 2007年 ESD推進議連設立/21世紀環境立国戦略/教育基本法改正
- 2008年 ESD円卓会議設置/新学習指導要領/教育振興基本計画
- 2009年 「教育の10年」中間会議(ドイツ)
- 2014年 同 最終会合(日本)

19

国内のESD事例

- 新たな活動: 国連大学RCE、環境省ESDモデル事業、文科省教育GP、ユネスコスクールなど
- 従来からの活動: 持続可能な地域づくりにつながる環境教育(霞ヶ浦アサザプロジェクト、豊岡コウノトリの里、水俣市、西宮市、他)

20

ESDの展開事例(1) 水俣市

- 水俣病による地域の崩壊
 - 環境・健康・福祉のまちづくり(もやい直し)
 - 地元学による地域の見直し
 - 環境マイスター制度
 - 水俣版環境ISO
 - 教育旅行の誘致
- ⇒学びをベースにした環境・社会・経済の統合
環境首都水俣の確立

21

ESDの展開事例(2)

アサザプロジェクト/豊岡のコウノトリの復活

- 環境保全と地域経済の活性化
- 地域内の関係性の再構築
- 伝統文化の再評価
- ローカルとグローバルの統合
- 学校や地域における学びをベースとした持続可能な地域づくり
- 子どもや大人の社会参加の促進

⇒学びをベースにした環境・社会・経済の統合

22

日本のESDの特徴

- DESD以前からESDに位置づけられる活動が展開されている。(総合的学習の時間、地域づくり、など)
- DESDを契機にESDの名の下に持続可能性にかかわる多様なセクター、場が統合した連携がなされている。(ESD-J、政府円卓会議、など)
- DESDを契機に高等教育機関の改革が始まっている。
- 実践面に比べて研究面がまだ活性化されていない。(ESDの評価、など)

23

最終会合に向けて

- 最終会合のイメージの共有(政府会議+民間会議)
- 国内の取り組みの更なる実施と評価
- 日本からの海外発信の強化
- 円卓会議の強化
- UNESCOをはじめとする国際機関などとの連携強化
- アジアにおける日本のイニシアティブの発揮
- オールジャパンによる受け入れ体制づくり
- ロードマップの作成

24



ESD・CSRを理解する7つの質問

☆参考チャート集☆

- ・CSRとは何ですか？
- ・CSRのSocialとは？
- ・みなさまとのQ&A

2009年7月12日

岡本享二(おかもときょうじ)
立教大学ESD研究センターCSRチーム
ブレーメン・コンサルティング株式会社

Bremen Consulting Co.,Ltd

1



イギリスの最新事例 (1/3)

- ・ 訪問先
 - フォーラム・フォー・ザ・フューチャー (FfF)
 - アカウンタビリティ (AccountAbility)
 - ボーダフォン・グループ本社 (Vodafone)
 - ピープル・ツリー (People Tree)
 - サステナビリティ社 (SustainAbility Ltd)
 - アイリス (EIRiS)
 - University of Plymouth
 - Eden Project
 - Schmacher College

Bremen Consulting Co.,Ltd

2



CSR What's New in UK? (2/3)

- 「俯瞰的なCSR」と「統合的なCSR」の重要性
- CSRはSRかCRかの議論について
 - Corporate Social Responsibility ・元々の語源
 - Social Responsibility ・日本的表現
 - Corporate Responsibility ・現在の表現
 - Sustainable Development ・将来的には
- CSRのCは、もともと英語では株式会社の他に、法人、自治体、団体、組合の意味が含まれている

Bremen Consulting Co.,Ltd

3



CSR What's New in UK ? (3/3)

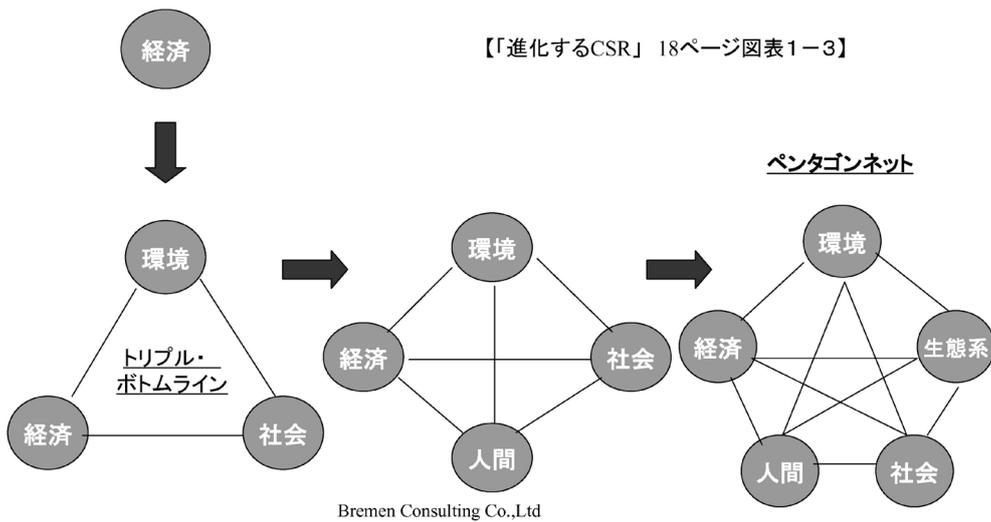
- 「CSRは国民みんなでの発想では
⇒だれの責任でもなくなる⇒だから企業に！
- トリプルボトムラインの提唱者(ジョン・エルキントン氏)はもはやトリプルボトムラインを口にしない
 - 初期(1980年代)にはCSRの概念として重宝した
 - CSRは時代と、ともに大きく変化している
 - 岡本は2004年にペンタゴンネットを提唱(次頁参照)
- シューマツハカレッジの印象的な授業
 - Development: What's Next?
 - 開発とは「開発に名を借りた破壊」である
 - DevelopmentとEnvelopment

Bremen Consulting Co.,Ltd

4



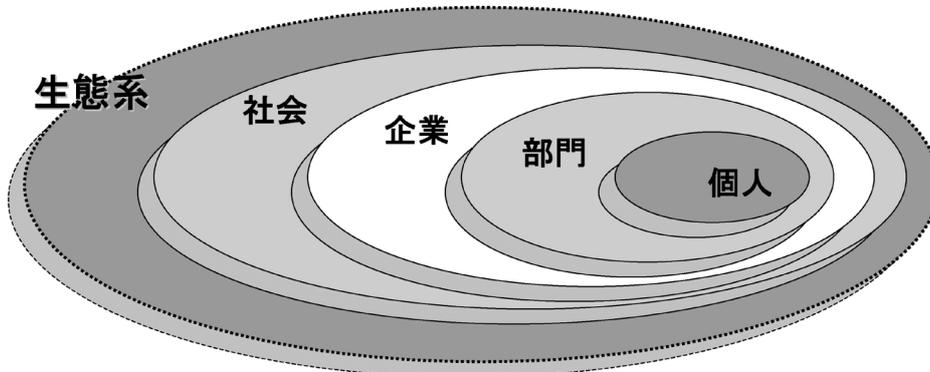
CSRの考えは時代とともに変化



5



「生態系」という視点



【「進化するCSR」 74ページ 図表4-3】

Bremen Consulting Co.,Ltd

6



CSRの俯瞰

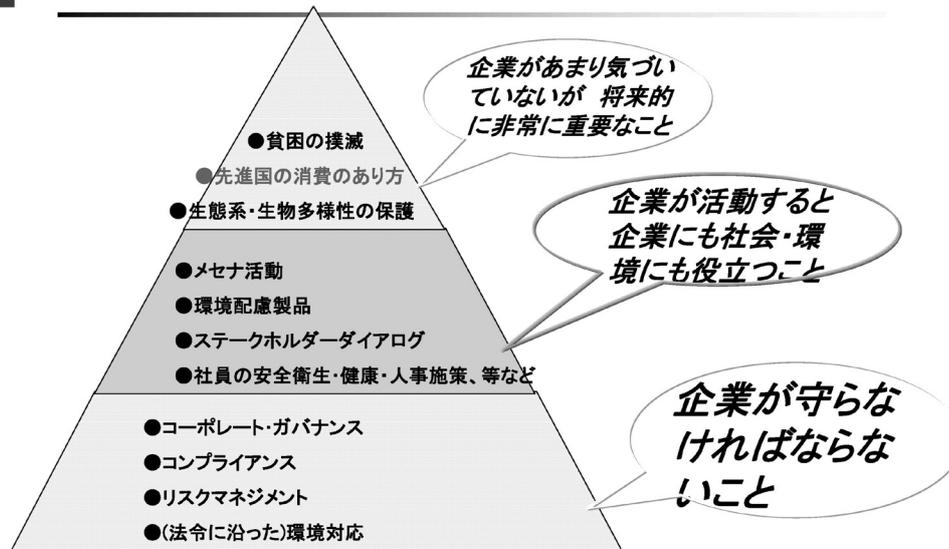
- CSRの基礎と俯瞰
 - CSR(企業の社会的責任)とは何か
 - 今、なぜCSRが求められるか
 - 欧米におけるCSRの背景
- グローバル化と情報化
 - Development: What Next?
- 経済学の限界と生態経済学
 - Sustainable Development(持続可能な発展)とは
- 生態系・生物多様性からCSRを考える
 - Biomimicry
 - 生態系に則った金融システムの構築

Bremen Consulting Co.,Ltd

7



CSRを俯瞰する



Bremen Consulting Co.,Ltd

【「進化するCSR」図表7-1】

8



CSRに生かす3つの提言

- バイオミミクリーをCSRに活用
 - 部分最適から全体最適に
 - 製造業に活かされているバイオミミクリーの発想を社会システムや金融システムにも！
- 国を挙げてマネジメント・システムの発想を持つ
- 生態系⇔社会⇔企業⇔部門⇔個人
 - 従来の右から左の発想を左から右へ(図参照)

Bremen Consulting Co.,Ltd

9



経済寄り、それとも生態系寄り？

- グループ:
A.....→B.....→C.....→D.....→E
- 経済的基盤中心 生態経済学を考慮
- 貨幣価値で全て判断 生態系(自然)に則った判断
- 従来の思考(戦後60年) 新しい思考(古来からの思考)
- 経済一神教(石頭) 学際的(柔軟な発想)

Bremen Consulting Co.,Ltd

10



さまざまなCSRのとらえ方

- ・ 法律や規制からとらえるCSR
- ・ 社会の要請(他人任せ)としてのCSR
- ・ 経済的メリットとしてのCSR
 - 宣伝・広告
 - コストvs見返り(利益)
- ・ グローバルな視点でのCSR
- ・ 行き過ぎた経済活動に疑問を持つCSR
- ・ 地球規模(生態系)に則ったCSR

Bremen Consulting Co.,Ltd

11



CSRのSocial《社会的》とは？

- ・ 小学生の主要4科目
 - 国語、算数、理科、社会
- ・ 社会(Social)の意味
 - 人間と人間のあらゆる関係

社会の範囲は非常に幅広く、単一の組織や結社などの部分社会から国民を包括する全体社会までさまざまである。社会の複雑で多様な行為や構造を研究する社会科学では人口、政治、経済、軍事、文化、技術、思想などの観点から社会を観察する。

 - 教科書としての社会
 - 生物学としての社会
- ・ 地球規模(生態系)に則ったCSRのS！

Bremen Consulting Co.,Ltd

12



米国CSR調査研究(09年6月)Key Ward

- ・ Social Justice
- ・ Share the Road
- ・ この湖は泳げます
- ・ (公共の場は)全面禁煙
- ・ I AM THAT
- ・ 8～10階層もあるサプライチェーン
- ・ BiomimicryとFinancial System
- ・ NPO⇔Corporation⇔University ⇔Government
 - Activities -Business -Paper -Policies

Bremen Consulting Co.,Ltd

13



参考文献

- ・ 参考文献:
 - 「CSR入門」(日経文庫) 2004年12月発刊 岡本享二著
 - ・ CSRに生物多様性を取り入れた最初の書物
 - ・ CSRのベストセラーで現在第9刷り
 - ・ 公認会計士協会の学術賞を受賞《2006年》
 - 「進化するCSR」*(JIPMS) 2008年 7月発刊 岡本享二著
 - ・ * 大型書店、アマゾン、または直接JIPMソリューションよりご購入ください

Bremen Consulting Co.,Ltd

14

09年7月12日
立教大学ESD研究センター

ESD×CSRを理解する7つの質問

CSRの推進は、重要かつ至難の課題

福田 秀人

1

我々は、今、どこにいるか Where We Are Now ?



いかに到達するか How To Get There ?
特に、主な課題は Key Tasks . . . ?

我々は、かくありたい We Want To Be

ところで、我々とは誰か？

誰が味方で、誰が敵で、何が障害か？

2

まずは、戦いと戦略とはなにかを正しく知ることが大事

戦い：自らの意思を実現する障害を克服する活動。

戦略：実現したい意思を目的として明確にし、
その実現を妨げる障害となる問題を克服するための
課題と対策をまとめたもの。

意思（目的） + 障害（問題） → 戦い → 戦略（戦いの策略）

戦略＝戦力の強化策 + 戦力の運用策

↓

連合＝共存共栄の理念＋リスクの分担＋機密情報の共有

強者連合の追求、弱者連合の回避が、決定的に重要！

3

戦略の評価要素と手順

①適合性（シュータビリティ）

範囲と構想が、任務に適合し、仮定は妥当か。

↓

②実行可能性（フィジビリティ）

使用可能な資源を使用して任務を達成できるか。

↓

③受容可能性（アクセプタビリティ）

予想される人的・物的・時間的コストが成果に見合ったものか。
また、資金的、法的、政治的に受容可能か。

4

リーダーに必要な資質

知識、判断力、経験、教育、知能、大胆さ、感受性

↓

- ①現実的な行動方針を見つけ、非現実的な行動を捨てることができる。
- ②計算されたリスクと、破滅につながるギャンブルを識別できる。
- ③任務を追及する不屈の決意と、
実りのない行動を追求する頑迷さを識別できる。
- ④困難と挫折を識別できる。

経験不足→非現実的で、運まかせで、頑迷で、無茶な行動をとる

リーダーは、どこにいる？ どうして選ぶ(or 連れてくる)？

5

トレードオフを直視し、何を、誰を、どこまで犠牲にするのかを明確にする。

(ただし、誠実な経営者には、胃に穴が空き、不眠症になる決断が必要)

大口株主に
GOOD

環境に……BAD ← **GOOD** →

BAD

消費者に
GOOD

BAD ← **GOOD** →

BAD

大口株主に
GOOD

雇用に……BAD ← **GOOD** →

BAD

環境に
GOOD

BAD ← **GOOD** →

BAD

株主をステークホルダーに含めたCSR推進論は、
アングロサクソン親派の株屋と、コバンザメ商法の評価ビジネス屋がプロデュース？

6

アマチュアイズムの脅威

プロとアマチュアの決定的な違い＝難しさや危険を知っているか否か。

↓

- ①理想論を規範論にする。
- ②当事者の能力や努力を知らず、無能・無責任・怠惰・・・と批判。
- ③難しいこと、危険なことを簡単に考え、「やれ」と言う＝「素人の暴論」。
- ④あらゆる事故、問題の原因を「意識」、「体質」、「制度」の3つに求める。
- ⑤現在の制度のデメリットのみをあげつらう。
- ⑥新たな制度をメリットのみをアピールして提唱する。
- ⑦新たな制度のデメリット、副作用を考えない(知らない?)。
- ⑧新たな制度が諸問題を一気に解決すると考え、改革や革命を連呼。
- ⑨できない理由を、改革する創造力や意欲の不足に求める。
- ⑩多くの課題にはトレードオフがあることを考慮せず、総花的に課題を列挙。

無責任or愚かな論者・リーダーの特徴

- ①権限による強制に伴う責任の発生を忌避し、自己啓発・集団合議を説く。
- ②目的達成のための手段を検討せず、特定の手段にこだわり、手段の目的化の愚を犯す。
- ③計画と評価にこだわり、PDCAサイクルで人々(or部下)を動かそうとする。

7

CSR × ESD

新谷 大輔

(株)三井物産戦略研究所 研究員
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 兼任講師
立教大学ESD研究センター CSR研究チーム研究員
(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)理事

2009年7月12日

1
Daisuke Shintani 2009

CSR推進において
最も難しいことは何
でしょうか？

2
Daisuke Shintani 2009

1. 体制作り
2. トップの理解
- ③ 社内浸透

3
Daisuke Shintani 2009

トップだけが理解していても、CSR関連部署だけが理解していても、CSRの推進は難しい。

4
Daisuke Shintani 2009

CSRは社員全員が自社のCSRについて、正しく理解していることが理想の姿。

5
Daisuke Shintani 2009

しかし、現状は…

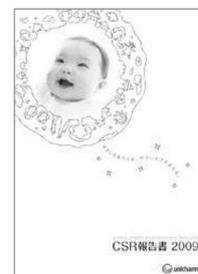
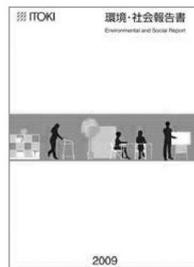
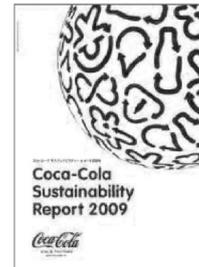
CSR ≒ PR ?

6
Daisuke Shintani 2009

CSRとPR

CSRレポート

本来、PRのためのものではない。「レポーティング」「アカウンタビリティ」が目的。

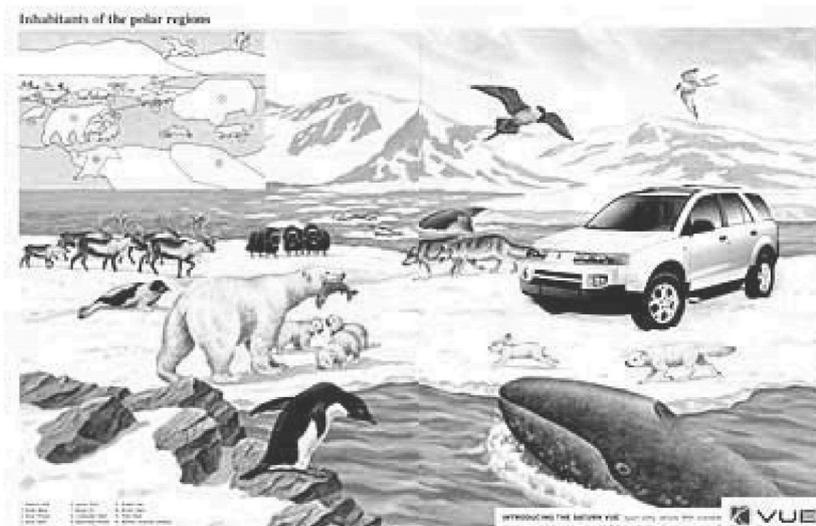


Daisuke Shintani 2009

7

CSRとPR

Green Wash



Daisuke Shintani 2009

8

10 Signs of Green Wash

1. 柔らかい印象の言葉

明瞭な意味を持たない言葉や用語
例) エコ・フレンドリー。



4. 的外れの主張

全体的には環境活動を進めていないのに、ごく小規模な環境活動のみを強調する。



2. 「グリーン商品 対 悪い印象の企業」の図

例) 河川汚染をもたらす工場で生産される持続性の高い電球。



3. 暗示的な図

証明されていないにもかかわらず環境に良いインパクトを暗示するようなイメージ図。
例) 煙突から煙の代わりに花が排



5. ドングリの背比べ

環境活動が大幅に遅れている産業のなかで同業者と比較し、「同産業で最高レベル」と主張すること。
また、その他企業よりも若干環境活動が進んでいることをアピールすること。



(Ferrea Sustainable Communications) Daisuke Shintani 2009⁹

10 Signs of Green Wash

6. 明らかに論理性に欠ける場合

身体に良くない商品をグリーン化したところで、安全にはならない。
例) エコ・フレンドリーなタバコ。



9. 証拠ゼロ

もちろん正しいかもしれないが、証拠はどこにあるのか。



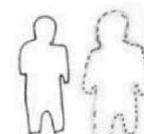
7. 分かりにくい表現

科学者だけが確認でき、理解できるようなわけのわからない言葉や情報。



8. 空想の友達

例えば、「ラベル」はあなたも第三者からの承認を得られたように見えるが、企業が独自に作ったものである場合もある。



10. あからさまなウソ

完全に偽造された主張やデータ。



(<http://blog.goo.ne.jp/worldsendssupernova/e/bebb1abf621c410595cadd87e2005f62>) Daisuke Shintani 2009¹⁰

CSRとPR

Green Wash コマーシャル

Honda Green Commercial

Malaysian Palm Oil Council

11
Daisuke Shintani 2009

CSRとPR

「原子力発電はクリーンな電気のつくり方」 (電気事業連合会(電事連)広告/08年4月)

日本広告審査機構(JARO)に「事故時の放射能汚染の危険性があり、クリーンとは言えない」と申し立て。

「原子力発電にクリーンという表現を使うことはなじまない」(JARO)

「安全性について十分な説明なしに、発電時に二酸化炭素を出さないことだけをとらえて『クリーン』と表現すべきではない」

12
Daisuke Shintani 2009

CSRとPR

Cause (Related) Marketing



Consumer Philanthropy

13
Daisuke Shintani 2009

CSRとPR

発がん性化学物質

パラオキシ安息香酸エステル(防腐剤)

りん酸エステル(固体潤滑剤)



Avon



Estée Lauder



Revlon

14
Daisuke Shintani 2009



CSR-HR=PR

- ✓ CSRレポート≠自社の社会性の高さ、環境配慮型商品をPRするツール
- ✓ CSR広告≠「宣伝」

CSR推進においては、トップマネジメントは極めて重要だが、同時に自社にとってのCSRを本質的に理解した社員を育成することが欠かせない。

17
Daisuke Shintani 2009

環境研修 / CSR研修

- ~~✓ e-learningで環境を学ぶ。~~
- ~~✓ エコ検定、CSR検定のための受検勉強をする。~~

知識としてだけの環境、CSRは無意味。

18
Daisuke Shintani 2009

CSRと人材育成

価値創造型CSRを実現するために — 社会変革に向けた行動指針 —

- (1) 経営トップのリーダーシップとコミットメントが必須である
- (2) 社会からの期待と要請、社会的課題を直視する
- (3) 社会性を備えた人材を育成する**
- (4) PDCAによるCSRマネジメントシステムを確立する
- (5) 一企業を超えた連携を図る
- (6) ステークホルダーとの多面的な対話を活かす

『価値創造型CSRによる社会変革 ～社会からの信頼と社会的課題に応えるCSRへ～』(社)経済同友会、08年5月

19

Daisuke Shintani 2009

三井物産～原点から未来へ良い仕事

1. 「原点を見つめ直す活動」 DNAや理念といった三井物産 の重要な価値観を再確認

- ・「三井物産のこころ」
(冊子)
- ・「変わらざるもの
～三井物産の志～」(DVD)



【社長内訓(明治28年6月16日)】

眼前の利に迷い、永遠の利を忘れるごときことなく、遠大な希望を抱かれること望む。

Daisuke Shintani 2009

三井物産～原点から未来へ良い仕事

2. 「良い仕事とは何かを見つめ直す活動」

「良い仕事ワークショップ」の全社展開

- 開催回数 約400回
- 参加総人数 約6,000人
- 事務局より延べ250名のファシリテーターを派遣
(CSR推進部、経営企画部)



- ・こうした意識啓発活動は、単年度の行事として終わらせることなく、継続的に取り組むことが重要との認識。
- ・本年度は、「CSR・良い仕事 意識啓発活動」として“仕事のプロセスや利益の質を見直しながら「良い仕事」を追求する”をテーマに各部署で活動内容を定め展開。

21

Daisuke Shintani 2009

三井物産～原点から未来へ良い仕事

3. 「本業を越えて、社員一人一人が社会との繋がりを再確認する活動」



社員と社会との関わりを見つめ直す



22

Daisuke Shintani 2009

2007年度の取り組み

意識啓発活動

- 仕事のプロセスや利益の質を見直す、本業に焦点をあてた意識啓発活動を重点的に推進。
- 各ユニットが夫々の現状や重要な課題を踏まえて対象者や活動内容を取捨選択、「良い仕事」の具体的創出に繋げていく活動を展開。(初年度は全社一律)
- トップの積極的な発信と、「意識啓発活動」が一体となり、「良い仕事」の創出に向けた意識浸透は継続的軌道に乗った。
(例:新規事業の構築や既存事業の見直しに際し、「これは良い仕事なのか」といった会話が現場で自然と交わされる様になった)

23
Daisuke Shintani 2009

ありがとうございました。

新谷大輔

E-mail: D.Shintani@mitsui.com
HP: <http://das.seesaa.net/>



《出版のお知らせ》

藤井敏彦、新谷大輔(共著)『アジアのCSRと日本のCSR～持続可能な成長のために何をすべきか』
(日科技連出版社/
2008年10月)

(株)三井物産戦略研究所 <http://mitsui.mgssi.com/>
立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 <http://www.rikkyo.ac.jp/~z3000142/sd/>
立教大学ESD研究センターCSRチーム
<http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/project/index5.html>
NPO法人 社会的責任投資フォーラム(SIF-Japan)
<http://www.sifjapan.org/>
すぎなみ社会デザイン塾
<http://www.kyouiku.city.suginami.tokyo.jp/learn/center/otonajuku.html>

24
Daisuke Shintani 2009

講義⑤ ESDのE(教育)の特徴とは
どんなものでしょうか？

川嶋 直

今日の私のお話

- ①教育 とは・・・
伝えること とは・・・
- ②参加体験型の学びの構造
- ③「知る」から「行動する」への道筋

伝えるということ

中国・英国
の古い
ことわざ

聞いた事は 忘れる	見た事は 思い出す	体験 したことは 理解する	発見 したことは 身につく
--------------	--------------	---------------------	---------------------

これを逆に言ったら

言った ことは 忘れられる	見せた事は 思い出して もらえる	体験させた事 は少し分かっ てもらえる	発見しても らったこと が身につく
---------------------	------------------------	---------------------------	-------------------------

体験と発見 が大切	言ったか どうか？ ではなく	伝わったか どうか？ が大事
--------------	----------------------	----------------------

3

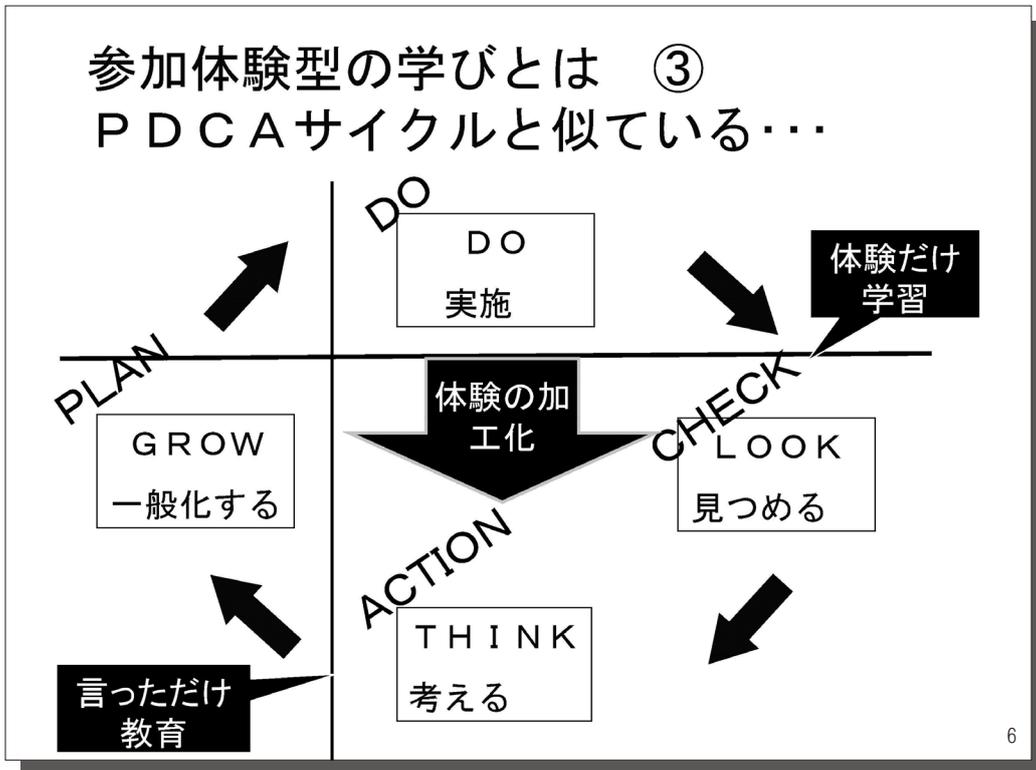
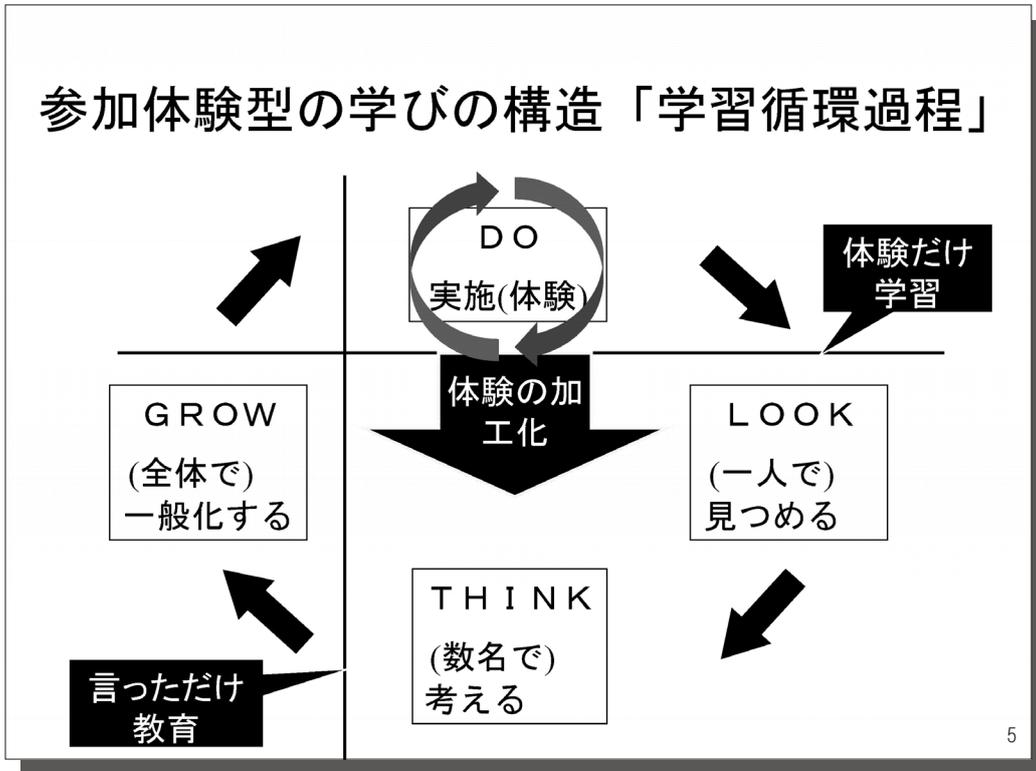
教育（educate）とは

教育（education）の語源は（educate）

教え込む こと ×	逆？	引き出す こと ○	主体的な 個人を育て る環境教 育(ESD) だからこそ
-----------------	----	-----------------	--

何を引き 出す？	学習者 の	能力 力を 個性 をを やる気 をを 元気 をを	引き出す 教育が 大事
-------------	----------	-----------------------------------	-------------------

4



伝わるコミュニケーションのための 3つの要素

コミュニケーションの**内容**が良いか

コミュニケーションの**方法**が良いか

コミュニケーションの**関係**が良いか

7

明日のために、いま始めよう。

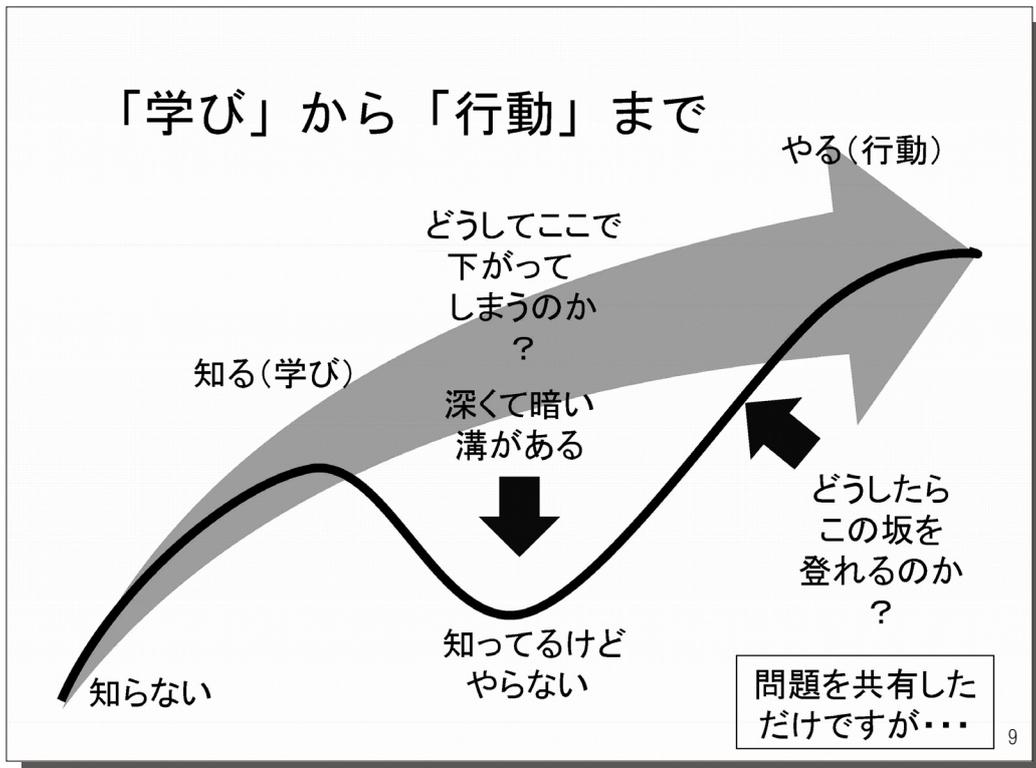
AC公共広告機構

 **知っているを、しているへ。**

地球温暖化については、毎日、情報があふれています。私たちはそのために何をしなければならないかをよく知っています。でも、実際に行動に移している人はどれくらいいるのでしょうか。地球温暖化は深刻です。知っているだけではダメです。ささやかなことでも、何かを始めなければなりません、と訴えかけます。

テーマ「身近な環境対策」
 広告会社：(株)電通北海道
 制作会社：(株)電通テック/(株)札幌テレビハウス/(株)イザ
 掲載メディア：テレビ/ラジオ/新聞/雑誌

8



環境教育から環境行動へ

「知る」から「する」へ

(段階としては)

第1段階 「学び」から「意識変革」へ

第2段階 「意識変革」から「行動」へ

上記 から に必要な要素を整理してみましょう

10

第1段階 「学び」から「意識変革」まで

環境保全の「意識」が
生まれる3要素

環境リスク
認知
(危機感)

責任帰属
認知
(責任感)

対処有効性
認知
(有効性)

これは深刻だ
かなりヤバイぞ

これは
自分の
責任だ

なんだ！
こうすれば
良く
なるんだ

「環境と消費の社会心理学－共益と私益のジレンマ－」
広瀬幸雄(1995)を元に、川嶋が最下段を作成

11

第2段階 「意識変革」から「行動」まで

環境保全の「行動」が生まれる
3要素

実行可能性
評価

便益費用
評価

社会規範
評価

僕にでも
出来そうだ

お金がなく
ても参加
出来そうだ

僕も行動
しないと
恥ずかしい

「環境と消費の社会心理学－共益と私益のジレンマ－」
広瀬幸雄(1995)を元に、川嶋が最下段を作成

12

ESD のEが意味すること

2009年7月12日

文責：中西紹一（立教大学ESD研究センター）

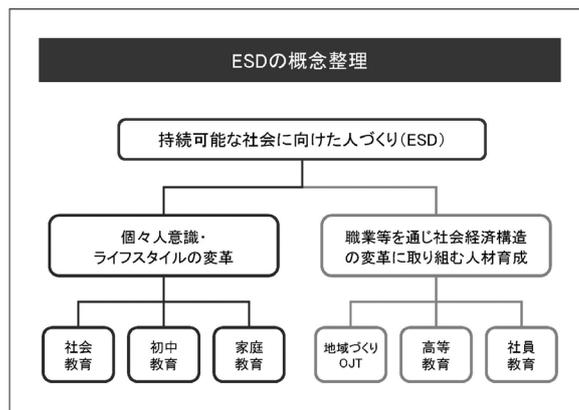
1

ESD (Education for Sustainable Development) 概念の整理

ESDをより簡潔に表現
するならば、
それは「持続可能な社
会に向けた人づくり」
「持続可能な社会を創
るための人づくり」

キーワードとしての

育成



2007年6月17日公開セミナーにおける白石賢司氏(環境省環境教育推進室)報告
「EUにおけるESD最新事情～EUにおけるUNDESD会議報告～」資料より

2

「人材を育成する」際に見られる
2つの側面

① (狭義の) 教育

- 知識は脱文脈化できる、という主張から形成されている知識伝達の場。

② (広義の) 学習・学び

- 学習行為とは「共同体への参加」という実践の際に生じる一つの特徴。
- 学習は「状況に埋め込まれている」

3

参考) 正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation =LLP) の考え方

個々の学習者は、ひとまとまりの抽象的な知識の断片を獲得し、それを後に別の文脈に移して当てはめる、といったことはしない。むしろ、学習者は正統的周辺参加 (LLP) という、ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務を遂行する技能を獲得していくのである…つまり、学習はいわば参加という枠組みで生じる過程であり、個人の頭の中ではないのである。

状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加
ジーン・レイブ/エティエンヌ・ウェンガー著⁴

「状況に埋め込まれた学習」論は
教育と学びを、独立の営みと捉えている

学習カリキュラム

- 学習者の視点から見た日常実践における学習の資源が置かれている場。
- 学習カリキュラムは、単独で考えられるものではなく、教え込み的（didactic）なことばで操作されるものではない。

状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加
ジーン・レイブ/エティエンヌ・ウェンガー著⁵

ESDの「Education」を捉える際に
何故「状況に埋め込まれた学習」の例を挙げたのか？

持続可能性（Sustainability）には

脱文脈化できる領域（教育的）

脱文脈化できない領域（学習的）

の双方がある

双方の視点を踏まえた「対話」こそが
持続可能な開発のための第一歩

6

脱文脈化できる／脱文脈化できない
双方が混在した問題の例

例えば太陽光発電・・・

脱文脈化できる

(「教育」的側面が強い)

再生可能性エネルギーこそが地球を救う。

脱文脈化できない

(「学習」的側面が強い)

シリコンのリサイクルは？
珪石の産出先は？
⋮

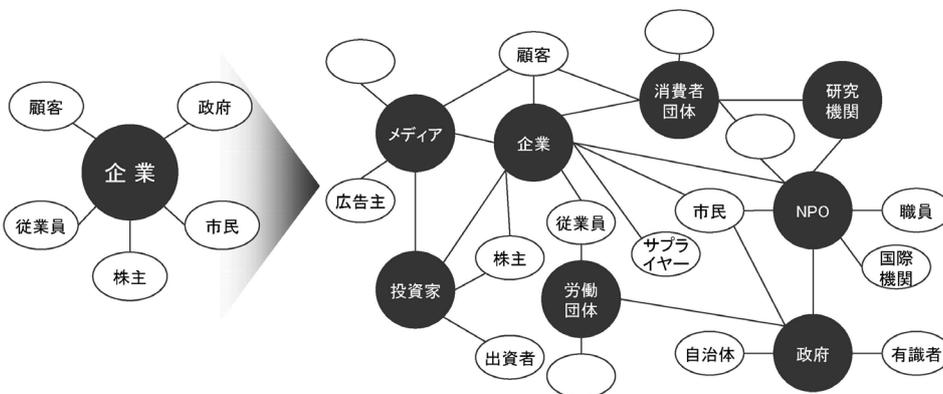
あるべき未来
へ向かう対話が必要

7

ステークホルダーとの「対話」が一層重要な要素となる
ISO26000

CSR時代の
エンゲージメント

ISO26000時代=SR時代のエンゲージメント



株式会社損害保険ジャパン CSR・環境推進室長 関正雄氏
提供資料より

8

ESD × CSR SDの“D”とは

2009.07.12

立教大学ESD研究センター研究員

中野民夫

(株)博報堂／ワークショップ企画プロデューサー
／立教大学院・明大・聖心女子大兼任講師)

1

開発／発展についてもっと話そう！

- 有限の地球の中で無限の経済成長を前提とした「開発／発展」は、行き詰まっている。
- Sustainable Developmentの訳は、持続可能な、「開発」？それとも「発展」「成長」？
- そもそも「開発／発展」って何だったの？
- だいたい、これまでの「開発／発展」って、根本的に見直さなきゃでしょ！
- 今必要な「開発／発展」について、もっと議論しようよ！

2

“Development”とは？

- “development”を英和辞書で引くと、
 - 発達、発育、成長(growth)
 - 発展(progress)
 - 開発、造成
 - 進化(発展、発達)の結果、新事実
 - <数>展開、<写>現像、<音>展開(部)
- “sustainable”:維持[継続]できる

3

“Sustainable Development”

- 持続可能な「**開発**」？
 - 「開発」=(天然資源を)生活に役立つようにすること
- 持続可能な「**発展**」？
 - 「発展」=さかえゆくこと。「経済の-」
- 持続可能な「**成長**」？
 - 「成長」=育って大きくなること
- 訳の違いだけでは済まない本質的な問題！

4

先進国と途上国のズレ

- ヨハネスブルグサミット(2002)で実感
- 先進国のニュアンス
 - 持続可能な、開発／発展
 - 環境危機克服には抑制して持続可能にしないと！
- 途上国のニュアンス
 - 持続可能な、**開発／発展**
 - 先進国がおかしくしてきた世界。自分たちはまだまだ開発／発展が必要！

5

『経済成長がなければ
私たちは豊かになれないのだろうか』

ダグラス・ラミス著、
平凡社ライブラリー刊より、

6

経済発展はひとつのイデオロギー

(思想傾向、政治や社会に対する考え方)

- ある友人:「アメリカはまだ発展できるね。街の近くに森があるから」
 - 経済発展のイメージ: 世界中で森林がどこかに残っていれば、まだ発展が終わっていない。
- これは20世紀の経済発展イデオロギーの大前提。
 - 「経済発展が必要である」という点に関しては、自由主義者、保守主義者、民族主義者、ファシスト、レーニン／スターリン主義者もみんな共有していたものの考え方。
 - このイデオロギーはいったい何だったのか？

7

経済発展イデオロギーが生まれた瞬間

- アメリカ大統領トルーマンの1949年就任演説
 - アメリカには新しい政策がある。=未開発の国々に対して技術的、経済的援助を行い、そして投資をして発展させる。
- 「未開発(アンダーデヴェロップド)の国々」という用語は、それ以前には使われていなかった。
- 「発展(デヴェロップメント)」という言葉がトルーマンの演説で変えられた。
 - 「発展」が初めて国策になった。
 - 発展させられる国は、アメリカではない別の国

8

「発展する」は本来自動詞

- 「国Aは国策として国Bを発展させる(開発する)、それが国Bの発展である」
- 日本語の「発展」や「成長」もそうだが、英語の「発展する(デヴェロップ)」は、本来自動詞。他動詞ではない。
 - だからふさわしくないように聞こえる。
 - 国Aが国Bの「発展」を政策としているのに、その表現は自動詞ということになって、大きな矛盾。

9

「発展」は作り変えられた言葉

- “develop”
 - 本来の反対は“envelop”「包む」こと。風呂敷や紙に包む
- その反対、「ほどく」「とく」、紙や布に包まれた何かを出す、という意味。
 - たとえば、蕾が花になる、種がだんだん成長して植木になる、子どもが大人になる、とか。
 - 主に生き物の、生命あるものの成長のこと。
 - ある段階から次の段階へ変わっていく変化。前段階の中に、後の段階が組み込まれ内在されている。
 - 前段階の可能性が次の段階で実現する。

10

- 日本語の「成長」=「育って大きくなること」、
「発展」=「伸びて広がること」は、developと
ほとんど同じイメージ。
- 「開発」=「開き起こすこと」(これは他動詞)
- 一種の構造に従うような変化を「発展」と呼ぶ。
 - 完全に人工的な変化は「発展」ではない。
 - 陶器を作るとき粘土で形を作る。
 - 木を倒し木材にして建物を建てる。
 - 森林を伐採して駐車場にする。
 - これらを発展とは呼ばない。

11

「未開発」は「野蛮人」の言い換え

- 世界中の金持ちではない国を「発展させる」のがア
メリカの国策と言い出したのはトルーマンが最初。
- その後半世紀にわたり、経済発展はアメリカ、国連
の政策として続けられてきた。
 - 地球上のすべての文化、社会、経済、人の生き方、自然、
あらゆることを変えるこれほど大規模な国策というのは人
類史上に例がない。
 - 西洋の経済制度に入っていない国はすべて「未開発」と
呼ぶ。アマゾンの先住民も北米インディアンもエジプトも。
 - 「キリスト教徒」と「異教徒」。「文明国」と「野蛮」、「ヨーロッ
パ」と「ヨーロッパ以外」。
 - 「野蛮(バルバリアン)」が「未開発」に置き換わった。

12

そして搾取は見えなくなった

- トルーマンの演説の頃
 - 第二次世界大戦直後で植民地を持つてはいけない。
 - 第三世界に対してアメリカが一番力を持っていた。
 - 冷戦が始まり、第三世界で激しい覇権競争。
 - 好景気のアメリカは投資をする場所を探していた。
- 数年前から、グローバリゼーション
 - 植民地主義も、帝国主義もグローバリゼーション。
 - しかし、今よりも正直な側面があった。つまり、「これは搾取である」ということをみんなが意識していた。
- 20世紀の後半になって、経済発展イデオロギーが主流になると、搾取されることが結果的に自分の利益につながるというごまかしはかなり成功し、搾取される側にも定着。
 - つまり、本来他動詞であることが、まるで自動詞であるかのような錯覚を与えることに成功した。

13

- これを「発展」と呼べば、あたかも、それぞれの文化、文明、社会のなかに隠されていた可能性が解放されるかのようなイメージ。
 - 花が咲くような。子どもが成長するような。
 - 「搾取」という言葉とはだいぶ違うことを指している。
 - 「世界中のあらゆる文化のなかには、産業革命を起こして産業国になる内在的な可能性がある」という言い方。
 - これにたくさんの人が説得された。
- 外から資本が入り、自然を壊し、伝統的な文化を怖し、搾取する。植民地時代と同じ。
 - それを「発展」と呼べば、その社会の、自然で当たり前な、決定された過程であると思えてくる。
 - 内政干渉ではなく発展、搾取ではなく発展、暴力的な変化ではなく発展。内在的な能力を解放するようなイメージに。

14

スラムは近代建築だ

- 私たちが経済発展と呼んでいること、それは地球上のすべての人間、すべての自然を産業経済システムの中に取り入れること。
 - グローバリゼーションは新しい現象ではなく、植民地時代から進行し、今やこの資本主義、産業経済システムは地球の隅々まで根づいた。
- 経済発展とは「スラムの世界」を「高層ビルの世界」へと少しずつ変身させる過程だというのは錯覚であって、ごまかし。
 - 経済発展の過程によって、昔あったさまざまな社会が「高層ビルとスラムの世界」になってきたのが、20世紀の歴史的事実。
- 経済発展は、南北問題を解決するのではなく、原因の一つなのです。

15

開発(かいはつ)から開発(かいほつ)へ

『仏教・開発・NGO

タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』

(西川潤・野田真里編、新評論刊)より

16

(前段)「内発的発展論」

endogenous development

- 途上国の「開発」=西欧化という近代化論のアンチテーゼとして登場。
- 日本では鶴見和子が、
 - 先進国の模倣ではない、伝統、社会構造など、自己の社会に内在するものの上に立ちながら、外来の開発モデルを自己の社会の条件に適合するよう創りかえていく発展のあり方を「内発的発展論」とよんだ。(1976)
- それぞれの社会にはそれぞれの発展の道筋がある
- 内発的発展を促す=「住民」は支援を受ける対象ではなく、それを活用する主体となる。

17

開発=「かいほつ」と「かいほつ」

- アジア諸国で、経済至上主義的な開発路線を批判し、市民社会の民衆による「もう一つの発展」をめざす内発的発展の動きが広がっている。
 - とくにタイでは、仏教の革新と僧と連帯する知識人・NGOの独自の開発運動が進展。
- 西洋近代をモデルとした従来の「外発的・他律的な経済中心の開発」から、独自の伝統文化や共生の智慧(仏教)に基づく「内発的・自律的な人間中心の開発」への、開発のパラダイム転換が起きている
 - この新しいパラダイム、仏教に根ざしたオルタナティブな内発的発展、仏教的開発の思想と実践を「開発(かいほつ)」と呼ぶことにしよう。

18

- 開発:「○○を開発する」(他動詞)として用いられ、「上から／外発的・他律的に、人為的に」のニュアンス。
 - 自然を切り開き資源を人間社会の役に立てること、未開の土地や社会を切り開いて近代的なものにしていくこと。
 - 江戸時代の「新田開発」に始まり、北海道拓殖開発など。
- しかし、「開発」という語は、本来自動詞的意味。
 - 英語の”development”の語源:封じ込まれていたもの、包まれていたものが解き放たれる、という意味。
- 日本においては元来「開発」は仏教用語として用いられてきた。
 - 仏教用語の「開発(かいほつ)」は、現在の開発とは全くニュアンスが異なり、「内から／内発的・自律的に、自然に」という意味合い。

19

- 開発(かいほつ) = 上から、外発的・他律的、人為的
- 「開発(かいほつ)」 = 内から、内発的・自律的、自然に
- 仏教においては、人間を含む一切衆生は、悟りを開き、仏になる潜在能力である仏性を備えている。
 - 仏性とは、この地球社会や宇宙を司る相互依存の法則(縁起の法)という自然・人・社会の本来のあり方に目覚め、生あるものすべてに慈しみを持ち、あらゆる苦から解き放たれていく能力。本来の人間性・自然性。
- 「この仏性を仏教の実践を通じて開花させていくことこそ、仏教でいう「開発(かいほつ)」

20

パッターナーとパワーナー

タイの学僧パユット師

- パッターナー(かいほつ):タンハ(貪欲)に基づいて他律的・外発的に物質的富を増やすこと
 - この物欲に基づく開発こそが今日のタイ経済成長の原動力。
 - だが同時に、格差・貧困・環境破壊・人心や共同体崩壊などの問題を生み出した。
- パワーナー(かいほつ):チャンタ(精進意欲)に基づいて「心の開発」(瞑想)を行い、物欲を自制しつつ、掠奪的でない自律的・内発的な調和の取れた節度ある開発／発展をめざすもの

21

開発(かいほつ)とは

- 仏教という一宗教を超えて、地球社会全体の共生や真の開発／発展のあり方に対する普遍的な示唆を与えている。
- 今日的に定義し直せば、「開発(かいほつ)」とは、「我々の社会や個人が、その本来のあり方や生き方に目覚め、自然および他の社会や個人との共生のために、苦からの解放をめざして、智慧と慈悲をもって自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく、物心両面における内発的な実践」といえる(西川・野田)

22

今必要なdevelopmentとは？

23

相互依存(縁起)の理解を

- すべてのものには、わかたれて独立した実体はない。
(空、無我)
 - 一枚の葉の中に、太陽、水、土、時間、空間、心を観る
- 無常: すべてのものは固定的ではなく、関係(縁)の中で発生し、常に移り変わる「現象」である。
 - それなのにこだわると苦しみを生む。
 - 「動的平衡」(福岡伸一)
 - 生体を構成する分子、組織は常に更新され続け、環境は常に私たちの身体を通り抜けている。あるのは流れでしかない。流れ自体が「生きている」ということ。

24

自利と利他をひとつに

- 「自利」＝自分の利益。自分を利すること
- 「利他」＝自分を犠牲にして他人に利益を与えること。他人の幸福を願うこと。(⇔利己)
- グローバルな社会の中で、あるいは生命世界の中で、私たちはつながっている。
 - 世界の環境も社会も決して無関係ではあり得ず、自分だけの安全や幸せはない。
- 従って、この両者をひとつにすることが課題
 - 「持続可能な開発／発展」: 現世代と将来世代
 - CSR: 自社とステークホルダー・社会
 - 社会・組織・集団と個人の生き方

25

自然から学ぶ

- 「自然」は日本ではもともと「じねん」
 - “nature”の訳語として、明治以降使われた
 - 「自ずから然り」
 - 「おのずとそうなる様」を表した福祉／形容詞
 - 内発性／自発性のヒントがありそう
- 生命世界が相互依存関係の中で個体としての誕生・成長・死を繰り返しながら、種や全体として継続している姿から、学ぶことは多い
 - 「自然が先生」

26

参加型で学ぶ

- 自発性を引き出し育むには、知識の一方的な伝達では無理。
- 自ら参加し、コミュニケーションの相互作用の中で、「他人事」が「自分事」になる。
- 当事者意識や主体性が深まり、コミットメントが自然に出てくる。
- 知恵も力も「関係」の中から生まれる。
- 「ワークショップ」や「ファシリテーション」の意義

27

「幸福感受性」を高める

- 「豊かさ」「幸せ」って何だろう？
- GNPからGNH(ブータン)
- 「足るを知る」
- 社会のシステムを考えるのと同時に、幸福感受性を高めること、感受性の解放に取り組むことが大事(見田宗介)
- 宮澤賢治:『農民芸術概論綱要』

28

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する
新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは 銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

われらは世界のまことの幸福を索ねよう

求道すでに道である

宮澤賢治『農民芸術概論綱要』「序論」より

29

ESD × CSR

30

持続可能性の「三つの公正」

(阿部治氏より教示)

(1)「世代間」の公正:

将来の世代につけを残さない

(孫や未来の子どもたち、7世代先を考える)

未来世代
(時間軸)



(2)「世代内」の公正:

社会的弱者につけを回さない

(途上国の児童労働、南北や国内の格差)

社会的弱者
(空間軸)



(3)「種間」の公正:

人間だけでなく生態系から考える

(地球は万物の母、生物の多様性を守る)

自然生態系
(人と自然の
関係軸)

31

つまり、「持続可能な社会」に向けての
企業活動や市民の生活は、

自分たちだけでなく、

1. 将来の世代(未来)

2. 途上国や社会的弱者(他者)

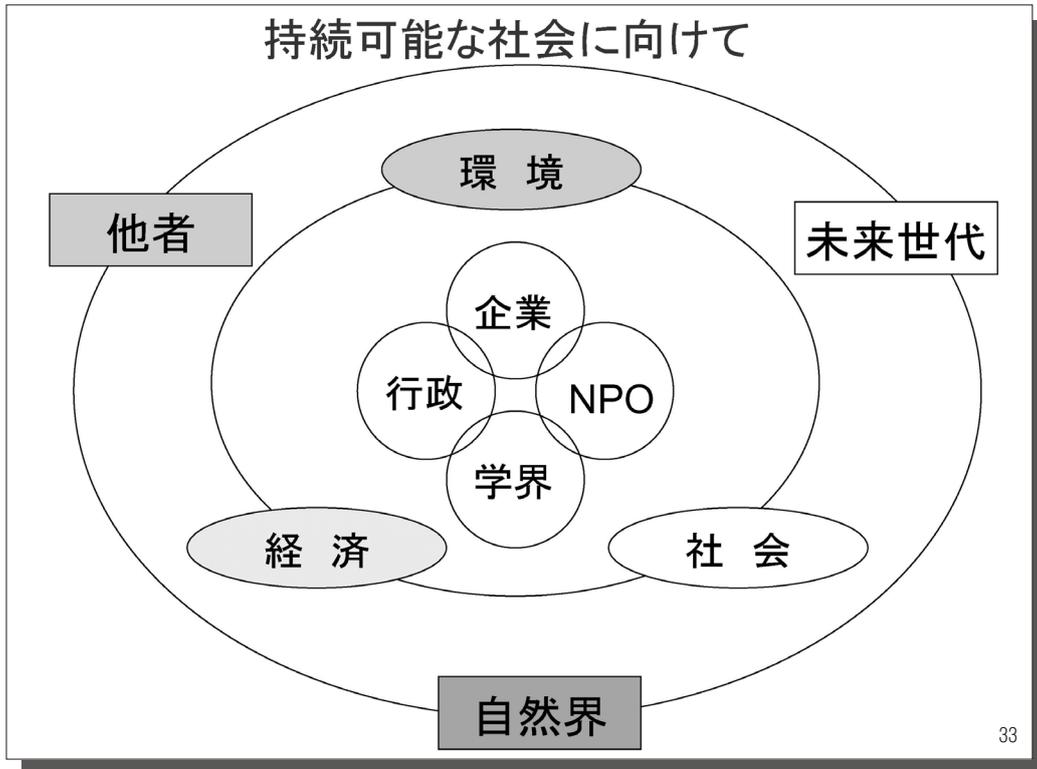
3. 生きとし生けるもの(自然)

のことを配慮し、責任を持つことが不可欠に!

この視点が、CSRの基礎であり評価にも重要!

その徹底は容易ではない。

32



しかし、人間はそこまでなかなか考えられない。

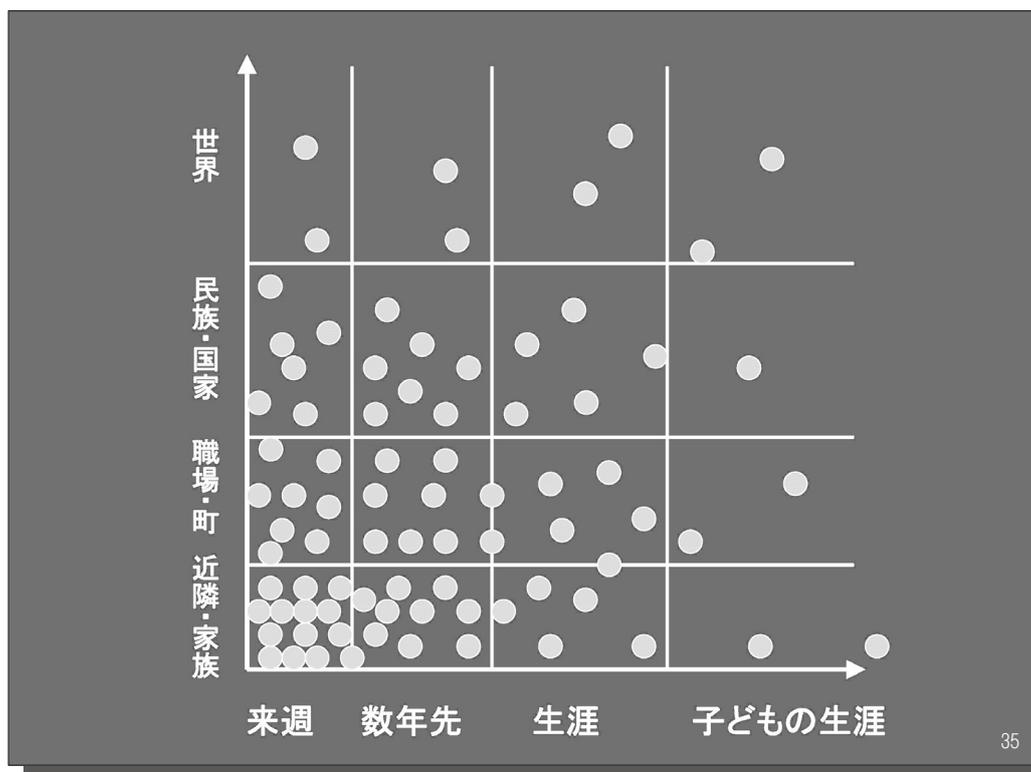
人間の視野

『成長の限界』(1972年ローマクラブ「人類の危機」レポート

世界中のすべての人は、それぞれ注意と行動を必要とする一連の関心事と問題をかかえている。

地理的・空間的な広がり、
時間的な広がりがどれくらいあるか、

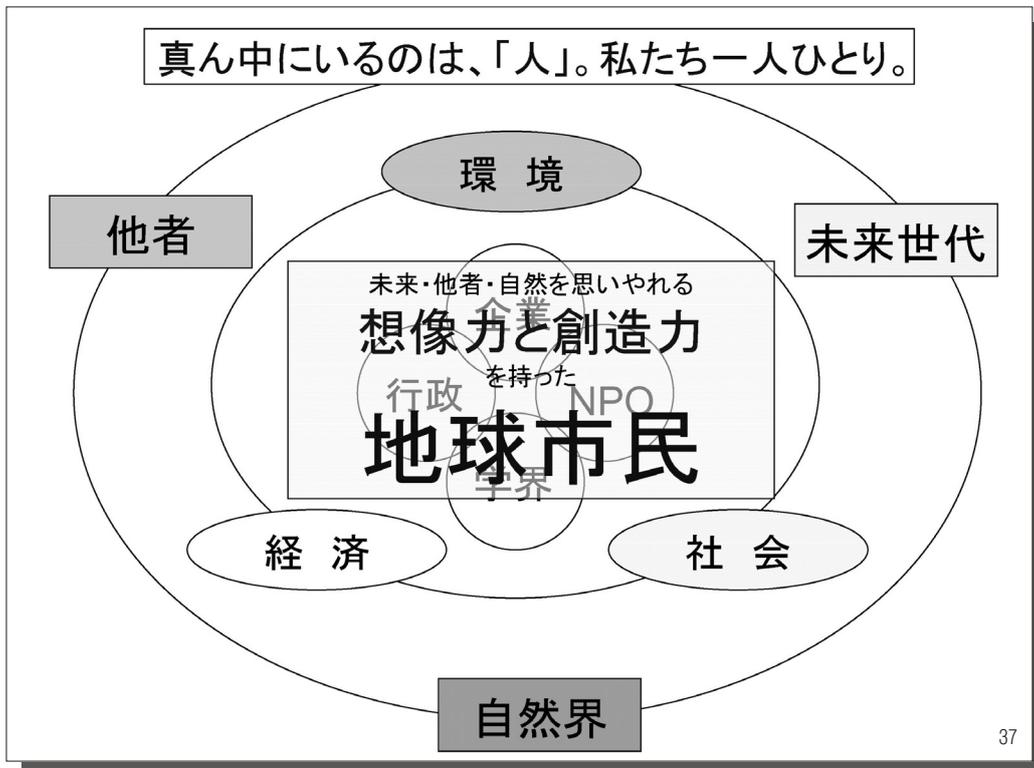
ほとんどの人々の関心は、グラフの左下に集中している。



ここにESDの存在意義

- ESD(持続可能な開発のための教育)
 - 1) 未来(将来世代、社会・地球の将来)、
 - 2) 他者(身近な他者～遠い他者)、
 - 3) 自然(生物多様性、生態系)、
 - への影響を想像でき、自分(たち)とこれらを共に
活かしあえる社会を創造できる人を育成する
- 想像力と創造力を養う
 - 「教育」も教え込むことでなく、本来引き出すこと
 - そのためにも、参加や体験、対話は不可欠
 - 「参加型」(ワークショップ、ファシリテーション)の意義

36



ESD × CSR

- サステナビリティをあらゆる分野／局面で考え応用できる人や環境を育む。
 - 企業など組織の中で前記のような意識を持って新たな企業・組織活動を創造し、持続可能な社会づくりに貢献できる人を触発し育てる。
- 「イントレプレナー」(アントレプレナー＝社会起業家の社内版)の誕生を促す。
 - 企業など既存組織内で新しいことを始めるのは大変なこと。多くの関係者を説得し巻き込み、形にすること、しかもビジネスにすることは並大抵ではない。
 - 共に考え、行動し、励まし合えるような仲間が必要

38

加藤尚武（環境倫理学）の 持続可能な開発の矛盾と限界

- 環境倫理の加藤尚武『新・環境倫理学のすすめ』より（別紙資料）
- **「成長か持続可能性か」という選択の可能性はない。**成長を続けていけば、必ず持続不可能という事態に到達するのだから、「成長から持続可能性へ何時自覚的に転換するか」という選択の余地があるだけである。
- 多くの人は「持続可能的発展を守る」というテーゼを承認したとしても、多少は持続可能性に配慮した発展を図るべきだと考えている。そして「持続可能性への配慮」という契機と発展という契機の配分比率について賢明な選択をすべきだと考えて、**結局は、「持続可能性への配慮」を最小限にしようと努力する。**
- **経済的に見てどれほど有利な化石燃料が残存しているにしても、それを使わず封印して、再生可能型エネルギー資源を開発することが、正しい選択**なのである。もちろん、化石燃料が温暖化の原因物質を排出するという理由も成り立つ。もしも石油が事実上無限に存在し枯渇しないとしたら、人類は地球温暖化の弊害を避けることができなくなる。

39

- 『ブルントランド委員会報告書』では、（中略）、結局、枯渇までの成り行きを見ながら利用するという方針を示している。
- ブルントランド委員会報告は、「最後には枯渇型資源への依存から脱却する」というシナリオを示さず、当面は資源の枯渇には直面しないという想定で、シナリオを書いたため、結局、可能な開発の限界を定めることができなかった。
- そこに、ヴォルフガング・ザックスが指摘しているような環境政策のひずみ（「持続可能性の位置づけは、いつの間にか自然から開発に移っていく。一言で言えば、持続可能性は自然の保護ではなく開発の保護になったのである」）をもたらす結果になった原因がある。（以上、加藤）

↓

今や、経済成長、それも化石燃料に頼った経済成長と、持続可能性は両立しない、とはっきり認識するところから考えることが必要ではないか？

40

GNH：国民総幸福量

- ~GNHの根本をなすもの~ 平山修一 <http://www.gnh-study.com/index.php>
- GNH は様々な場所で脚光を浴びている。発端となったのは小国の国王の発言から。
- 「*Gross National Happiness is more important than Gross National Product*」
- これは 1976 年（昭和 51 年）12 月、スリランカのコロンボにおける第 5 回非同盟諸国会議に出席後の記者会見席上での、当時 21 歳（国王就任 4 年目）の現国王の言葉。
- 国王はこの書面の中で、国民総生産（GNP）と国民総幸福度（GNH）は同様に大事。

- 次に GNH が国際的に評価を受けた最初の出来事は、1998 年韓国ソウルで行われた国連開発計画（UNDP）のアジア太平洋地域会議の席でのスピーチ。
- 当時のブータン王国首相、ジグミ・ティンレイ（Jigmi Y. Thinley）は席上、「Gross National Happiness はブータンの開発における最終的な目標である」と述べた。加えて「私達は私達に基本的な事を問う、どうやって物質主義と精神主義とのバランスを維持しつづけるか」と、先進国の示す発展型に対して大きな議題を投げかけた。
- これは簡単に解釈すると、「先進国に対しては経済成長だけがグローバルスタンダードではないと訴え、途上国には開発や援助による国造りが必ずしも万能ではないのではないか、人々が貧しくとも心豊かであればそれなりの幸福感のある社会が実現できるのではないかとの問題意識を投げかけている」と言い換えられるのではないだろうか。

41